

सुखं
रूपं

伽 gāthā 多

迷 色
迷 色

流 波
流 波

目次

流波伽他	
伽多	3
二聲の伽多	7
四聲の伽多	11
*複聲部	17
九偈の伽多//ブーゲンビリア/花、色葉、あふれ/散乱し、それら/色彩のかおり	
九偈の伽多	23
二聲の伽多	25
四聲の伽多	28
*複聲部	32
十偈の伽多//ゆらぐ。何?/陽炎。それら/色彩ら/色などもはや	
十偈の伽多	37
二聲の伽多	39
四聲の伽多	42
*複聲部	46
十二偈の伽多//見ていたのは、沙羅/何? 沙羅/その綺羅/眼差しに綺羅ら	
十二偈の伽多	51
二聲の伽多	53
四聲の伽多	56
*複聲部	61
十九偈の伽多//そのほほ笑みに/沙羅。もてあそぶ/白濁を。ひとり/匂いの停滞	
十九偈の伽多	67
二聲の伽多	70
四聲の伽多	75
*複聲部	82
三十一偈の伽多//ただ匂いたつ/昏い目に沙羅は/赤裸々に臭気/悪臭のけもの	
三十一偈の伽多	89
二聲の伽多	93
四聲の伽多	100

* 複聲部	111
十四偈の伽多//それは陽炎/陽炎、沙羅/綺羅と綺羅/あわい散乱	
十四偈の伽多	117
二聲の伽多	120
四聲の伽多	124
* 複聲部	130
二十一偈の伽多//捨てられた/すでに/言葉など、沙羅/屍	
二十一偈の伽多	135
二聲の伽多	138
四聲の伽多	143
* 複聲部	151
十二偈の伽多//燃えた/沙羅、綺羅/綺羅ら/海は	
十二偈の伽多	157
二聲の伽多	159
四聲の伽多	162
* 複聲部	167
十五偈の伽多//見たもの。沙羅/あなたが/それは/海。…沙羅	
十五偈の伽多	173
二聲の伽多	176
四聲の伽多	180
* 複聲部	186
十四偈の伽多//あなたは見ていた/沙羅/その目/昏く、ただ狂暴な	
十四偈の伽多	191
二聲の伽多	194
四聲の伽多	198
* 複聲部	204
二十四偈の伽多//すべて生きられた/すでに/すべて/なにもかも	
二十四偈の伽多	209
二聲の伽多	213
四聲の伽多	218
* 複聲部	226
十四偈の伽多//もうすぐ空は/沙羅/破れるだろう/明日には、ほら	
十四偈の伽多	231
二聲の伽多	234
四聲の伽多	238
* 複聲部	244

十二偈の伽多//沙羅。ほほ笑み/ブーゲンビリアの/花の翳りに/沙羅、その	
十二偈の伽多	251
二聲の伽多	253
四聲の伽多	256
*複聲部	261
二十一の伽多//化ものら/沙羅、それは/それは、沙羅/だから怪物ら	
二十一の伽多	267
二聲の伽多	270
四聲の伽多	275
*複聲部	283
七偈の伽多//さらさらと沙羅/色彩のはじく/さらさらと/響き	
七偈の伽多	291
二聲の伽多	293
四聲の伽多	295
*複聲部	298
十九偈の伽多//何故、沙羅/沙羅、何故/あなたはその/光の中に	
十九偈の伽多	303
二聲の伽多	306
四聲の伽多	311
*複聲部	318
十六偈の伽多//ふりそそぐ/沙羅、その肌/あざやかに/照らし出し	
十六偈の伽多	323
二聲の伽多	326
四聲の伽多	330
*複聲部	336
十四偈の伽多//憩いな？/沙羅、それは/陽だまりの蛇、その/停滞	
十四偈の伽多	341
二聲の伽多	344
四聲の伽多	348
*複聲部	354
二十三偈の伽多//あざやかな？…何が？/沙羅、その色彩/沙羅、それ/震えて	
二十三偈の伽多	359
二聲の伽多	363
四聲の伽多	368
*複聲部	377
二十一偈の伽多//散る。沙羅/だから沙羅/見る。沙羅/その翳りの群れ	

二十一偈の伽多	385
二聲の伽多	388
四聲の伽多	393
*複聲部	401
十三偈の伽多//匂う？/沙羅、匂い/匂う？/その匂い	
十三偈の伽多	407
二聲の伽多	409
四聲の伽多	412
*複聲部	417
十八偈の伽多//散華、ほら/散る。沙羅/飛び散り/沙羅。ほら	
十八偈の伽多	423
二聲の伽多	426
四聲の伽多	430
*複聲部	437
二十四偈の伽多//散乱/沙羅、庭/散乱/その乱れはいま	
二十四偈の伽多	443
二聲の伽多	447
四聲の伽多	453
*複聲部	462
十七偈の伽多//雨だよ/沙羅、ほら/それら/雨	
十七偈の伽多	467
二聲の伽多	470
四聲の伽多	474
*複聲部	481
十五偈の伽多//食るものら/噉らう/食り噉らうものら/噉らい	
十五偈の伽多	487
二聲の伽多	490
四聲の伽多	494
*複聲部	500
七偈の伽多//沙羅は笑った/笑った/ひとりで/だから癡呆	
七偈の伽多	505
二聲の伽多	507
*複聲部	509
四聲の伽多	511
十偈の伽多//沙羅。死ななかつた/だれも/すでに/もはや	
十偈の伽多	517

二聲の伽多	519
四聲の伽多	522
*複聲部	526
三偈の伽多//目をあけて/沙羅。その/きれいな/綺羅ら。その虹彩	
三偈の伽多	531
二聲の伽多	532
四聲の伽多	533
*複聲部	535
五偈の伽多//世界はやさしい/みんなにやさしい/化ものたち/前例もない	
五偈の伽多	539
二聲の伽多	540
四聲の伽多	542
*複聲部	545

四聲の伽多	549
二聲の伽多	553
九偈の伽多	556
奥書	558

流波伽他

伽多

捧げられるべきは
ふれた
見なかった
燃え上がった
乗り越えるものたち
色彩は
わたしを
色彩は
かれら、すでに
燃え上がった
わたしは
ふれた
生をも、死をも

捧げられるべきは
咬んだ
見なかった
折れた
安らがないものたち
あたたかみは
あなたを
あたたかみは
かれら、つねに
折れた
あなたは
咬んだ
有にも、無にも

捧げられるべきは
聞いた
見なかった

擦られた
無知なるものたち
香りは
わたしを
香りは
かれら、今など
擦られた
あなたは
聞いた
過去、未来をも

捧げられるべきは
嗅いだ
見なかった
罅われ
立ち去らないものたち
ざわめきは
あなたを
あざわめきは
かれら、すでに
罅われ
わたしは
嗅いだ
あとかたなくも

捧げられるべきは
だから
なにもなく
すべて失った須臾に
すでに知るものたち
言葉さえも
礙げるものなどなにも
言葉さえも
それらの不在
すべて失った須臾に
なにもない眼差しに
だから
彼方、此方の

褐色の

あざやかに色づく
それは沙羅、その
色彩に名づけた

沙羅と。…沙羅
何故？
その花は白
白く、ただ、白く散るから

その目は昏く
ほほ笑んでさえも
狂暴の綺羅
その狂いに名づけた

沙羅と。…沙羅
何故？
その花は白
白く、ただ、白く散るから

笑う沙羅は
沙羅は癡呆
知性などない
その恥辱に名づけた

沙羅と。…沙羅
何故？
その花は白
白く、ただ、白く散るから

何を見る？ 沙羅
そのまなざしに、侮辱以外に
そのくちびるに、軽蔑以外に
何を知る？ 沙羅

白く、ただ、白く散るから
その花は白
何故？
沙羅と。…沙羅

その恥辱に名づけた

知性などない
沙羅は癡呆
笑う沙羅は

白く、ただ、白く散るから
その花は白
何故？
沙羅と。…沙羅

その狂いに名づけた
狂暴の綺羅
ほほ笑んでさえも
その目は昏く

白く、ただ、白く散るから
その花は白
何故？
沙羅と。…沙羅

その色彩に名づけた
それは沙羅、いま
あざやかに色づく
褐色の色ら

綺羅ら、沙羅
散る綺羅散り沙羅
綺羅ら散る沙羅
沙羅ら、綺羅

二聲の伽多

褐色の

焰たち

あざやかに色づく

燃える雨は

それは沙羅、その

ふりそそぐ

色彩に名づけた

沙羅と。…沙羅

目などないよ

何故？

誰れもがないよ

その花は白

ただの孔

白く、ただ、白く散るから

その目は昏く

干からびた風

ほほ笑んでさえも

風の発火

狂暴の綺羅

巻き上がる

その狂いに名づけた

沙羅と。…沙羅

口などないよ

何故？

誰れもがないよ

その花は白

ただの孔

白く、ただ、白く散るから

笑う沙羅は
空に墜ちた
沙羅は癡呆
もう、ほら青い
知性などない
燃え立つ海は
その恥辱に名づけた

沙羅と。…沙羅
顔さえないよ
何故？
誰れもがないよ
その花は白
ただの孔
白く、ただ、白く散るから

何を見る？ 沙羅
正気のふりしろ
そのまなざしに、侮辱以外に
涎れがしぶく
そのくちびるに、軽蔑以外に
まともなふりしろ
何を知る？ 沙羅

白く、ただ、白く散るから
ただの孔
その花は白
誰れもないよ
何故？
顔さえないよ
沙羅と。…沙羅

その恥辱に名づけた
燃え立つ海は
知性などない
もう、ほら青い
沙羅は癡呆
空に墜ちた
笑う沙羅は

白く、ただ、白く散るから
ただの孔
その花は白
誰れもないよ
何故？
口などないよ
沙羅と。…沙羅

その狂いに名づけた
巻き上がる
狂暴の綺羅
風の発火
ほほ笑んでさえも
干からびた風
その目は昏く

白く、ただ、白く散るから
ただの孔
その花は白
誰れもないよ
何故？
目などないよ
沙羅と。…沙羅

その色彩に名づけた
ふりそそぐ
それは沙羅、いま
燃える雨は
あざやかに色づく
焰たち
褐色の色ら

綺羅ら、沙羅
見てほらすてき
散る綺羅散り沙羅
きらきらすてき
綺羅ら散る沙羅
見てほらみんな
沙羅ら、綺羅

四聲の伽多

褐色の

うつくしい

焰たち

ひたすらに

あざやかに色づく

かけがえもない

燃える雨は

かけがえもない

それは沙羅、その

ひたすらに

ふりそそぐ

うつくしい

色彩に名づけた

沙羅と。…沙羅

あなたは綺羅めき

目などないよ

うつくしい

何故？

ただ留保もなく

誰れもがないよ

ただ留保なく

その花は白

うつくしい

ただの孔

あなたは綺羅めき

白く、ただ、白く散るから

その目は昏く

うつくしい

干からびた風

無慚なほど
ほほ笑んでさえも
痛ましいほど
風の発火
痛ましいほど
狂暴の綺羅
無慚なほど
巻き上がる
うつくしい
その狂いに名づけた

沙羅と。…沙羅
あなたはかがやき
口などないよ
うつくしい
何故？
ただ留保もなく
誰れもがないよ
ただ留保もなく
その花は白
うつくしい
ただの孔
あなたはかがやき
白く、ただ、白く散るから

笑う沙羅は
うつくしい
空に墜ちた
むごたらしいほど
沙羅は癡呆
泣き叫ぶほど
もう、ほら青い
泣き臥すほど
知性などない
むごたらしいほど
燃え立つ海は
うつくしい
その恥辱に名づけた

沙羅と。…沙羅

あなたはイノチ
顔さえないよ
うつくしい
何故？
この世の光り
誰れもないよ
あまりに貴い
その花は白
うつくしい
ただの孔
あなたはイノチ
白く、ただ、白く散るから

何を見る？ 沙羅
生きて
正気のふりしろ
生きてなぜなら
そのまなざしに、侮辱以外に
うつくさそのもの
涎れがしぶく
うつくしさそのもの
そのくちびるに、軽蔑以外に
生きてなぜなら
まともなふりしろ
生きて
何を知る？ 沙羅

白く、ただ、白く散るから
うつくしい
ただの孔
あなたはイノチ
その花は白
あまりに貴い
誰れもないよ
この世の光り
何故？
あなたはイノチ
顔さえないよ
うつくしい
沙羅と。…沙羅

その恥辱に名づけた
もごたらしいほど
燃え立つ海は
うつくしい
知性などない
泣き臥すほど
もう、ほら青い
泣き叫ぶほど
沙羅は癡呆
うつくしい
空に墜ちた
むごたらしいほど
笑う沙羅は

白く、ただ、白く散るから
うつくしい
ただの孔
あなたはかがやき
その花は白
ただ留保もなく
誰れもないよ
ただ留保もなく
何故？
あなたはかがやき
口などないよ
うつくしい
沙羅と。…沙羅

その狂いに名づけた
無慚なほど
巻き上がる
うつくしい
狂暴の綺羅
痛ましいほど
風の発火
痛ましいほど
ほほ笑んでさえも
うつくしい
干からびた風

無慚など
その目は昏く

白く、ただ、白く散るから

うつくしい

ただの孔

あなたは綺羅めき

その花は白

ただ留保もなく

誰れもないよ

ただ留保もなく

何故？

あなたは綺羅めき

目などないよ

うつくしい

沙羅と。…沙羅

その色彩に名づけた

ひたすらに

ふりそそぐ

うつくしい

それは沙羅、いま

かけがえもない

燃える雨は

かけがえもない

あざやかに色づく

うつくしい

焰たち

ぶち撒けた？

褐色の色ら

綺羅ら、沙羅

咬み咬みちぎれ

見てほらすてき

ちんちらら

散る綺羅散り沙羅

ちぎれ喰え

きらきらすてき

ちんちらら

綺羅ら散る沙羅

ちぎっちゃえ
見てほらみんな
ちんちんちらちら
沙羅ら、綺羅

*複聲部

○1

焰たち
燃える雨は
ふりそそぐ

目などないよ
誰れもがないよ
ただの孔

干からびた風
風の発火
巻き上がる

口などないよ
誰れもがないよ
ただの孔

空に墜ちた
もう、ほら青い
燃え立つ海は

顔さえないよ
誰れもがないよ
ただの孔

正気のふり
ほら
まともなふり

ただの孔
誰れもないよ

顔さえないよ

燃え立つ海は
もう、ほら青い
空に墜ちた

ただの孔
誰れもないよ
口などないよ

巻き上がる
風の発火
干からびた風

ただの孔
誰れもないよ
目などないよ

ふりそそぐ
燃える雨は
焰たち

見てほらすてき
きらきらすてき
見てほらみんな

○2
うつくしい
かけがえもない
ひたすらに

あなたは綺羅めき
ただ留保もなく
うつくしい

うつくしい
痛ましいほど
無慚なほど

あなたはかがやき
ただ留保もなく
うつくしい

うつくしい
泣き叫ぶほど
むごたらしいほど

あなたはイノチ
この世の光り
うつくしい

生きて
うつくさそのもの
生きてなぜなら

うつくしい
あまりに貴い
あなたはイノチ

もごたらしいほど
泣き臥すほど
うつくしい

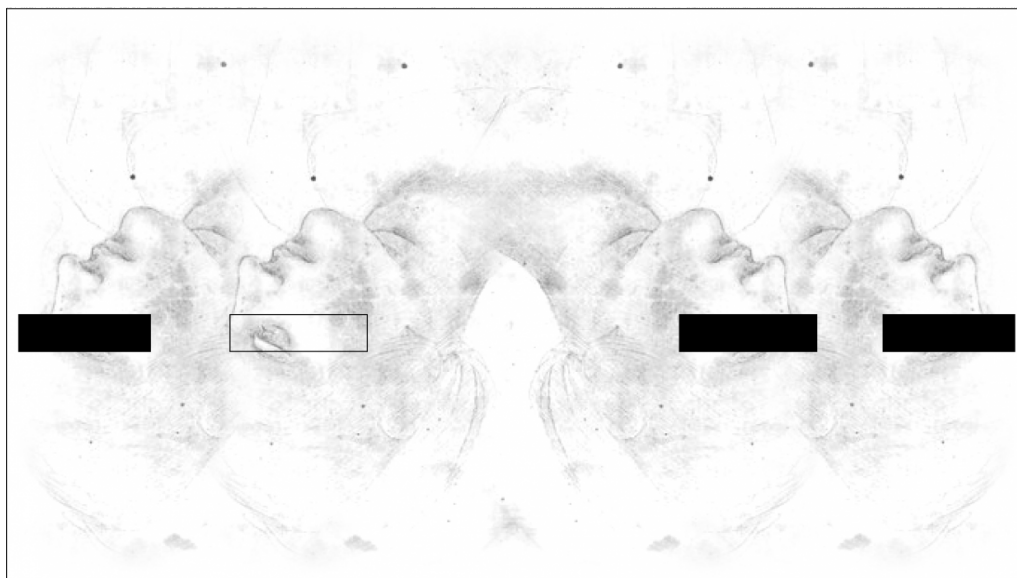
うつくしい
ただ留保もなく
あなたはかがやき

無慚なほど
痛ましいほど
うつくしい

うつくしい
ただ留保もなく
あなたは綺羅めき

ひたすらに
かけがえもない
うつくしい

散る散った
とび散った
舞い舞った



九偈の伽多//ブーゲンビリア/花、色葉、あふれ/散
乱し、それら/色彩のかおり

九偈の伽多

ブーゲンビリア
花、色葉、あふれ
散乱し、それら
色彩のかおり

翳り。庭に
光り。庭に
横溢し、その
それは何？

眞夏。光り
正午。翳り
あふれかえり、その
それは何？

いちどもなかった
わたしがわたしであったことなど
いちども
すでに

なにも生まれも滅びもなにも
さらすべきなにも、かたちもなにも
隠すべきなにも、秘密もなにも
なにも在りも消え去りもなにも

すでに
いちども
あなたがあなたであったことなど
いちどもなかった

それは何？

あふれかえり、その
正午。翳り
眞夏。光り

それは何？
横溢し、その
光り。庭に
翳り。庭に

色彩のかおり
散乱し、それら
花、色葉、あふれ
ブーゲンビリア

二聲の伽多

ブーゲンビリア
すでにひろがり
花、色葉、あふれ
燃え盡き
散乱し、それら
すでに
色彩のかおり

翳り。庭に
焰。その
光り。庭に
彩色。不可視
横溢し、その
ゆらぎ
それは何？

眞夏。光り
焰。その
正午。翳り
かたち。不可視
あふれかえり、その
ゆらぎ
それは何？

いちどもなかった
陽炎のよう
わたしがわたしであったことなど
蝶らのように
いちども
陽炎のように
すでに

なにも生まれも滅びもなにも
なんら差異など
さらすべきなにも、かたちもなにも
焔と蝶に
隠すべきなにも、秘密もなにも
なんら差異など
なにも在りも消え去りもなにも

すでに
陽炎のように
いちども
蝶らのように
あなたがあなたであったことさえ
陽炎のよう
いちどもなかった

それは何？
ゆらぎ
あふれかえり、その
かたち。不可視
正午。翳り
焔。その
眞夏。光り

それは何？
ゆらぎ
横溢し、その
彩色。不可視
光り。庭に
焔。その
翳り。庭に

色彩ら、かおり
すでに
散乱し、それら
燃え盡き
花、色葉、あふれ
すでにひろがり
ブーゲンビリア

四聲の伽多

ブーゲンビリア
 ゆらぐ
すでにひろがり
 ゆらぎ
花、色葉、あふれ
 色彩。それら
燃え盡き
 色彩。それら
散乱し、それら
 ゆらぎ
すでに
 ゆらぐ
色彩ら、かおり

翳り。庭に
 捕らわれ
 焰。それら
 蝶ら
光り。庭に
 何に？
 彩色。不可視
 何に？
横溢し、その
 蝶ら
 ゆらぎ
 捕らわれ
それは何？

眞夏。光り
 ちぎられ
 焰。それら

蝶ら
正午。光り
 何に？
かたち。不可視
 何に？
あふれ、翳り、その
 蝶ら
 ゆらぎ
 ちぎられ
それは何？

いちどもなかった
 ゆらぎ
陽炎のよう
 散り交う
わたしがわたしであったことなど
 蝶ら
 蝶らのように
 蝶ら
いちども
 散り交う
 陽炎のように
 ゆらぎ
すでに

なにも生まれも滅びもなにも
 瀑布。もはや
 なんら差異など
 暴流。もはや
さらすべきなにも、かたちもなにも
 ゆらぐ色ら
 焰と蝶に
 ゆらぐ色ら
隠すべきなにも、秘密もなにも
 暴流。もはや
 なんら差異など
 瀑布。もはや
なにも在りも消え去りもなにも
すでに

散り交う
陽炎のように
ゆらぐ
いちども
蝶ら
蝶らのように
蝶ら
あなたがあなたであったことさえ
ゆらぐ
陽炎のよう
散り交う
いちどもなかった

それは何？
ちぎられ
ゆらぎ
蝶ら
あふれかえり、その
何に？
かたち。不可視
何に？
正午。翳り
蝶ら
焰。それら
ちぎられ
眞夏。光り

それは何？
捕らわれ
ゆらぎ
蝶ら
横溢し、その
何に？
彩色。不可視
何に？
光り。庭に
蝶ら
焰。それら
捕らわれ
翳り。庭に

色彩ら、かおり
 ゆらぎ
すでに
 ゆらぐ
散乱し、それら
 色彩。それは
燃え盡き
 それは色彩
花、色葉、あふれ
 ゆらぐ
すでにひろがり
 ゆらぎ
ブーゲンビリア

*複聲部

○1

すでにひろがり

燃え盡き

すでに

焰。その

彩色。不可視

ゆらぎ

焰。その

かたち。不可視

ゆらぎ

陽炎のよう

蝶らのように

陽炎のように

なんら差異など

焰と蝶に

なんら差異など

○2

ゆらぐ

色彩。それら

ゆらぎ

捕らわれ

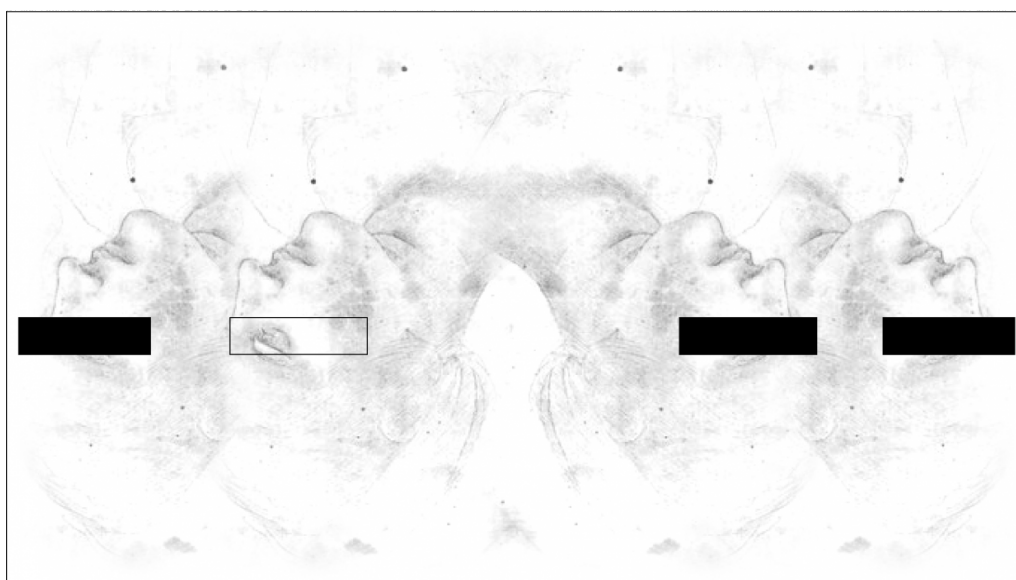
何に？

蝶ら

ちぎられ
何に？
蝶ら

ゆらぎ
蝶ら
散り交う

瀑布。もはや
ゆらぐ色ら
暴流。もはや



十偈の伽多//ゆらぐ。何？/陽炎。それら/色彩ら/
色などもはや

十偈の伽多

ゆらく。何？
陽炎。それら
色彩ら
色などもはや

すでに、沙羅
その哄笑。何故？
沙羅、ほら
ひとり

息遣い
聲の漏れ
唇に。沙羅
沙羅はいま

咬みちぎるように？
笑み、沙羅、綺羅ら
昏い眸に
綺羅、昏いまま

虹彩。綺羅ら
陽炎ら、それら
色彩ら、不在
綺羅ら、沙羅

沙羅、綺羅ら
色彩ら、不在
陽炎ら、それら
虹彩。綺羅ら

綺羅、昏いまま

昏い眸に
笑み、沙羅、綺羅ら
咬みちぎるように？

沙羅はいま
唇に、沙羅
聲の漏れ
息遣い

ひとり
沙羅、ほら
その咲笑。——何故？
すでに、沙羅

色などもはや
色彩ら
陽炎。それら
ゆらぐ。何？

二聲の伽多

ゆらく。何？

ふるえるよ

陽炎。それら

沙羅

色彩ら

ふるえるよ

色などもはや

すでに、沙羅

たゆたうよ

その哄笑。何故？

ほら

沙羅、見て

たゆたうよ

ひとり

息遣い

ほほ笑みのよう

聲の漏れ

顔のない

唇に。沙羅

ほほ笑みのよう

沙羅はいま

咬みちぎるように？

消えたよ

笑み、沙羅、綺羅ら

もう、その

昏い眸に

星さえも

綺羅、昏いまま

虹彩。綺羅ら
終わったよ
陽炎ら、それら
もう
色彩ら、不在
夜さえ
綺羅ら、沙羅

沙羅、綺羅ら
わたしたちの夜
色彩ら、不在
わたしたちさえ
陽炎ら、それら
終わったよ
虹彩。綺羅ら

綺羅、昏いまま
星さえも
昏い眸に
もう、沙羅
笑み、沙羅、綺羅ら
消えたよ
咬みちぎるように？

沙羅はいま
ほほ笑みのよう
唇に、沙羅
顔のない
聲の漏れ
ほほ笑みのよう
息遣い

ひとり
たゆたうよ
沙羅、見て
ほら
その哄笑。何故？
たゆたうよ
すでに、沙羅

色などもはや
ふるえるよ
色彩ら
沙羅
陽炎。それら
ふるえるよ
ゆらぐ。何？

四聲の伽多

ゆらく。何？

孕め

ふるえるよ

いま

陽炎。それら

破滅

沙羅

破滅

色彩ら

いま

ふるえるよ

孕め

色などもはや

すでに、沙羅

明かせ

たゆたうよ

いま

その哄笑。何故？

殲滅

ほら

殲滅

沙羅、見て

いま

たゆたうよ

明かせ

ひとり

息遣い

見て

ほほ笑みのよう

あざやかな
聲の漏れ
朝焼け
顔のない
朝焼け
唇に。沙羅
あざやかな
ほほ笑みのよう
見て
沙羅はいま

咬みちぎるように？
見て
消えたよ
燃える
笑み、沙羅、綺羅ら
朝焼け
もう、その
朝焼け
昏い眸に
燃える
星さえも
見て
綺羅、昏いまま

虹彩。綺羅ら
紅蓮さえ
終わったよ
すでに
陽炎ら、それら
消えた
もう
消えた
色彩ら、不在
すでに
夜さえ
紅蓮さえ
綺羅ら、沙羅

沙羅、綺羅ら

すでに
わたしたちの夜
紅蓮さえ
色彩ら、不在
消えた
わたしたちさえ
消えた
陽炎ら、それら
紅蓮さえ
終わったよ
すでに
虹彩。綺羅ら

綺羅、昏いまま
燃える
星さえも
見て
昏い眸に
朝焼け
もう、沙羅
朝焼け
笑み、沙羅、綺羅ら
見て
消えたよ
燃える
咬みちぎるように？

沙羅はいま
あざやかな
ほほ笑みのよう
見て
唇に、沙羅
朝焼け
顔のない
朝焼け
聲の漏れ
見て
ほほ笑みのよう
あざやかな
息遣い

ひとり

いま

たゆたうよ

明かせ

沙羅、見て

殲滅

ほら

殲滅

その咲笑。何故？

明かせ

たゆたうよ

いま

すでに、沙羅

色などもはや

いま

ふるえるよ

孕め

色彩ら

破滅

沙羅

破滅

陽炎。それら

孕め

ふるえるよ

いま

ゆらぐ。何？

*複聲部

○1

ふるえるよ

沙羅

ふるえるよ

たゆたうよ

沙羅

たゆたうよ

ほほ笑みのよう

顔のない

ほほ笑みのよう

消えたよ

もう、沙羅

星さえも

終わった

もう、沙羅

夜さえも

わたしたちの夜

わたしたちさえ

終わったよ

○2

孕む

破滅

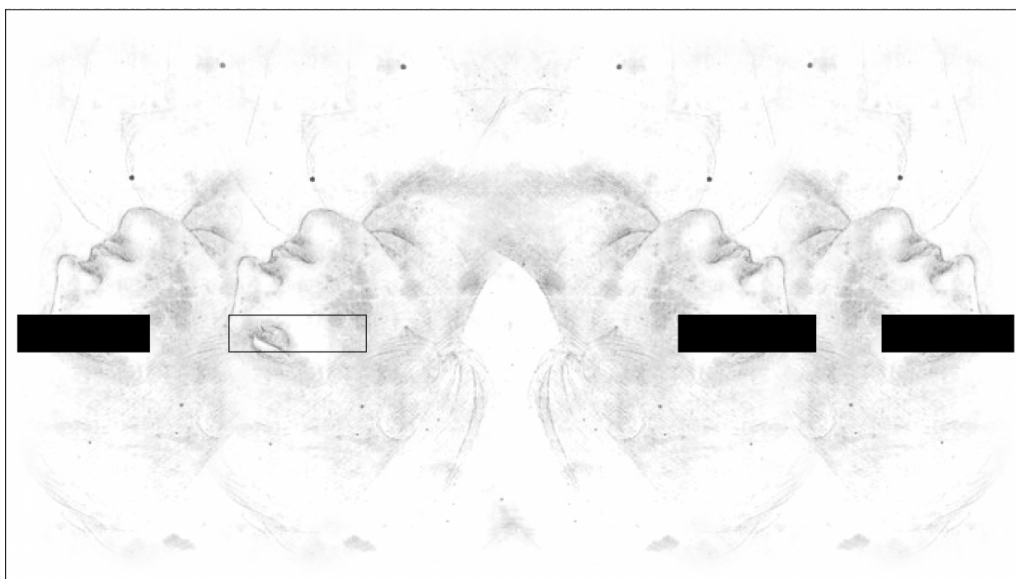
いま

明かす
殲滅
いま

見て
朝焼け
あざやかな

見て
朝焼け
燃える

紅蓮さえ
消えた
すでに



十二偈の伽多//見ていたのは、沙羅/何？ 沙羅/そ
の綺羅/眼差しに綺羅ら

十二偈の伽多

見ていたのは、沙羅
何？ 沙羅
その綺羅
眼差しに綺羅ら

昏む。目が
眩み、光り
差す光り、失神
いつか眼に

空
海と空——空
…の下に
海

綺羅の群れら
沙羅。それら
綺羅ら
群らがりの綺羅

まばたきの沙羅
狂暴。その二秒
昏い目のまま
ほほ笑んでさえ

けだものの沙羅
笑んだ。その
昏い目で
ほら、沙羅

いま、沙羅

昏い目で
笑んだ。その
けだものの沙羅

ほほ笑んでさえ
昏い目のまま
狂暴。その二秒
まばたきの沙羅

群がりの綺羅
綺羅ら
沙羅。それら
綺羅の群れら

海
…の下に
空、と海——空
空

いつか眼に
差す光り、失神
眩み、光り
昏む。目が

眼差しに綺羅ら
その綺羅
何？ 沙羅
見ていたのは、沙羅

二聲の伽多

見ていたのは、沙羅

聞こえた？

何？ 沙羅

ほら

その綺羅

響き、沙羅

眼差しに綺羅ら

昏む。目が

聞こえた？

眩み、光り

ほら

差す光り、失神

響き、かすかに

いつか眼に

空

散った

海と空——空

飛沫

…の下に

飛び散った

海

綺羅の群れら

ふるえ

沙羅。それら

しづく

綺羅ら

わななき

群らがりの綺羅

まばたきの沙羅
イノチら、横溢
狂暴。その二秒
氾濫。それ
昏い目のまま
量り知れず
ほほ笑んでさえ

けだものの沙羅
イノチら、充溢
笑んだ。その
なにもなかった
昏い目で
なかったにも等しく
ほら、沙羅

いま、沙羅
なかったにも等しく
昏い目で
なにもなかった
笑んだ。その
イノチら、充溢
けだものの沙羅

ほほ笑んでさえ
量り知れず
昏い目のまま
氾濫。それ
狂暴。その二秒
イノチら、横溢
まばたきの沙羅

群がりの綺羅
わななき
綺羅ら
しづく
沙羅。それら
ふるえ
綺羅の群れら

海

飛び散った
…の下に
飛沫
空、と海——空
散った
空

いつか眼に

響き、かすかに
差す光り、失神
ほら
眩み、光り
聞こえた？
昏む。目が

眼差しに綺羅ら

響き、沙羅
その綺羅
ほら
何？ 沙羅
聞こえた？
見ていたのは、沙羅

四聲の伽多

見ていたのは、沙羅

いま

聞こえた？

ふれた？

何？ 沙羅

もう

ほら

もう

その綺羅

ふれた？

響き、沙羅

いま

眼差しに綺羅ら

昏む。目が

いま

聞こえた？

感じた？

眩み、光り

もう

ほら

もう

差す光り、失神

かんじた？

響き、かすかに

いま

いつか眼に

空

暴流

散った

瀑布
海と空——空
すべては
飛沫
すべては
…の下に
瀑布
飛び散った
暴流
海

綺羅の群れら
焔のように
ふるえ
燃え
沙羅。それら
みずから
しづく
みずから
綺羅ら
燃え
わななき
焔のように
群らがりの綺羅

まばたきの沙羅
なにも焼かれは
イノチら、横溢
なにものも
狂暴。その二秒
なにもかも
氾濫。それ
なにもかも
昏い目のまま
なにものも
量り知れず
なにも焼かれは
ほほ笑んでさえ

けだものの沙羅

燃えあがりさえ
イノチら、充溢
なにものも
笑んだ。その
なにも
なにもなかった
なにも
昏い目で
なにものも
なかったにも等しく
燃えあがりさえ
ほら、沙羅

いま、沙羅
なにものも
なかったにも等しく
燃えあがりさえ
昏い目で
なにも
なにもなかった
なにも
笑んだ。その
燃えあがりさえ
イノチら、充溢
なにものも
けだものの沙羅

ほほ笑んでさえ
なにものも
量り知れず
なにも焼かれは
昏い目のまま
なにもかも
汨濫。それ
なにもかも
狂暴。その二秒
なにも焼かれは
イノチら、横溢
なにものも
まばたきの沙羅

群がりの綺羅

燃え

わななき

焰のように

綺羅ら

みずから

しづく

みずから

沙羅。それら

焰のように

ふるえ

燃え

綺羅の群れら

海

瀑布

飛び散った

暴流

…の下に

すべては

飛沫

すべては

空、と海——空

暴流

散った

瀑布

空

いつか眼に

感じた？

響き、かすかに

いま

差す光り、失神

もう

ほら

もう

眩み、光り

いま

聞こえた？

感じた？
昏む。目が

眼差しに綺羅ら
ふれた？

響き、沙羅
いま

その綺羅
もう

ほら
もう

何？ 沙羅
いま

聞こえた？
ふれた？

見ていたのは、沙羅

*複聲部

○1

聞こえた？

ほら

響き、いくつもの

聞こえた？

ほら

響き、かすかに

散った

飛沫

飛び散った

ふるえ

しずく

わななき

イノチら、横溢

氾濫。それ

量り知れず

イノチら、充溢

なにもなかった

なかったにも等しく

○2

いま

もう

ふれた？

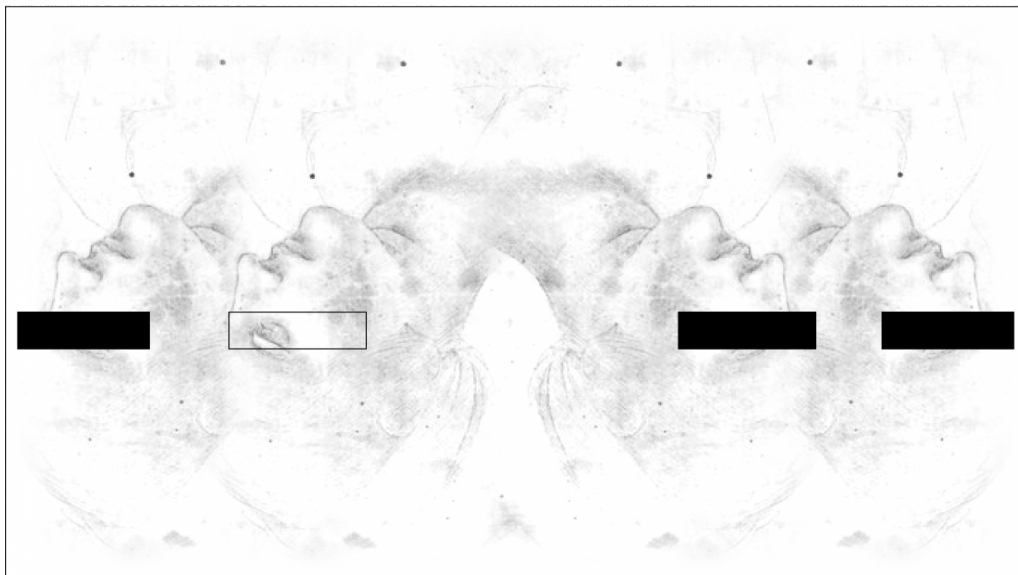
いま
もう
かんじた？

暴流
すべては
瀑布

焰のように
みずから
燃え

なにも焼かれは
なにも
なにもものも

燃えあがりさえ
なにも
なにもものも



十九偈の伽多//そのほほ笑みに/沙羅。もてあそぶ/
白濁を。ひとり/匂いの停滞

十九偈の伽多

そのほほ笑みに
沙羅。もてあそぶ
白濁を。ひとり
匂いの停滞

のけぞらし
腕。その須臾に
匂う？ 褐色の
ゆびさき。すくい

流れた。背中
うつぶせの沙羅
垂れた。背筋
震え、落ち、沙羅

融ける白濁、いま
やさしい日差し
褐色の沙羅
窓越しに光り

にじむ白濁
その肌にさえ
映え、沙羅
綺羅。いま

狂暴な
沙羅、やさしい息
沙羅、匂う？
白濁、沙羅、綺羅

のけぞる沙羅に

沙羅の顎
匂う？ 沙羅
その引き攣りの須臾に

笑む
沙羅、まばたき
昏い目に散る
虹彩、白濁

陽炎は頭上に
見ないで、沙羅
陽炎の色は？
かたちは？ ほら

にじむ陽炎は
沙羅。見ないで
頭上。見ないで
にじむ陽炎は

かたちは？ 沙羅
陽炎の色は？
見ないで、ほら
陽炎は頭上に

虹彩、白濁
昏い目に散る
沙羅、まばたき
笑む

その引き攣りの須臾に
匂う？ 沙羅
沙羅の顎
のけぞる沙羅に

白濁、沙羅、綺羅
沙羅、匂う？
沙羅、やさしい息
狂暴な

綺羅。いま

映え、沙羅
その肌にさえ
にじむ白濁

窓越しに光り
褐色の沙羅
やさしい日差し
融ける白濁、いま

震え、落ち、沙羅
垂れた。背筋
うつぶせの沙羅
流れた。背中

ゆびさき。すくい
匂う？ 褐色の
腕。その須臾に
のけぞらし

匂いの停滞
白濁を。ひとり
沙羅。もてあそぶ
そのほほ笑みに

二聲の伽多

そのほほ笑みに
まばたいた
沙羅。もてあそぶ
始めて知ったように
白濁を。ひとり
まるではじめて
匂いの停滞

のけぞらし
唇にふるえ
腕。その須臾に
始めて感じたように
匂う？ 褐色の
まるで、はじめて
ゆびさき。すくい

流れた。背中
鼻孔のおびえ
うつぶせの沙羅
始めて嗅いだように
垂れた。背筋
まるで、はじめて
震え、落ち、沙羅

融ける白濁、いま
なんどもふれた
やさしい日差し
肌は
褐色の沙羅
その白濁
窓越しに光り

にじむ白濁
なんどもふれた
その肌にさえ
うぶ毛にも
映え、沙羅
白濁
綺羅。いま

狂暴な
のけぞって
沙羅、やさしい息
舐めてもいいよ
沙羅、匂う？
その舌に
白濁、沙羅、綺羅

のけぞる沙羅に
引き攣りながら
沙羅の顎
舌を出し
匂う？ 沙羅
舐めてもいいよ
その引き攣りの須臾に

笑む
あなたのもの
沙羅、まばたき
沙羅
昏い目に散る
あなたは
虹彩、白濁

陽炎は頭上に
あざ笑う
見ないで、沙羅
痴呆の沙羅
陽炎の色は？
あざ笑う
かたちは？ ほら

にじむ陽炎は
軽蔑以外になにもしらない
沙羅。見ないで
化ものだから
頭上。見ないで
屈辱以外になにもしらない
にじむ陽炎は

かたちは？ 沙羅
あざ笑う
陽炎の色は？
痴呆の沙羅は
見ないで、ほら
あざ笑う
陽炎は頭上に

虹彩、白濁
あなたは
昏い目に散る
沙羅
沙羅、まばたき
いま
笑む

その引き攣りの須臾に
舐めてもいいよ
匂う？ 沙羅
舌を出し
沙羅の顎
引き攣りながら
のけぞる沙羅に

白濁、沙羅、綺羅
その舌に
沙羅、匂う？
舐めてもいいよ
沙羅、やさしい息
のけぞって
狂暴な

綺羅。いま

白濁

映え、沙羅

うぶ毛にも

その肌にさえ

なんどもゆらした

にじむ白濁

窓越しに光り

その白濁

褐色の沙羅

肌は

やさしい日差し

なんどもふれた

融ける白濁、いま

震え、落ち、沙羅

まるで、はじめて

垂れた。背筋

始めて嗅いだように

うつぶせの沙羅

鼻孔のおびえ

流れた。背中

ゆびさき。すくい

まるで、はじめて

匂う？ 褐色の

始めて感じたように

腕。その須臾に

唇にふるえ

のけぞらし

匂いの停滞

まるで、はじめて

白濁を。ひとり

始めて知ったように

沙羅。もてあそぶ

まばたいた

そのほほ笑みに

四聲の伽多

そのほほ笑みに

目は？

まばたいた

どこ？

沙羅。もてあそぶ

虹彩

始めて知ったように

虹彩

白濁を。ひとり

どこ？

まるではじめて

目は？

匂いの停滞

のけぞらし

口は？

唇にふるえ

どこ？

腕。その須臾に

昏い孔

始めて感じたように

昏い孔

匂う？ 褐色の

どこ？

まるで、はじめて

口は？

ゆびさき。すくい

流れた。背中

顔は？

鼻孔のおびえ

どこ？
うつぶせの沙羅
発狂した卵
始めて嗅いだように
発狂した卵
垂れた。背筋
どこ？
まるで、はじめて
顔は？
震え、落ち、沙羅

融ける白濁、いま
畸形？
なんどもふれた
變異種？
やさしい日差し
だれ？
肌は
だれ？
褐色の沙羅
變異種？
その白濁
畸形？
窓越しに光り

にじむ白濁
生きてる？
なんどもふれた
猶も
その肌にさえ
それでも？
うぶ毛にも
それでも？
映え、沙羅
猶も？
白濁
生きてる？
綺羅。いま

狂暴な

間違い？
のけぞって
あやまち？
沙羅、やさしい息
無慚な
舐めてもいいよ
無慚な
沙羅、匂う？
あやまち？
その舌に
間違い？
白濁、沙羅、綺羅

のけぞる沙羅に
前例などない
引き攣りながら
例外
沙羅の顎
あなたは
舌を出し
あなたは
匂う？ 沙羅
例外
舐めてもいいよ
前例などない
その引き攣りの須臾に

笑む
万象そのもの
あなたのもの
無邊なる轉生
沙羅、まばたき
永遠そのもの
沙羅
無盡の轉生
昏い目に散る
あなたはすべて
あなたは
轉生
虹彩、白濁

陽炎は頭上に

すべてはすでに生きられた

あざ笑う

未生のものさえ

見ないで、沙羅

すべて見られた

痴呆の沙羅

すべて見られた

陽炎の色は？

未生のものさえ

あざ笑う

すべてはすでに生きられた

かたちは？ ほら

にじむ陽炎は

散沙羅。孤独

軽蔑以外になにも知らない

あふれたよ

沙羅。見ないで

燦沙羅。孤立

化ものだから

とび散った

頭上。見ないで

讚沙羅。孤絶

屈辱以外になにも知らない

こぼれたよ

にじむ陽炎は

かたちは？ 沙羅

未生のものさえ

あざ笑う

すべてはすでに生きられた

陽炎の色は？

すべて見られた

痴呆の沙羅は

すべて見られた

見ないで、ほら

すべてはすでに生きられた

あざ笑う

未生のものさえ
陽炎は頭上に

虹彩、白濁
あなたはすべて
あなたは
轉生
昏い目に散る
永遠そのもの
沙羅
無盡の轉生
沙羅、まばたき
万象そのもの
いま
無邊なる轉生
笑む

その引き摺りの須臾に
例外
舐めてもいいよ
前例のない
匂う？ 沙羅
あなたは
舌を出し
あなたは
沙羅の顎
前例のない
引き摺りながら
例外
のけぞる沙羅に

白濁、沙羅、綺羅
あやまち？
その舌に
間違い？
沙羅、匂う？
無慚な
舐めてもいいよ
無慚な
沙羅、やさしい息

間違い？
のけぞって
あやまち？
狂暴な

綺羅。いま
猶も？
白濁
生きてる？
映え、沙羅
それでも
うぶ毛にも
それでも
その肌にさえ
生きてる？
なんどもゆらした
猶も？
にじむ白濁

窓越しに光り
變異種？
その白濁
畸形？
褐色の沙羅
だれ？
肌は
だれ？
やさしい日差し
畸形？
なんどもふれた
變異種？
融ける白濁、いま

震え、落ち、沙羅
どこ？
まるで、はじめて
顔は？
垂れた。背筋
発狂した卵
始めて嗅いだように

発狂した卵
うつぶせの沙羅
顔は？
鼻孔のおびえ
どこ？
流れた。背中

ゆびさき。すくい
どこ？
まるで、はじめて
口は？
匂う？ 褐色の
昏い孔
始めて感じたように
昏い孔
腕。その須臾に
口は？
唇にふるえ
どこ？
のけぞらし

匂いの停滞
どこ？
まるで、はじめて
目は？
白濁を。ひとり
虹彩
始めて知ったように
虹彩
沙羅。もてあそぶ
目は？
まばたいた
どこ？
そのほほ笑みに

* 複聲部

○1

まばたいた
始めて知ったように
まるで、はじめて

唇にふるえ
始めて感じたように
まるで、はじめて

鼻孔のおびえ
始めて嗅いだように
まるで、はじめて

なんどもふれた
肌は
その白濁

なんどもゆらした
うぶ毛にも
白濁

のけぞって
舐めてもいいよ
その舌に

引き攣りながら
舌を出し
舐めてもいいよ

いま
沙羅

あなたは

あざ笑う

痴呆の沙羅は

あざ笑う

軽蔑以外になにも知らない

化ものだから

屈辱以外になにも知らない

あなたは

沙羅

いま

舐めてもいいよ

舌を出し

引き攣りながら

その舌に

舐めてもいいよ

のけぞって

白濁

うぶ毛にも

なんどもゆらした

その白濁

肌は

なんどもふれた

まるで、はじめて

始めて嗅いだように

鼻孔のおびえ

まるで、はじめて

始めて感じたように

唇にふるえ

まるで、はじめて

始めて知ったように

まばたいた

○2

目は？

虹彩

どこ？

口は？

昏い孔

どこ？

顔は？

発狂した卵

どこ？

畸形？

だれ？

變異種？

生きてる？

それでも

猶も？

間違い？

無慚な

あやまち？

前例のない

あなたは

例外

万象そのもの

永遠そのもの

あなたはすべて

すべてはすでに生きられた

すべては見られた

未生のものさえ

散沙羅。孤独

燦沙羅。孤立
讚沙羅。孤絶

未生のものさえ
すべては見られた
すべてはすでに生きられた

あなたはすべて
永遠そのもの
万象そのもの

例外
あなたは
前例のない

あやまち？
無慚な
間違い？

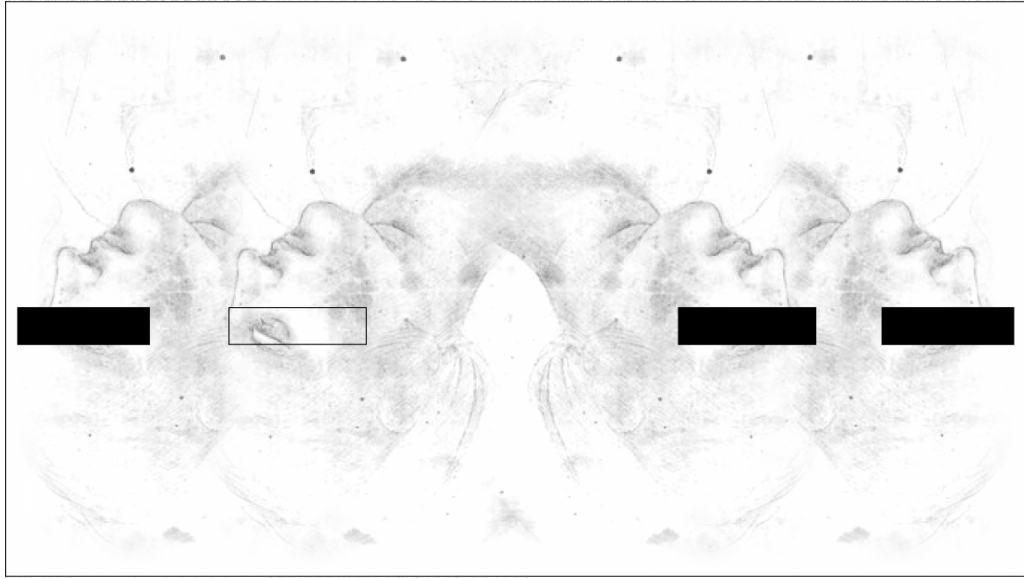
猶も？
それでも
生きてる？

變異種？
だれ？
畸形？

どこ？
発狂した卵
顔は？

どこ？
昏い孔
口は？

どこ？
虹彩
目は？



三十一偈の伽多//ただ匂いたつ/昏い目に沙羅は/
赤裸々に臭気/悪臭のけもの

三十一偈の伽多

ただ匂いたつ
昏い目に沙羅は
赤裸々に臭気
悪臭のけもの

褐色の肌
沙羅。それら
ふれた光りら
白濁の綺羅

匂いたつ
沙羅はひとり
臭気を放つ
肌の悪臭

褐色の沙羅
沙羅。それら
ゆらいだ光りら
蔓延る翳りら

沙羅。ほら
悪臭。あなたは
黴の生えた
褐色のバター

燃やした髪の毛
魚醤のミルク
野蠻な沙羅は
悪臭の沙羅

沙羅。ほら

異臭。あなたは
獣の唾液
噉いあらされた

死屍の肉汁
腐肉の繁殖
恥辱の沙羅は
悪臭の沙羅

沙羅。ほら
二度とない臭み
瘤なす樹液
雨の日の

濡れ土の香
獣らの柔毛
下劣の沙羅は
悪臭の沙羅

沙羅。その肌
その褐色に匂う
籠えたオイル
焦げたチーズ

褐色の沙羅
くさい化もの
おとなではなく
こどもではなく

その不遜、沙羅
何を？ 虹彩
軽蔑の綺羅
あやうい沙羅

見るものすべて
侮辱の色
その昏い目に
沙羅の綺羅

見なかった。虹彩に綺羅

愚劣以外に
癡妄以外に
見なかった。綺羅ら虹彩

綺羅の沙羅
その昏い目に
侮辱の色
見るものすべて

あやうい沙羅
軽蔑の沙羅
何を？ 虹彩
その不遜、綺羅

こどもではなく
おとなではなく
くさい化もの
褐色の沙羅

焦げたチーズ
籠えたオイル
その褐色に匂う
沙羅。その肌

悪臭の沙羅
下劣の沙羅
獣らの柔毛
濡れ土の香

雨の日の
瘤なす樹液
二度とない臭み
沙羅。ほら

悪臭の沙羅
恥辱の沙羅は
腐肉の繁殖
死屍の肉汁

噉いあらされた

獣の唾液
異臭。あなたは
沙羅。ほら

悪臭の沙羅
野蠻な沙羅は
魚醬のミルク
燃やした髪の毛

褐色のバター
黴の生えた
悪臭。あなたは
沙羅。ほら

蔓延る翳りら
ゆらいだ光りら
沙羅。それら
褐色の沙羅

悪臭の肌
臭気を放つ
沙羅はひとり
匂いたつ

白濁の綺羅
ふれた光りら
沙羅。それら
褐色の肌

悪臭のけもの
赤裸々に臭気
昏い目に沙羅は
ただ匂いたつ

二聲の伽多

ただ匂いたつ
ほら孔だから
昏い目に沙羅は
見ないだろう
赤裸々に臭気
無様な
悪臭のけもの

褐色の肌
孔だから
沙羅。それら
虫も巢噉わない
ふれた光りら
孔だから
白濁の綺羅

匂いたつ
孔ぼこだから
沙羅はひとり
嗅がないだろう
臭気を放つ
無様な
肌の悪臭

褐色の沙羅
孔だから
沙羅。それら
蛆も這わない
ゆらいだ光りら
孔だから
蔓延る翳りら

沙羅。ほら
陥没
悪臭。あなたは
わかる？
黴の生えた
お前は陥没
褐色のバター

燃やした髪の毛
ただの辱
魚醤のミルク
万象の辱
野蠻な沙羅は
恥辱の陥没
悪臭の沙羅

沙羅。ほら
陥没
異臭。あなたは
わかる？
獣の唾液
お前は陥没
噉いあらされた

死屍の肉汁
不意の失神
腐肉の繁殖
無防備な痴呆。その
恥辱の沙羅は
息吹きさえ障碍
悪臭の沙羅

沙羅。ほら
陥没
二度とない臭み
わかる？
瘤なす樹液
お前は陥没
雨の日の

濡れ土の香

剥き出しの裏切り

獣らの柔毛

容赦ない欠損

下劣の沙羅

無謀な損壊

悪臭の沙羅

沙羅。その肌

あなたに固有の

その褐色に匂う

意味などないから生れてこれた。だから

饅えたオイル

化もの

焦げたチーズ

褐色の沙羅

化ものら

くさい化もの

孔ら

おとなではなく

穿つ。唾液の飛沫ら

こどもではなく

その不遜、沙羅

悲惨？

何を？ 虹彩

孔だから。ただの

軽蔑の綺羅

孔だから

あやうい沙羅

見るものすべて

壊れない

侮辱の色

あなたは、沙羅

その昏い目に

永遠に

沙羅の綺羅

見なかった。虹彩に綺羅
 陥没。恥辱
愚劣以外に
 孔ひらく。ひらき
癡妄以外に
 陥没。愚劣
見なかった。綺羅ら虹彩

綺羅の沙羅
 永遠に
その昏い目に
 あなたは、沙羅
侮辱の色
 壊れない
見るものすべて

あやうい沙羅
 孔だから
軽蔑の沙羅
 孔だから。ただの
何を？ 虹彩
 悲惨？
その不遜、綺羅

こどもではなく
 穿つ。唾液の飛沫ら
おとなではなく
 孔ら
くさい化もの
 化ものら
褐色の沙羅

焦げたチーズ
 化もの
餿えたオイル
 意味などないから生れてこれた。だから
その褐色に匂う
 あなたに固有の
沙羅。その肌

悪臭の沙羅

無謀な壊損

下劣の沙羅

容赦ない欠損

獣らの柔毛

剥き出しの裏切り

濡れ土の香

雨の日の

お前は陥没

瘤なす樹液

わかる？

二度とない臭み

陥没

沙羅。ほら

悪臭の沙羅

息吹きさえ障碍

恥辱の沙羅は

無防備な痴呆。その

腐肉の繁殖

不意の失神

死屍の肉汁

噉いあらされた

お前は陥没

獣の唾液

わかる？

異臭。あなたは

陥没

沙羅。ほら

悪臭の沙羅

恥辱の陥没

野蠻な沙羅は

万象の辱

魚醤のミルク

ただの辱

燃やした髪の毛

褐色のバター
お前は陥没
黴の生えた
わかる？
悪臭。あなたは
陥没
沙羅。ほら

蔓延る翳りら
孔だから
ゆらいだ光りら
蛆も這わない
沙羅。それら
孔だから
褐色の沙羅

悪臭の肌
無様すぎた
臭気を放つ
嗅がないだろう
沙羅はひとり
孔ぼこだから
匂いたつ

白濁の綺羅
孔だから
ふれた光りら
虫も巢噉わない
沙羅。それら
孔だから
褐色の肌

悪臭のけもの
無様すぎた
赤裸々に臭気
見ないだろう
昏い目に沙羅は
ほら孔だから
ただ匂いたつ

四聲の伽多

ただ匂いたつ
 花ら。花
ほら孔だから
 嗅いだ
昏い目に沙羅は
 誰もが
見ないだろう
 誰もが
赤裸々に臭気
 嗅いだ
無様な
 花ら。花
悪臭のけもの

褐色の肌
 見止めた目ら
孔だから
 嗅ぎだすもの
沙羅。それら
 匂うもの
虫も巢噉わない
 匂うもの
ふれた光りら
 嗅ぎだすもの
孔だから
 見止めたら
白濁の綺羅

匂いたつ
 花ら。花
孔ぼこだから

嗅がれた
沙羅はひとり
 どれもが
嗅がないだろう
 どれもが
臭気を放つ
 嗅がれた
無様な
 花ら。花
肌の悪臭

褐色の沙羅
 見止めた目ら
孔だから
 鼻になぶるもの
沙羅。それら
 鼻に舐めるもの
蛆も這わない
 鼻に舐めるもの
ゆらいだ光りら
 鼻になぶるもの
孔だから
 見止めたら
蔓延る翳りら

沙羅。ほら
 すてきだよ
陥没
 かおり
悪臭。あなたは
 その色
わかる？
 その色
黴の生えた
 かおり
お前は陥没
 すてきだよ
褐色のバター

燃やした髪の毛

夢のよう
ただの辱
見出した夢の
魚醤のミルク
蝶が風のなか
万象の辱
蝶が風のなか
野蠻な沙羅は
見出した夢の
恥辱の陥没
夢のよう
悪臭の沙羅

沙羅。ほら
きれいだよ
陥没
かおり
異臭。あなたは
その色
わかる？
その色
獣の唾液
かおり
お前は陥没
きれいだよ
噉いあらされた

死屍の肉汁
幻のよう
不意の失神
幻のよう
腐肉の繁殖
戀が朝焼けに
無防備な痴呆。その
戀が朝焼けに
恥辱の沙羅は
映したころの
息吹きさえ障碍
幻のよう
悪臭の沙羅

沙羅。ほら

うっとりするよ

陥没

かおり

二度とない臭み

その色

わかる？

その色

瘤なす樹液

かおり

お前は陥没

うっとりするよ

雨の日の

濡れ土の香

気配のよう

剥き出しの裏切り

置いてた名残り

獣らの柔毛

春がどこかに

容赦ない欠損

春がどこかに

下劣の沙羅

置いてた名残り

無謀な損壊

気配のよう

悪臭の沙羅

沙羅。その肌

さらさら

あなたに固有の

花はふるえて

その褐色に匂う

さらさら

意味などないから生れてこれた。だから

さらさら

饅えたオイル

花はふるえて

化もの

さらさら
焦げたチーズ

褐色の沙羅

るうるら
化ものら
震らゆれて
くさい化もの
るうるら
孔ら
るうるら
おとなではなく
震らゆれて
穿つ。唾液の飛沫ら
るうるら
こどもではなく

その不遜、沙羅

ゆれるのは
悲惨？
誰の見た？
何を？ 虹彩
誰の風景？
孔だから。ただの
誰の風景？
軽蔑の綺羅
誰の見た？
孔だから
ゆれるのは
あやうい沙羅

見るものすべて

ゆれるのは
壊れない
誰の夢？
侮辱の色
どんな風景？
あなたは、沙羅
どんな風景？
その昏い目に

誰の夢？
永遠に
ゆれるのは
沙羅の綺羅

見なかった。虹彩に綺羅
おはよう！ 世界よ
陥没。恥辱
すてきだよ！
愚劣以外に
ごきげんよう！
孔ひらく。ひらき
ごきげんよう！
癡妄以外に
すてきだよ！
陥没。愚劣
おはよう！ 世界よ
見なかった。綺羅ら虹彩

綺羅の沙羅
誰の夢？
永遠に
ゆれるのは
その昏い目に
どんな風景？
あなたは、沙羅
どんな風景？
侮辱の色
ゆれるのは
壊れない
誰の夢？
見るものすべて

あやうい沙羅
誰の見た？
孔だから
ゆれるのは
軽蔑の沙羅
誰の風景？
孔だから。ただの

誰の風景？
何を？ 虹彩
 ゆれるのは
悲惨？
 誰の見た？
その不遜、綺羅

こどもではなく
 雫らゆれて
穿つ。唾液の飛沫ら
 るうらるら
おとなではなく
 るうらるら
孔ら
 るうらるら
くさい化もの
 るうらるら
化ものら
 雫らゆれて
褐色の沙羅

焦げたチーズ
 花はふるえて
化もの
 さらさら
饅えたオイル
 さらさら
意味などないから生れてこれた。だから
 さらさら
その褐色に匂う
 さらさら
あなたに固有の
 花はふるえて
沙羅。その肌

悪臭の沙羅
 落とした名残り
無謀な壊損
 落とした名残り
下劣の沙羅

春がどこかに
容赦ない欠損
春がどこかに
獣らの柔毛
気配のよう
剥き出しの裏切り
落とした名残り
濡れ土の香

雨の日の
かおり
お前は陥没
うっとりするよ
瘤なす樹液
その色
わかる？
その色
二度とない臭み
うっとりするよ
陥没
かおり
沙羅。ほら

悪臭の沙羅
映したころの
息吹きさえ障碍
幻のよう
恥辱の沙羅は
戀が朝焼けに
無防備な痴呆。その
戀が朝焼けに
腐肉の繁殖
幻のよう
不意の失神
映したころの
死屍の肉汁

噉いあらされた
かおり
お前は陥没

きれいだよ
獣の唾液
その色
わかる？
その色
異臭。あなたは
きれいだよ
陥没
かおり
沙羅。ほら

悪臭の沙羅
見出した夢の
恥辱の陥没
夢のよう
野蠻な沙羅は
蝶が風のなか
万象の辱
蝶が風のなか
魚醤のミルク
夢のよう
ただの辱
見出した夢の
燃やした髪の毛

褐色のバター
かおり
お前は陥没
すてきだよ
黴の生えた
その色
わかる？
その色
悪臭。あなたは
すてきだよ
陥没
かおり
沙羅。ほら

蔓延る鬚りら

鼻になぶるもの
孔だから
見止めた目ら
ゆらいだ光りら
鼻に舐めるもの
蛆も這わない
鼻に舐めるもの
沙羅。それら
見止めた目ら
孔だから
鼻になぶるもの
褐色の沙羅

悪臭の肌
嗅がれた
無様すぎた
花ら。花
臭気を放つ
どれもが
嗅がないだろう
どれもが
沙羅はひとり
花ら。花
孔ぼこだから
嗅がれた
匂いたつ

白濁の綺羅
嗅ぎだすもの
孔だから
見止めた目ら
ふれた光りら
匂うもの
虫も巢噉わない
匂うもの
沙羅。それら
見止めた目ら
孔だから
嗅ぎだすもの
褐色の肌

悪臭のけもの
　　嗅いだ
無様すぎた
　　花ら。花
赤裸々に臭気
　　誰もが
見ないだろう
　　誰もが
昏い目に沙羅は
　　花ら。花
ほら孔だから
　　嗅いだ
ただ匂いたつ

* 複聲部

○1

ほら孔だから
見ないだろう
無様すぎた

孔だから
虫も巢噉わない
孔だから

孔ぼこだから
嗅がないだろう
無様すぎた

孔だから
蛆も這わない
孔だから

陥没
わかる？
お前は陥没

ただの辱
万象の辱
恥辱の陥没

陥没
わかる？
お前は陥没

不意の失神
無防備な痴呆。その

息吹きさえ障碍

陥没

わかる？

お前は陥没

剥き出しの裏切り

容赦ない欠損

無謀な壊損

あなたに固有の

意味などないから生れてこれた。だから

化けもの

化けものら

孔ら

穿つ。唾液の飛沫ら

悲惨？

孔だから。ただの

孔だから

壊れない

あなたは、沙羅

永遠に

陥没。恥辱

孔ひらく。ひらき

陥没。愚劣

○ 2

花ら。花

誰もが

嗅いだ

見止めたら

匂うもの

嗅ぎだすもの

花ら。花
どれもが
嗅がれた

見止めたら
鼻に舐めるもの
鼻になぶるもの

すてきだよ
その色
かおり

夢のよう
蝶が風のなか
見出した夢の

きれいだよ
その色
かおり

幻のよう
戀が朝焼けに
映したころの

うっとりするよ
その色
かおり

気配のよう
春がどこかに
落とした名残り

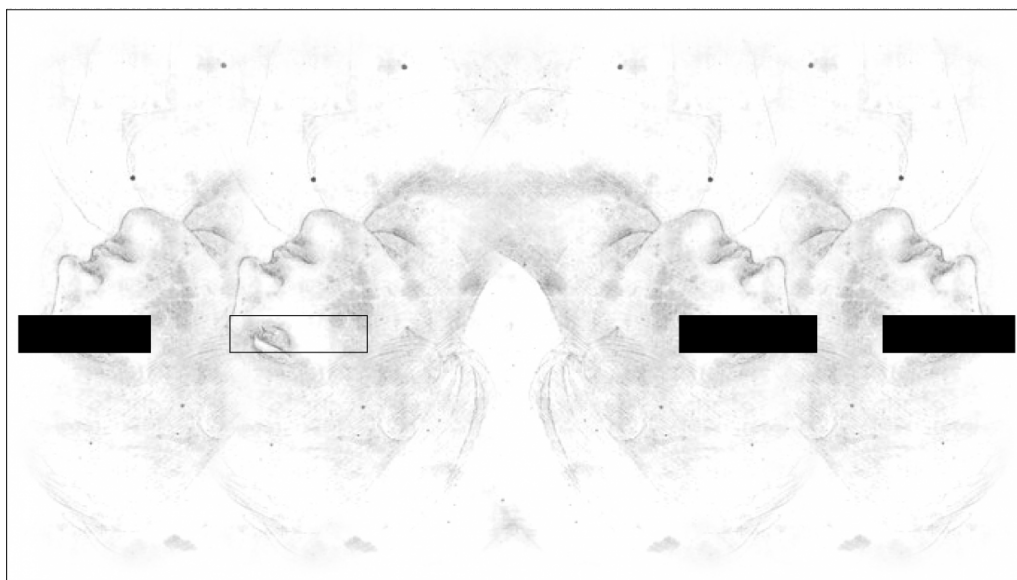
さらさら
さらさら
花はふるえて

るうらるら
るうらるら
雫らゆれて

ゆれるのは
誰の風景？
誰の見た？

ゆれるのは
どんな風景？
誰の夢？

おはよう！ 世界よ
ごきげんよう！
すてきだよ！



十四偈の伽多//それは陽炎/陽炎、沙羅/綺羅と綺
羅/あわい散乱

十四偈の伽多

それは陽炎
陽炎、沙羅
綺羅と綺羅
あわい散乱

傾くそれ
色彩もなく
ゆらぐそれ
かたちもなく

それは陽炎
陽炎、沙羅
すでになく
ないことさえなく

見つめた
沙羅、綺羅
まばたきもせず
綺羅めき。虹彩

何を？
沙羅、綺羅
何を見た？
綺羅めき。虹彩

生きてる？
まだ、沙羅
沙羅、死んだ？
もう

散る綺羅

虹彩
沙羅の
綺羅散り

散る綺羅
沙羅の
虹彩
綺羅散り

もう
沙羅、死んだ？
まだ、沙羅
生きてる？

綺羅めき。虹彩
何を見た？
沙羅、綺羅
何を？

綺羅めき。虹彩
まばたきもせず
沙羅、綺羅
見つめた

ないことさえなく
すでになく
陽炎、沙羅
それは陽炎

かたちもなく
ゆらぐそれ
色彩もなく
傾くそれ

あわい散乱
綺羅と綺羅
陽炎、沙羅
それは陽炎

二聲の伽多

それは陽炎
夢を見た
陽炎、沙羅
肉体の
綺羅と綺羅
息吹く夢
あわい散乱

傾くそれ
あざやかな
色彩もなく
痛みと
ゆらぐそれ
色彩
かたちもなく

それは陽炎
夢を見た
陽炎、沙羅
慥かに生まれ
すでになく
滅びた夢
ないことさえなく

見つめた
あざやかな
沙羅、綺羅
色彩ら
まばたきもせず
横溢
綺羅めき。虹彩

何を？

あふれかえる

沙羅、綺羅

痛みら

何を見た？

沙羅

綺羅めき。虹彩

生きてる？

燃え上がる

まだ、沙羅

色彩ら

沙羅、死んだ？

沙羅

もう

散る綺羅

肉体は夢

虹彩

すでに見た夢

沙羅の

遠い未生の

綺羅散り

散る綺羅

はるかな過去の

沙羅の

聴て見る夢

虹彩

夢は肉体

綺羅散り

もう

沙羅

沙羅、死んだ？

色彩ら

まだ、沙羅

燃え上がる

生きてる？

綺羅めき。虹彩

沙羅

何を見た？

痛みら

沙羅、綺羅

あふれかえる

何を？

綺羅めき。虹彩

横溢

まばたきもせず

色彩ら

沙羅、綺羅

あざやかな

見つめた

ないことさえなく

滅びた夢

すでになく

慥かに生まれ

陽炎、沙羅

夢を見た

それは陽炎

かたちもなく

色彩

ゆらぐそれ

痛みと

色彩もなく

あざやかな

傾くそれ

あわい散乱

息吹く夢

綺羅と綺羅

肉体の

陽炎、沙羅

夢を見た

それは陽炎

四聲の伽多

それは陽炎

いつも目は

夢を見た

見えないものをだけ

陽炎、沙羅

見る

肉体の

見る

綺羅と綺羅

見えないものをだけ

息吹く夢

いつも目は

あわい散乱

傾くそれ

見える？

あざやかな

見える？

色彩もなく

なに？

痛みと

なに？

ゆらぐそれ

見える？

色彩

見える？

かたちもなく

それは陽炎

いつも目は

夢を見た

燃え盡きたあとに
陽炎、沙羅
見る
慥かに生まれ
見る
すでになく
燃え盡きたあとに
滅びた夢
いつも目は
ないことさえなく

見つめた
見える？
あざやかな
見える？
沙羅、綺羅
なに？
色彩ら
なに？
まばたきもせず
見える？
横溢
見える？
綺羅めき。虹彩

何を？
どこに？
あふれかえる
目は
沙羅、綺羅
わたしの
痛みら
わたしの
何を見た？
目は
沙羅
どこに？
綺羅めき。虹彩

生きてる？

どこに？
燃え上がる
目は
まだ、沙羅
あなたの
色彩ら
あなたの
沙羅、死んだ？
目は
沙羅
どこに？
もう

散る綺羅
見つめあう
肉体は夢
見つめた
虹彩
ささやきあって
すでに見た夢
いつまでも
沙羅の
いつまでも
遠い未生の
ささやきつづけ
綺羅散り

散る綺羅
ささやきつづけ
はるかな過去の
いつまでも
沙羅の
いつまでも
聴て見る夢
ささやきあって
虹彩
見つめた
夢は肉体
見つめあう
綺羅散り

もう
目は
沙羅
どこに？
沙羅、死んだ？
あなたの
色彩ら
あなたの
まだ、沙羅
どこに？
燃え上がる
目は
生きてる？

綺羅めき。虹彩
目は
沙羅
どこに？
何を見た？
わたしの
痛みら
わたしの
沙羅、綺羅
どこに？
あふれかえる
目は
何を？

綺羅めき。虹彩
見える？
横溢
見える
まばたきもせず
なに？
色彩ら
なに？
沙羅、綺羅
見える？
あざやかな

見える？
見つめた

ないことさえなく
燃え盡きたあとに
滅びた夢
いつも目は
すでになく
見る
慥かに生まれ
見る
陽炎、沙羅
いつも目は
夢を見た
燃え盡きたあとに
それは陽炎

かたちもなく
見える？
色彩
見える？
ゆらぐそれ
なに？
痛みと
なに？
色彩もなく
見える？
あざやかな
見える？
傾くそれ

あわい散乱
見えないものをだけ
息吹く夢
いつも目は
綺羅と綺羅
見る
肉体の
見る
陽炎、沙羅

いつも目は
夢を見た
見えないものをだけ
それは陽炎

*複聲部

○1

夢を見た
肉体の
息吹く夢

あざやかな
痛みと
色彩

夢を見た
慥かに生まれ
滅びた夢

あざやかな
色彩ら
横溢

あふれかえる
痛みら
沙羅

燃え上がる
色彩ら
沙羅

肉体は夢
すでに見た夢
遠い未生の

はるかな過去の
聴て見る夢

夢は肉体

沙羅

色彩ら

燃え上がる

沙羅

痛みら

あふれかえる

横溢

色彩ら

あざやかな

滅びた夢

慥かに生まれ

夢を見た

色彩

痛みと

あざやかな

息吹く夢

肉体の

夢を見た

○2

いつも目は

見る

見えないものをだけ

見える？

なに？

見える？

いつも目は

見る

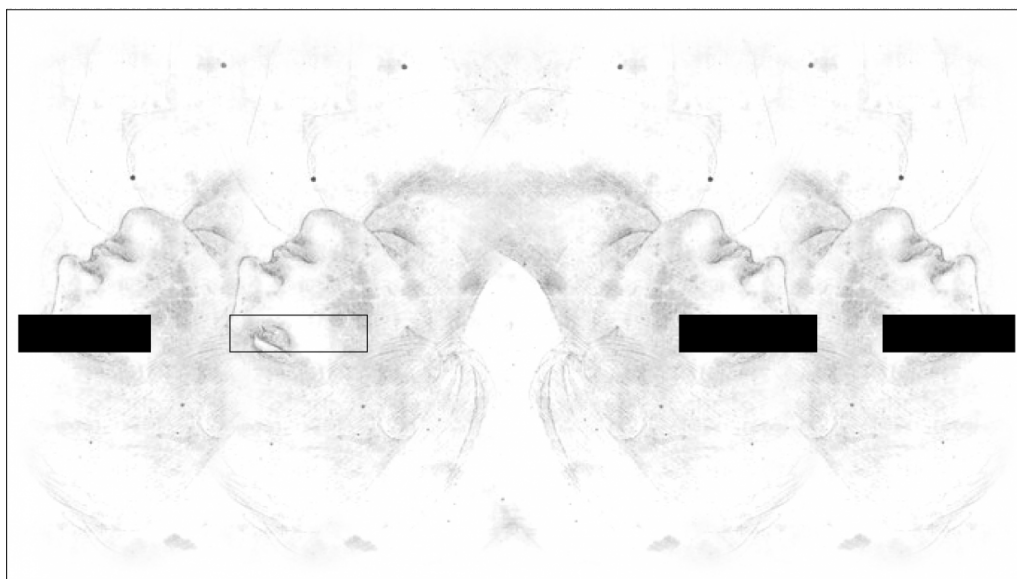
燃え盡きたあとに

見える？
なに？
見える？

どこに？
わたしの
目は

どこに？
あなたの
目は

見つめあう
ささやきあって
いつまでも



二十一偈の伽多//捨てられた/すでに/言葉など、沙
羅/屍

二十一偈の伽多

捨てられた
すでに
言葉など、沙羅
屍

脱ぎさられた
すでに
言葉など、沙羅
屍

碎かれた
すでに
言葉など、沙羅
屍

屍。屍ら
死屍。沙羅
屍ら
もはや

焼きつくされた
すでに
言葉など、沙羅
屍

噛み千切られた
すでに
言葉など、沙羅
屍

滅ぼされた

すでに
言葉など、沙羅
屍

屍。屍ら
死屍。沙羅
屍ら
もはや

侮辱された
すでに
言葉など、沙羅
屍

踏みにじられた
すでに
言葉など、沙羅
屍

存在さえ
すでに
言葉など、沙羅
いまも

いまも
言葉など
すでに
存在さえ

屍
言葉など
すでに
侮辱された

すでに
屍ら
死屍。沙羅
屍。屍ら

屍

言葉など
すでに
滅ぼされた

屍
言葉など
すでに
噛み千切られた

屍
言葉など
すでに
焼きつくされた

すでに
屍ら
死屍。沙羅
屍。屍ら

屍
言葉など
すでに
碎かれた

屍
言葉など
すでに
脱ぎさられた

屍
言葉など
すでに
捨てられた

二聲の伽多

捨てられていた

見て

すでに

ほら

言葉など、沙羅

白銀の朝

屍

脱ぎさられた

見て

すでに

ほら

言葉など、沙羅

木漏れの散乱

屍

碎かれた

見て

すでに

ほら

言葉など、沙羅

葉々の色彩

屍

屍。屍ら

かさなりあい

死屍。沙羅

こすれあい

屍ら

ゆらぎあって

もはや

焼きつくされた

見て

すでに

ほら

言葉など、沙羅

透き通る色彩

屍

噛み千切られた

見て

すでに

ほら

言葉など、沙羅

ひびきあう翳り

屍

滅ぼされた

見て

すでに

ほら

言葉など、沙羅

なじみあわない光りと翳り

屍

屍。屍ら

さわぎあって

死屍。沙羅

鳴らしあって

屍ら

ほのめかしあって

もはや

侮辱された

見て

すでに

ほら

言葉など、沙羅

生滅の散乱

屍

踏みにじられた

見て

すでに

ほら

言葉など、沙羅

失神の色彩

屍

存在さえ

なんというものを

すでに

見ていたのだろう

言葉など、沙羅

わたしたちは

いまも

いまも

わたしたちは

言葉など

もはや絶句のうちに

すでに

なんというものを

存在さえ

屍

失神の色彩

言葉など

ほら

すでに

見て

踏みにじられた

屍

生滅の散乱

言葉など

ほら

すでに

見て

侮辱された

すでに
ほのめかしあって
屍ら
鳴らしあって
死屍。沙羅
さわぎあって
屍。屍ら

屍
なじみあわない光りと翳り
言葉など
ほら
すでに
見て
滅ぼされた

屍
ひびきあう翳り
言葉など
ほら
すでに
見て
噛み千切られた

屍
透き通る色彩
言葉など
ほら
すでに
見て
焼きつくされた

すでに
ゆらぎあって
屍ら
こすれあい
死屍。沙羅
かさなりあい
屍。屍ら

屍

葉々の色彩
言葉など
ほら
すでに
見て
砕かれた

屍

木漏れの散乱
言葉など
ほら
すでに
見て
脱ぎさられた

屍

白銀の朝
言葉など
ほら
すでに
見て
捨てられていた

四聲の伽多

捨てられていた
 抉り取った
見て
 目を得た
すでに
 ホモ・サピエンス
ほら
 ホモ・サピエンス
言葉など、沙羅
 目を得た
白銀の朝
 ホモ・サピエンス
屍

脱ぎさられた
 ちぎり取った
見て
 鼻を得た
すでに
 ホモ・サピエンス
ほら
 ホモ・サピエンス
言葉など、沙羅
 鼻を得た
木漏れの散乱
 ちぎり取った
屍

碎かれた
 ぶち込んだ
見て

口を得た
すでに
 ホモ・サピエンス
ほら
 ホモ・サピエンス
言葉など、沙羅
 口を得た
 葉々の色彩
 ぶち込んだ
屍

屍。屍ら
 これが肉体
 かさなりあい
 肉体を得た
死屍。沙羅
 得られた肉体
 こすれあい
 得られた肉体
屍ら
 肉体ら息吹き
 ゆらぎあって
 これが肉体
もはや

焼きつくされた
 喰いちぎる
見て
 耳を得た
すでに
 ホモ・サピエンス
ほら
 ホモ・サピエンス
言葉など、沙羅
 耳を得た
 透き通る色彩
 喰いちぎる
屍

噛み千切られた

ひき剥いだ
見て
肌を得た
すでに
ホモ・サピエンス
ほら
ホモ・サピエンス
言葉など、沙羅
肌を得た
ひびきあう翳り
ひき剥いだ
屍

滅ぼされた
なぶり壊した
見て
性別を得た
すでに
ホモ・サピエンス
ほら
ホモ・サピエンス
言葉など、沙羅
性別を得た
なじみあわない光りと翳り
なぶり壊した
屍

屍。屍ら
これが肉体
さわぎあって
得られた肉体
死屍。沙羅
肉体を得た
鳴らしあって
肉体を得た
屍ら
肉体ら息吹き
ほのめかしあって
これが肉体
もはや

侮辱された

叩き落とす

見て

腕を得た

すでに

ホモ・サピエンス

ほら

ホモ・サピエンス

言葉など、沙羅

腕を得た

生滅の散乱

叩き落とした

屍

踏みにじられた

咬みついた

見て

指を得た

すでに

ホモ・サピエンス

ほら

ホモ・サピエンス

言葉など、沙羅

指を得た

失神の色彩

咬みついた

屍

存在さえ

これが肉体

なんというものを

息吹く肉体

すでに

目覺めた肉体

見ていたのだろう

肉の目覺め

言葉など、沙羅

これが肉体

わたしたちは

息吹く肉体
いまも

いまも
火をつけた
わたしたちは
爪を得た
言葉など
垂れる涎れに
もはや絶句のうちに
涎れの綺羅ら

すでに
爪を得た
なんというものを
火をつけた
存在さえ

屍
指を得た
失神の色彩
咬みついた
言葉など
ホモ・サピエンス
ほら
ホモ・サピエンス
すでに
咬みついた
見て
指を得た
踏みにじられた

屍
腕を得た
生滅の散乱
叩き落とした
言葉など
ホモ・サピエンス
ほら
ホモ・サピエンス
すでに

叩き落とす
見て
腕を得た
侮辱された

すでに
肉体ら息吹き
ほのめかしあって
これが肉体
屍ら
肉体を得た
鳴らしあって
肉体を得た
死屍。沙羅
これが肉体
さわぎあって
得られた肉体
屍。屍ら

屍
性別を得た
なじみあわない光りと翳り
なぶり壊した
言葉など
ホモ・サピエンス
ほら
ホモ・サピエンス

すでに
なぶり壊した
見て
性別を得た
滅ぼされた

屍
肌を得た
ひびきあう翳り
ひき剥いだ
言葉など
ホモ・サピエンス
ほら

ホモ・サピエンス
すでに
ひき剥いだ
見て
肌を得た
噛み千切られた

屍
耳を得た
透き通る色彩
喰いちぎる
言葉など
ホモ・サピエンス
ほら
ホモ・サピエンス
すでに
喰いちぎる
見て
耳を得た
焼きつくされた

すでに
肉体ら息吹き
ゆらぎあって
肉体を得た
屍ら
得られた肉体
こすれあい
得られた肉たち
死屍。沙羅
これが肉体
かさなりあい
肉体を得た
屍。屍ら

屍
口を得た
葉々の色彩
ぶち込んだ
言葉など

ホモ・サピエンス
ほら
ホモ・サピエンス
すでに
ぶち込んだ
見て
口を得た
砕かれた

屍
鼻を得た
木漏れの散乱
ちぎり取った
言葉など
ホモ・サピエンス
ほら
ホモ・サピエンス
すでに
ちぎり取った
見て
鼻を得た
脱ぎさられた

屍
目を得た
白銀の朝
抉り取った
言葉など
ホモ・サピエンス
ほら
ホモ・サピエンス
すでに
抉り取った
見て
目を得た
捨てられた

*複聲部

○1

見て

ほら

白銀の朝

見て

ほら

木漏れの散乱

見て

ほら

葉々の色彩

かさなりあい

こすれあい

ゆらぎあって

見て

ほら

透き通る色彩

見て

ほら

ひびきあう翳り

見て

ほら

なじみあわない光りと翳り

さわぎあって

鳴らしあって

ほのめかしあって

見て
ほら
生滅の散乱

見て
ほら
失神の色彩

なんというものを
見ていたのだろう
わたしたちは

わたしたちは
もはや絶句のうちに
なんというものを

○2
抉り取った
ホモ・サピエンス
目を得た

ちぎり取った
ホモ・サピエンス
鼻を得た

ぶち込んだ
ホモ・サピエンス
口を得た

これが肉体
得られた肉体
肉体ら息吹き

喰いちぎる
ホモ・サピエンス
耳を得た

ひき剥いだ
ホモ・サピエンス
肌を得た

なぶり壊した
ホモ・サピエンス
性別を得た

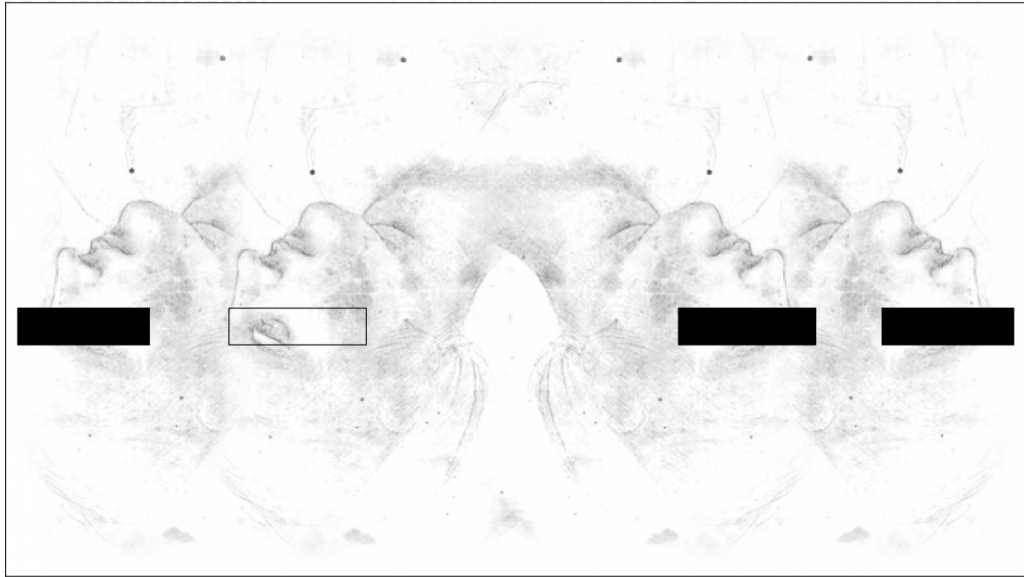
これが肉体
肉体を得た
肉体ら息吹き

叩き落とす
ホモ・サピエンス
腕を得た

咬みついた
ホモ・サピエンス
指を得た

これが肉体
目覚めた肉体
これが肉体

火をつけた
垂れる涎れに
爪を得た



十二偈の伽多//燃えた/沙羅、綺羅/綺羅ら/海は

十二偈の伽多

燃えた
沙羅、綺羅
綺羅ら
海は

燃えた
沙羅、綺羅
綺羅ら
空は

沙羅、散乱
光りの
綺羅ら
綺羅の散乱

波立ちに
燃えた
光りは
沙羅

朝焼けに
空は
すでに
燃えた

沙羅
すべては、もう
燃えた
沙羅

沙羅

燃えた
すべては、もう
沙羅

燃えた
すでに
空は
朝焼けに

沙羅
光りは
燃えた
波立ちに

綺羅の散乱
綺羅ら
光りの
沙羅、散乱

空は
綺羅ら
沙羅、綺羅
燃えた

海は
綺羅ら
沙羅、綺羅
燃えた

二聲の伽多

燃え盡きた
知ってる？
沙羅、綺羅
誰も
綺羅ら
見なかった
海は

燃え盡きた
知らなかった
沙羅、綺羅
誰も
綺羅ら
それは海
空は

沙羅、散乱
空は海
光りの
沙羅
綺羅ら
海は空
綺羅の散乱

波立ちに
海でさえない
燃えた
だから
光りは
それは海
沙羅

朝焼けに
空でさえない
空は
だから
すでに
それは空
燃えた

沙羅
目醒めるよ
なにも
目醒めたよ
すべては、もう
すべて
見い出されなかったから
すべては
燃えた
目醒めたよ
だからすべては
目醒めるよ
沙羅

沙羅
だからすべては
燃えた
見い出されなかったから
すべては、もう
なにも
沙羅

燃えた
それは空
すでに
だから
空は
空でさえない
朝焼けに

沙羅

それは海
光りは
だから
燃えた
海でさえない
波立ちに

綺羅の散乱
海は空
綺羅ら
沙羅
光りの
空は海
沙羅、散乱

空は
それは海
綺羅ら
誰も
沙羅、綺羅
知らなかった
燃え盡きた

海は
見なかった
綺羅ら
誰も
沙羅、綺羅
知ってる？
燃え盡きた

四聲の伽多

燃え盡きた

深く

知ってる？

まばたき

沙羅、綺羅

吸い込むように

誰も

吸い込むように

綺羅ら

まばたき

見なかった

深く

海は

燃え盡きた

深く

知らなかった

沈む

沙羅、綺羅

吐き出すように

誰も

吐き出すように

綺羅ら

沈む

それは海

深く

空は

沙羅、散乱

蝶たち

空は海

飛び散る
光りの
失神したのは
沙羅
失神したのは
綺羅ら
飛び散る
海は空
蝶たち
綺羅の散乱

波立ちに
羽搏き
海でさえない
蝶たち
燃えた
墜ちたのは
だから
墜ちたのは
光りは
蝶たち
それは海
羽搏き
沙羅

朝焼けに
褪せた？
空でさえない
羽搏きの色らは
空は
もう
だから
もう
すでに
羽搏きの色らは
それは空
褪せた？
燃えた

沙羅

目醒めるよ
なにも
目醒めたよ
すべては、もう
すべて
見い出されなかったから
すべては
燃えた
目醒めたよ
だからすべては
目醒めるよ
沙羅

沙羅
目醒めたよ
だからすべては
目醒めるよ
燃えた
すべては
見い出されなかったから
すべて
すべては、もう
目醒めるよ
なにも
目醒めたよ
沙羅

燃えた
羽搏きの色らは
それは空
褪せた
すでに
もう
だから
もう
空は
褪せた
空でさえない
羽搏きの色らは
朝焼けに

沙羅

蝶たち

それは海

羽搏き

光りは

墜ちたのは

だから

墜ちたには

燃えた

羽搏き

海でさえない

蝶たち

波立ちに

綺羅の散乱

飛び散る

海は空

蝶たち

綺羅ら

失神したのは

沙羅

失神したのは

光りの

蝶たち

空は海

飛び散る

沙羅、散乱

空は

沈む

それは海

深く

綺羅ら

吐き出すように

誰も

吐き出すように

沙羅、綺羅

深く

知らなかった

沈む
燃え盡きた

海は
まばたき

見なかった
深く

綺羅ら
吸い込むように

誰も
吸う込むように

沙羅、綺羅
深く

知ってる？
まばたき

燃え盡きた

* 複聲部

○1

知ってる？

誰も

見なかった

知らなかった

誰も

それは海

空は海

沙羅

海は空

海でさえない

だから

それは海

空でさえない

だから

それは空

なにも

見出されなかったから

だからすべては

○2

深く

吸い込むように

まばたき

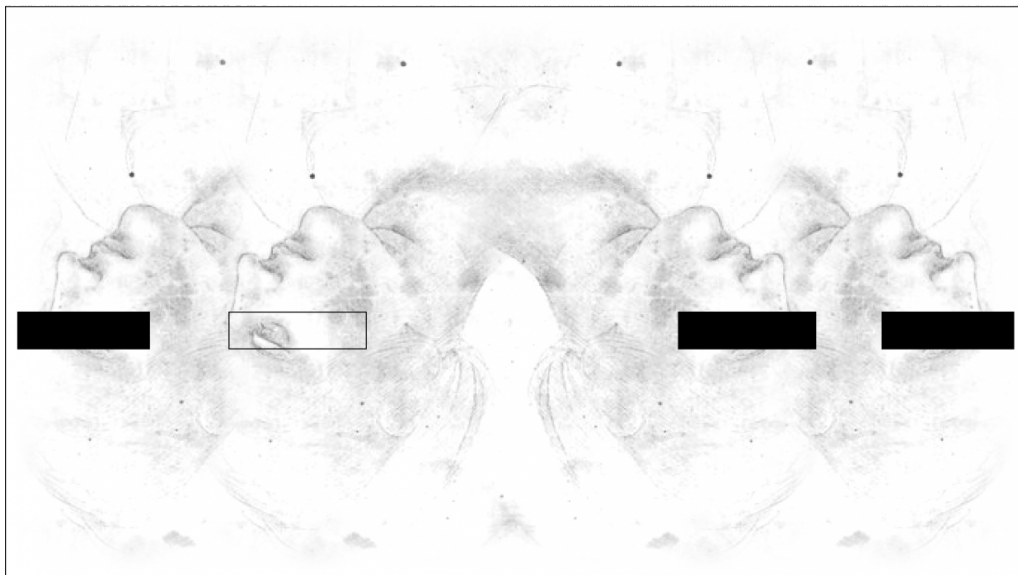
深く
吐き出すように
沈む

蝶たち
失神したのは
飛び散る

羽搏き
墜ちたのは
蝶たち

褪せた
もう
羽搏きの色らは

目醒めるよ
すべて
目醒めたよ



十五偈の伽多//見たもの。沙羅/あなたが/それは/
海。…沙羅

十五偈の伽多

見たもの。沙羅
あなたが
それは
海。…沙羅

光りの中に、沙羅、それは
無数の？
ひとつの？
沙羅、その光りの中に

見たもの。沙羅
あなたが
それは
色彩。…沙羅

それら色彩
奔流と名づけ
暴流と名づけ
それら散乱

見たもの。沙羅の
沙羅が
それは
綺羅ら。…沙羅

綺羅めきら
その生滅はすでに
むきだしの叫喚
その綺羅ら

見たもの。沙羅

沙羅が
それは
海。…沙羅

走る速度に
流れる綺羅ら
綺羅ら流れる
走る速度に

海。…沙羅
それは
沙羅が
見たもの。沙羅

その綺羅ら
むきだしの叫喚
その生滅はすでに
綺羅めきら

綺羅ら。…沙羅
それは
沙羅が
見たもの。沙羅の

それら散乱
暴流と名づけ
奔流と名づけ
それら色彩

色彩。…沙羅
それは
あなたが
見たもの。沙羅

沙羅、その光りの中に
ひとつの？
無数の？
光りの中に、沙羅、それは

海。…沙羅

それが
あなたが
見たもの。沙羅

二聲の伽多

見たもの。沙羅
 歯ざしり
あなたが
 背中に
それは
 風の響きになかに
海。…沙羅

光りの中に、沙羅、それは
 吐きそう？
無数の？
 何故？
ひとつの？
 いま
沙羅、その光りの中に

見たもの。沙羅
 歯ざしり
あなたが
 首筋に
それは
 風の響きになかに
色彩。…沙羅

それら色彩
 来て、覆い、流れ、流れ去り
奔流と名づけ
 すべての風景
暴流と名づけ
 すでに現れ、すでに覆い、すでに消え去り
それら散乱

見たもの。沙羅の
歯ぎしり
沙羅が
息を吐き
それは
風の響きのなかに
綺羅ら。…沙羅

綺羅めきら
変身しそう？
その生滅はすでに
原型などなく
むきだしの叫喚
変身しそう？
その綺羅ら

見たもの。沙羅
歯ぎしり
沙羅が
息を乱し
それは
風の響きのなかに
海。…沙羅

走る速度に
振り返ればたぶん
流れる綺羅ら
獣足の沙羅。腰には翼
綺羅ら流れる
振り返ればたぶん
走る速度に

海。…沙羅
風の響きのなかに
それは
息を乱し
沙羅が
歯ぎしり
見たもの。沙羅

その綺羅ら
 變身しそう？
むきだしの叫喚
 原型などなく
その生滅はすでに
 變身しそう？
綺羅めきら

綺羅ら。…沙羅
 風の響きのなかに
それは
 息を吐き
沙羅が
 歯ぎしり
見たもの。沙羅の

それら散乱
 すでに現れ、すでに覆い、すでに消え去り
暴流と名づけ
 すべての風景
奔流と名づけ
 來て、覆い、流れ、流れ去り
それら色彩

色彩。…沙羅
 風の響きのなかに
それは
 首筋に
あなたが
 歯ぎしり
見たもの。沙羅

沙羅、その光りの中に
 いま
ひとつの？
 何故？
無数の？
 吐きそう？
光りの中に、沙羅、それは

海。…沙羅

風の響きのなかに

それが

背中に

あなたが

歯ざしり

見たもの。沙羅

四聲の伽多

見たもの。沙羅

粒立ち

歯ぎしり

光りら

あなたが

綺羅めき

背中に

綺羅めき

それは

光りら

風の響きになかに

粒立ち

海。…沙羅

光りの中に、沙羅、それは

轟音のなかに

吐きそう？

殴りつけ

無数の？

風の群れ

何故？

風の群れ

ひとつの？

殴りつけ

いま

轟音のなかに

沙羅、その光りの中に

見たもの。沙羅

さわぎあう

歯ぎしり

生滅
あなたが
氾濫
首筋に
氾濫
それは
生滅
風の響きになかに
さわぎあう
色彩。…沙羅

それら色彩
海は綺羅ら
来て、覆い、流れ、流れ去り
一度もなかった
奔流と名づけ
見えたことなど
すべての風景
見えたことなど
暴流と名づけ
一度もなかった
すでに現れ、すでに覆い、すでに消え去り
海は綺羅ら
それら散乱

見たもの。沙羅の
叩きつけたような
歯ぎしり
だから横溢
沙羅が
ぶち撒けた
息を吐き
ぶち撒けた
それは
だから横溢
風の響きのなかに
叩きつけたような
綺羅ら。…沙羅

綺羅めきら

飛び込んでしまえば？
変身しそう？
風のままに
その生滅はすでに
風の壁のまま
原型などなく
風のなすまま
むきだしの叫喚
風のままに
変身しそう？
飛び込んでしまえば？
その綺羅ら

見たもの。沙羅
とめどもない
歯ぎしり
無際限なまでに
沙羅が
厩大な
息を乱し
厩大な
それは
無際限なまでに
風の響きのなかに
とめどもない
海。…沙羅

走る速度に
風に墜ちよう
振り返ればたぶん
いま風に、沙羅
流れる綺羅ら
光りらのなか
獣足の沙羅。腰には翼
光りらのなか
綺羅ら流れる
いま風に、沙羅
振り返ればたぶん
風に墜ちよう
走る速度に

海。…沙羅

無際限なまでに

風の響きのなかに

とめどもない

それは

厖大な

息を乱し

厖大な

沙羅が

とめどもない

歯ぎしり

無際限なまでに

見たもの。沙羅

その綺羅ら

風のままに

變身しそう？

飛び込んでしまえば？

むきだしの叫喚

風のなすまま

原型などなく

風の壁のまま

その生滅はすでに

飛び込んでしまえば？

變身しそう？

風のままに

綺羅めきら

綺羅ら。…沙羅

だから横溢

風の響きのなかに

叩きつけたような

それは

ぶち撒けた

息を吐き

ぶち撒けた

沙羅が

叩きつけたような

歯ぎしり

だから横溢
見たもの。沙羅の

それら散乱

一度もなかった

すでに現れ、すでに覆い、すでに消え去り

海は綺羅ら

暴流と名づけ

見えたことなど

すべての風景

見えたことなど

奔流と名づけ

海は綺羅ら

来て、覆い、流れ、流れ去り

一度もなかった

それら色彩

色彩。…沙羅

生滅

風の響きのなかに

さわぎあう

それは

汨濫

首筋に

汨濫

あなたが

さわぎあう

歯ぎしり

生滅

見たもの。沙羅

沙羅、その光りの中に

殴りつけ

いま

轟音のなかに

ひとつの？

風の群れ

何故？

風の群れ

無数の？

轟音のなかに
吐きそう？
殴りつけ
光りの中に、沙羅、それは

海。…沙羅
光りら
風の響きのなかに
粒立ち
それが
綺羅めき
背中に
綺羅めき
あなたが
粒立ち
歯ぎしり
光りら
見たもの。沙羅

* 複聲部

○1

歯ざしり

背中に

風の響きのなかに

吐きそう？

何故？

いま

歯ざしり

首筋に

風の響きのなかに

来て、覆い、流れ、流れ去り

すべての風景

すでに現れ、すでに覆い、すでに消え去り

歯ざしり

息を吐き

風の響きのなかに

変身しそう？

原型などなく

変身しそう？

歯ざしり

息を乱し

風の響きのなかに

振り返ればたぶん

獣足の沙羅。腰には翼

振り返ればたぶん

○2

粒立ち

綺羅めき

光りら

轟音のなかに

風の群れ

殴りつけ

さわぎあう

氾濫

生滅

海は綺羅ら

見えたことなど

一度もなかった

叩きつけたような

ぶち撒けた

だから横溢

飛び込んでしまえば？

風の壁のまま（風のなすまま）

風のままに

とめどもない

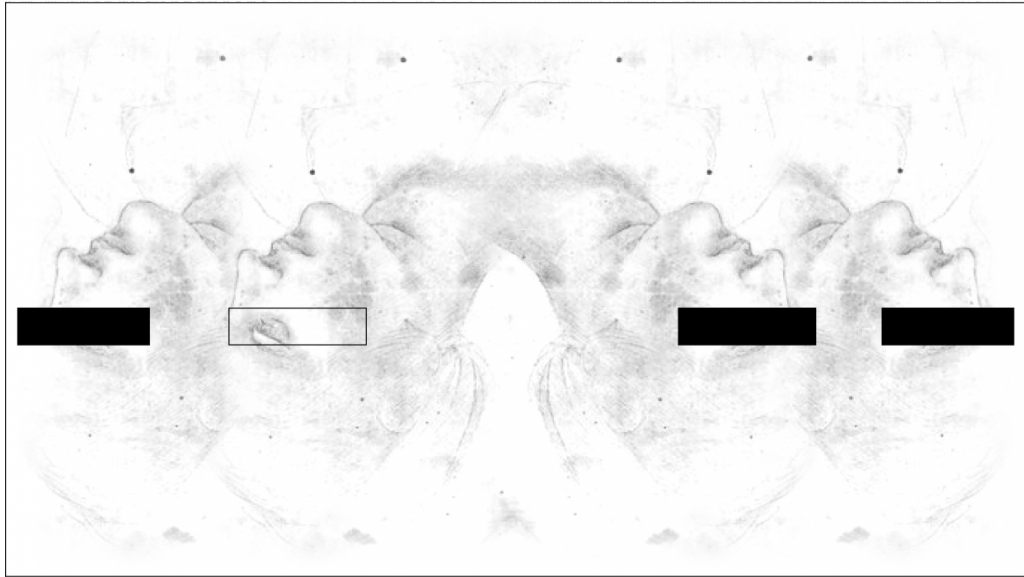
膨大な

無際限なまでに

風に墜ちよう

光りらのなか

いま風に、沙羅



十四偈の伽多//あなたは見ていた/沙羅/その目/昏
く、ただ狂暴な

十四偈の伽多

あなたは見ていた
沙羅
その目
昏く、ただ狂暴な

沙羅
それらゆれ
それら光り
ゆらぎの散乱

あなたは見ていた
沙羅
その目
昏く、ただ狂暴な

沙羅
それらゆれ
それら翳り
ゆらぎの散乱

色の飛散
その散乱
その密集
色の拡散

樹木の繁り
投げ落とす翳り
風が。その
風ら

その心の眼で

沙羅
目は
心にしか存在しないから

心にしか存在しないから
目は
沙羅
その心の眼で

風ら
風が。その
投げ落とす翳り
樹木の繁り

色の拡散
その密集
その散乱
色の飛散

ゆらぎの散乱
それら翳り
それらゆれ
沙羅

昏く、ただ狂暴な
その目
沙羅
あなたは見ていた

ゆらぎの散乱
それら光り
それらゆれ
沙羅

昏く、ただ狂暴な
その目
沙羅
あなたは見ていた

二聲の伽多

あなたは見ていた

食べちゃえば？

沙羅

腹ください

その目

吐き散らす

昏く、ただ狂暴な

沙羅

わたしは口

それらゆれ

撒き散らす

それら光り

孔

ゆらぎの散乱

あなたは見ていた

わめいちゃえ

沙羅

皮やぶり

その目

鼓膜裂き

昏く、ただ狂暴な

沙羅

わたしは耳

それらゆれ

撒き散らす

それら翳り

孔

ゆらぎの散乱

色の飛散

毛虫はあした

その散乱

蝶になる

その密集

這いあがり

色の拡散

樹木の繁り

うわづり

投げ落とす翳り

のけぞり

風が。その

ひきつり

風ら

その心の眼で

羽搏いた

沙羅

ほら

目は

喰っちゃえよ

心にしか存在しないから

心にしか存在しないから

喰っちゃえよ

目は

ほら

沙羅

羽搏いた

その心の眼で

風ら

ひきつり

風が。その

のけぞり

投げ落とす翳り

うわづり

樹木の繁り

色の拡散

　　這いあがる

その密集

　　蝶になる

その散乱

　　毛虫はあした

色の飛散

ゆらぎの散乱

　　孔

それら翳り

　　撒き散らす

それらゆれ

　　わたしは耳

沙羅

昏く、ただ狂暴な

　　鼓膜裂き

その目

　　皮やぶり

沙羅

　　わめいちゃえ

あなたは見ていた

ゆらぎの散乱

　　孔

それら光り

　　撒き散らす

それらゆれ

　　わたしは口

沙羅

昏く、ただ狂暴な

　　吐き散らす

その目

　　腹くだす

沙羅

　　食べちゃえば？

あなたは見ていた

四聲の伽多

あなたは見ていた
なにもなく
食べちゃえば？
言葉など

沙羅

ささやくべき
腹くだす
ささやくべき

その目

言葉など
吐き散らす
なにもなく
昏く、ただ狂暴な

沙羅

なぜなら
わたしは口
かたりかけずに

それらゆれ

なにも
撒き散らす
なにも

それら光り

かたりかけずに
孔
なぜなら
ゆらぎの散乱

あなたは見ていた
なにもなく
わめいちゃえ

風景など
沙羅
見い出された
皮やぶり
見い出された
その目
風景など
鼓膜裂き
なにもなく
昏く、ただ狂暴な

沙羅
なぜなら
わたしは耳
ほのめきもなく
それらゆれ
なにも
撒き散らす
なにも
それら翳り
ほのめきもなく
孔
なぜなら
ゆらぎの散乱

色の飛散
ほほ笑む？
毛虫はあした
ほほ笑む？
その散乱
なすすべもなく
蝶になる
なすすべもなく
その密集
ほほ笑む？
這いあがり
ほほ笑む？
色の拡散

樹木の繁り

だから沙羅
うわづり
聲もなく
投げ落とす翳り
昏い目のまま
のけぞり
昏い目のまま
風が。その
聲もなく
ひきつり
だから沙羅
風ら

その心の眼で
もう、なにも
羽搏いた
すでに、もう
沙羅
うつくしくさえない
ほら
うつくしくさえない
目は
すでに、もう
喰っちゃえよ
もう、なにも
心にしか存在しないから

心にしか存在しないから
すでに、もう
喰っちゃえよ
もう、なにも
目は
うつくしくさえない
ほら
うつくしくさえない
沙羅
もう、なにも
羽搏いた
すでに、もう
その心の眼で

風ら

聲もなく

ひきつり

だから沙羅

風が。その

昏い目のまま

のけぞり

昏い目のまま

投げ落とす翳り

だから沙羅

うわづり

聲もなく

樹木の繁り

色の拡散

ほほ笑む？

這いあがる

ほほ笑む？

その密集

なすすべもなく

蝶になる

なすすべもなく

その散乱

ほほ笑む？

毛虫はあした

ほほ笑む？

色の飛散

ゆらぎの散乱

ほのめきもなく

孔

なぜなら

それら翳り

なにも

撒き散らす

なにも

それらゆれ

なぜなら

わたしは耳

ほのめきもなく
沙羅

昏く、ただ狂暴な
風景など
鼓膜裂き
なにもなく
その目
見い出された
皮やぶり
見い出された
沙羅

なにもなく
わめいちゃえ
風景など
あなたは見ていた

ゆらぎの散乱
かたりかけずに
孔
なぜなら
それら光り
なにも
撒き散らす
なにも
それらゆれ
なぜなら
わたしは口
かたりかけずに
沙羅

昏く、ただ狂暴な
言葉など
吐き散らす
なにもなく
その目
ささやくべき
腹くだす
ささやくべき
沙羅

なにもなく
食べちゃえば？
言葉など
あなたは見ていた

*複聲部

○1

食べちゃえば？

腹くだす

吐き散らす

わたしは口

撒き散らす

孔

わめいちゃえ

皮やぶり

鼓膜裂き

わたしは耳

撒き散らす

孔

毛虫はあした

蝶になる

這いあがり

うわづり

のけぞり

ひきつり

羽搏いた

ほら

喰っちゃえよ

○2

なにもなく

ささやくべき
言葉など

なぜなら
なにも
かたりかけずに

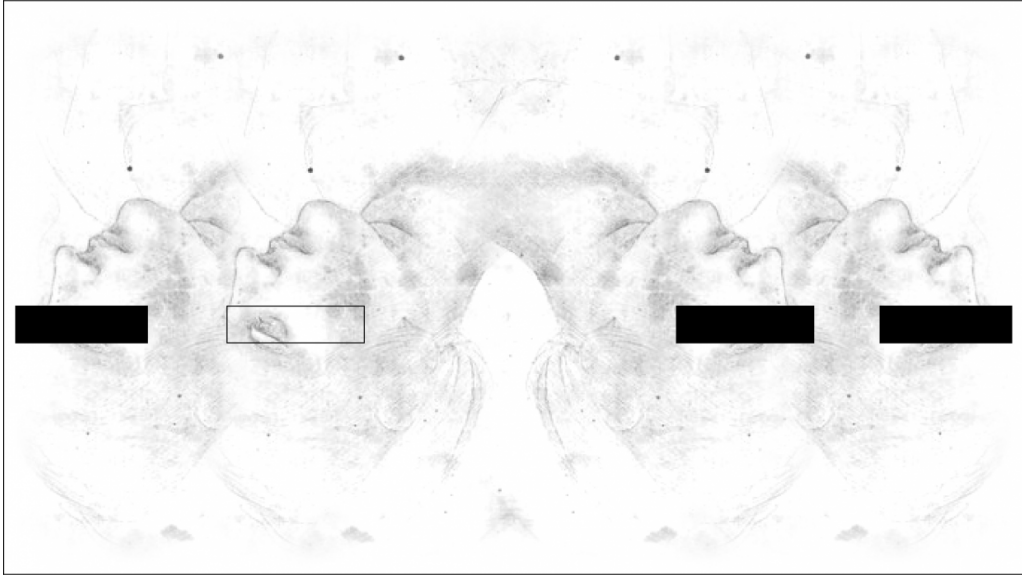
なにもなく
見い出された
風景など

なぜなら
なにも
ほのめきもなく

ほほ笑む？
なすすべもなく
ほほ笑む？

だから沙羅
昏い目のまま
聲もなく

もう、なにも
うつくしくさえない
すでに、もう



二十四偈の伽多//すべて生きられた/すでに/すべて
て/なにもかも

二十四偈の伽多

すべて生きられた
すでに
すべて
なにもかも

沙羅、轉生とは
沙羅
散沙羅、沙羅
なにもものでもなかった

沙羅、轉生とは
沙羅
散沙羅、沙羅
時間の従僕でさえなかった

沙羅、轉生とは
沙羅
散沙羅、沙羅
すべてでしかなかった

わたしはすべて
生きられた。すでに
その須臾にさえ
あなたはすべて

沙羅、轉生とは
沙羅
散沙羅、沙羅
イノチでさえない

沙羅、轉生とは

沙羅
散沙羅、沙羅
かたちさえもない

沙羅、轉生とは
沙羅
散沙羅、沙羅
轉生さえなかった

沙羅、轉生とは
沙羅
散沙羅、沙羅
すべてであった

見られなかったなにものもない
知られなかったなにものもない
過去も未來も
生滅も持続も

すべてすでに見られていたから
すでにすべて知られ
わたしにはすでに
何もなく、あり得ず、目醒め

何もなく、あり得ず、目醒め
あなたはすでに
すでにすべて存在し
すべてすでに生きられていたから

生滅も持続も
過去も未來も
知られなかったなにものもない
見られなかったなにものもない

すべてであった
散沙羅、沙羅
沙羅
沙羅、轉生とは

轉生さえなかった

散沙羅、沙羅
沙羅
沙羅、轉生とは

かたちさえもない
散沙羅、沙羅
沙羅
沙羅、轉生とは

イノチでさえない
散沙羅、沙羅
沙羅
沙羅、轉生とは

沙羅、もはやなにもかも
生きられなかった須臾さえも
散沙羅、沙羅
すでに沙羅

すべてを生きた
散沙羅、沙羅
すべてはもはや
散沙羅、沙羅

あなたはすべて
その須臾にさえ
生きられた。すでに
わたしはすべて

すべてでしかなかった
散沙羅、沙羅
沙羅
沙羅、轉生とは

時間の従僕でさえなかった
散沙羅、沙羅
沙羅
沙羅、轉生とは

なにものでもなかった

散沙羅、沙羅
沙羅
沙羅、轉生とは

なにもかも
すべて
すでに
すべて生きられた

二聲の伽多

すべて生きられた
未生の極樂鳥
すでに
いま羽搏いた極樂鳥
すべて
死滅の極樂鳥
なにもかも

沙羅、轉生とは
未生の鶯
沙羅
いま涙した鶯
散沙羅、沙羅
死滅の鶯
なにものでもなかった

沙羅、轉生とは
未生の雲雀
沙羅
いま唾吐いた雲雀
散沙羅、沙羅
死滅の雲雀
時間の従僕でさえなかった

沙羅、轉生とは
未生の緊那羅利
沙羅
いま舞いあがった緊那羅利
散沙羅、沙羅
死滅の緊那羅利
すべてでしかなかった

わたしはすべて
なにも得ないまま
生きられた。すでに
飛び立つものら
その須臾にさえ
翼なすもの
あなたはすべて

沙羅、轉生とは
未生の虎
沙羅
いま駆け去った虎
散沙羅、沙羅
死滅の虎
イノチでさえない

沙羅、轉生とは
未生の獅子ら
沙羅
いま吼えた獅子ら
散沙羅、沙羅
死滅の獅子ら
かたちさえもない

沙羅、轉生とは
未生の犀ら
沙羅
いま歩み來た犀
散沙羅、沙羅
死滅の犀ら
轉生さえなかった

沙羅、轉生とは
未生の緊那羅
沙羅
いま踊る緊那羅
散沙羅、沙羅
死滅の緊那羅
すべてであった

見られなかったなにもものもない
なにも得ないまま
知られなかったなにもものもない
貪ったものら
過去も未来も
足なすものら
生滅も持続も

すべてすでに見られていたから
　　このものたち
すでにすべて知られ
　　融けるものたち
わたしにはすでに
　　裂けるものたち
何もなく、あり得ず、目醒め

何もなく、あり得ず、目醒め
　　裂けるものたち
あなたはすでに
　　融けるものたち
すでにすべて存在し
　　裂けるものたち
すべてすでに生きられていたから

生滅も持続も
　　足なすものら
過去も未来も
　　貪ったものら
存在しなかったなにもものもない
　　なにも得ないまま
生きられなかったなにもものもない

すべてであった
　　死滅の緊那羅
散沙羅、沙羅
　　いま踊る緊那羅
沙羅
　　未生の緊那羅
沙羅、轉生とは

轉生さえなかった

死滅の犀ら

散沙羅、沙羅

いま歩み來た犀

沙羅

未生の犀ら

沙羅、轉生とは

かたちさえもない

死滅の獅子ら

散沙羅、沙羅

いま吼えた獅子ら

沙羅

未生の獅子ら

沙羅、轉生とは

イノチでさえない

死滅の虎

散沙羅、沙羅

いま駆け去った虎

沙羅

未生の虎ら

沙羅、轉生とは

あなたはすべて

翼なすもの

その須臾にさえ

飛び立ったものら

生きられた。すでに

なにも得ないまま

わたしはすべて

すべてでしかなかった

死滅の緊那利

散沙羅、沙羅

いま舞いあがった緊那利

沙羅

未生の緊那利

沙羅、轉生とは

時間の従僕でさえなかった

死滅の雲雀

散沙羅、沙羅

いま唾吐いた雲雀

沙羅

未生の雲雀

沙羅、轉生とは

なにものでもなかった

死滅の鶯

散沙羅、沙羅

いま涙した鶯

沙羅

未生の鶯

沙羅、轉生とは

なにもかも

死滅の極樂鳥

すべて

いま羽搏いた極樂鳥

すでに

未生の極樂鳥

すべて生きられた

四聲の伽多

すべて生きられた
わたしはすでに
未生の極樂鳥
誰れかが見た
すでに
その色彩
いま羽搏いた極樂鳥
その色彩
すべて
誰れかが見た
死滅の極樂鳥
わたしはすでに
なにもかも

沙羅、轉生とは
わたしはすでに
未生の鶯
誰れかがふれた
沙羅
その温度
いま涙した鶯
その温度
散沙羅、沙羅
誰れかがふれた
死滅の鶯
わたしはすでに
なにもものでもなかった

沙羅、轉生とは
わたしはすでに
未生の雲雀

誰れかが舐めた
沙羅
その甘み
いま唾吐いた雲雀
その甘み
散沙羅、沙羅
誰れかが舐めた
死滅の雲雀
わたしはすでに
時間の従僕でさえなかった

沙羅、轉生とは
わたしはすでに
未生の緊那利
誰れかが聞いた
沙羅
その息吹き
いま舞いあがった緊那利
その息吹き
散沙羅、沙羅
誰れかが聞いた
死滅の緊那利
わたしはすでに
すべてでしかなかった
わたしはすべて
光りに
なにも得ないまま
翳りに
生きられた。すでに
ゆらぐ
飛び立つものら
ゆらぐ
その須臾にさえ
翳りに
翼なすもの
光りに
あなたはすべて

沙羅、轉生とは
わたしはすでに

未生の虎
誰れかがふるえた
沙羅
その痛み
いま駆け去った虎
その痛み
散沙羅、沙羅
誰れかがふるえた
死滅の虎
わたしはすでに
イノチでさえない

沙羅、轉生とは
わたしはすでに
未生の獅子ら
誰れかが怯えた
沙羅

その歡喜
いま吼えた獅子ら
その歡喜
散沙羅、沙羅
誰れかが怯えた
死滅の獅子ら
わたしはすでに
かたちさえもない

沙羅、轉生とは
わたしはすでに
未生の犀ら
誰れかが歎いた
沙羅

その叡智
いま歩み來た犀
その叡智
散沙羅、沙羅
誰れかが歎いた
死滅の犀ら
わたしはすでに
轉生さえなかった

沙羅、轉生とは
わたしはすでに
未生の緊那羅
誰れかが嗅いだ

沙羅
その香り
いま踊る緊那羅
その香り

散沙羅、沙羅
誰れかが嗅いだ
死滅の緊那羅
わたしはすでに
すべてであった

見られなかったなにもものもない
ひたすらな全能
なにも得ないまま
万象

知られなかったなにもものもない
ただなすすべもなく
貪ったものら
ただなすすべなく

過去も未来も
万象
足なすものら
ひたすらな全能

生滅も持続も

すべてすでに見られていたから
いなかったものたち
這うものたち
性差あるもの

すでにすべて知られ
夢見られたものたち
融けるものたち
ひとつのものたち

わたしにはすでに
化と幻たち
裂けるものたち
両性俱有者

何もなく、あり得ず、目醒め

何もなく、あり得ず、目醒め

泳ぐものたち

死なないものたち

變化するものたち

あなたはすでに

浮かぶものたち

茂るものたち

放つものたち

すでにすべて存在し

湧き出すものたち

蔓延るものたち

壊すものたち

すべてすでに生きられていたから

生滅も持続も

万象

足なすものら

ひたすらな全能

過去も未来も

ただなすすべもなく

貪ったものら

ただなすすべもなく

存在しなかったなにもものもない

ひたすらな全能

なにも得ないまま

万象

生きられなかったなにもない

すべてであった

誰れかが嗅いだ

死滅の緊那羅

わたしはすでに

散沙羅、沙羅

その香り

いま踊る緊那羅

その香り

沙羅

わたしはすでに

未生の緊那羅
誰れかが嗅いだ
沙羅、轉生とは

轉生さえなかった
誰れかが歎いた
死滅の犀ら
わたしはすでに
散沙羅、沙羅
その叡智
いま歩み來た犀
その叡智
沙羅

わたしはすでに
未生の犀ら
誰れかが歎いた
沙羅、轉生とは

かたちさえもない
誰れかが怯えた
死滅の獅子ら
わたしはすでに
散沙羅、沙羅
その歡喜
いま吼えた獅子ら
その歡喜
沙羅

わたしはすでに
未生の獅子ら
誰れかが怯えた
沙羅、轉生とは

イノチでさえない
誰れかがふるえた
死滅の虎
わたしはすでに
散沙羅、沙羅
その痛み
いま駆け去った虎
その痛み

沙羅

わたしはすでに
未生の虎ら
誰れかがふるえた
沙羅、轉生とは

あなたはすべて

翳りに
翼なすもの
光りに
その須臾にさえ
ゆらぐ
飛び立ったものら
ゆらぐ
生きられた。すでに
光りに
なにも得ないまま
翳りに
わたしはすべて

すべてでしかなかった

誰れかが聞いた
死滅の緊那利
わたしはすでに
散沙羅、沙羅
その息吹き
いま舞いあがった緊那利
その息吹き

沙羅

わたしはすでに
未生の緊那利
誰れかが聞いた
沙羅、轉生とは

時間の従僕でさえなかった

誰れかが舐めた
死滅の雲雀
わたしはすでに
散沙羅、沙羅
その甘み

いま唾吐いた雲雀
その甘み
沙羅
わたしはすでに
未生の雲雀
誰れかが舐めた
沙羅、轉生とは

なにものでもなかった
誰れかがふれた
死滅の鶯
わたしはすでに
散沙羅、沙羅
その温度
いま涙した鶯
その温度
沙羅

わたしはすでに
未生の鶯
誰れかがふれた
沙羅、轉生とは

なにもかも
誰れかが見た
死滅の極樂鳥
わたしはすでに
すべて
その色彩
いま羽搏いた極樂鳥
その色彩
すでに
わたしはすでに
未生の極樂鳥
誰れかが見た
すべて生きられた

* 複聲部

○ 1

未生の極樂鳥

いま羽搏いた極樂鳥

死滅の極樂鳥

未生の鶯

いま涙した鶯

死滅の鶯

未生の雲雀

いま唾吐いた雲雀

死滅の雲雀

未生の緊那利

いま舞いあがった緊那利

死滅の緊那利

なにも得ないまま

飛び立ったものら

翼なすもの

未生の虎

いま駆け去った虎

死滅の虎

未生の獅子ら

いま吼えた獅子ら

死滅の獅子ら

未生の犀ら

いま歩み來た犀

死滅の犀ら

未生の緊那羅
いま踊る緊那羅
死滅の緊那羅

なにも得ないまま
貪ったものら
足なすものら

這うものたち
融けるものたち
裂けるものたち

○2
わたしはすでに
その色彩
誰れかが見た

わたしはすでに
その温度
誰れかがふれた

わたしはすでに
その甘み
誰れかが舐めた

わたしはすでに
その息吹き
誰れかが聞いた

光りに
ゆらぐ
翳りに

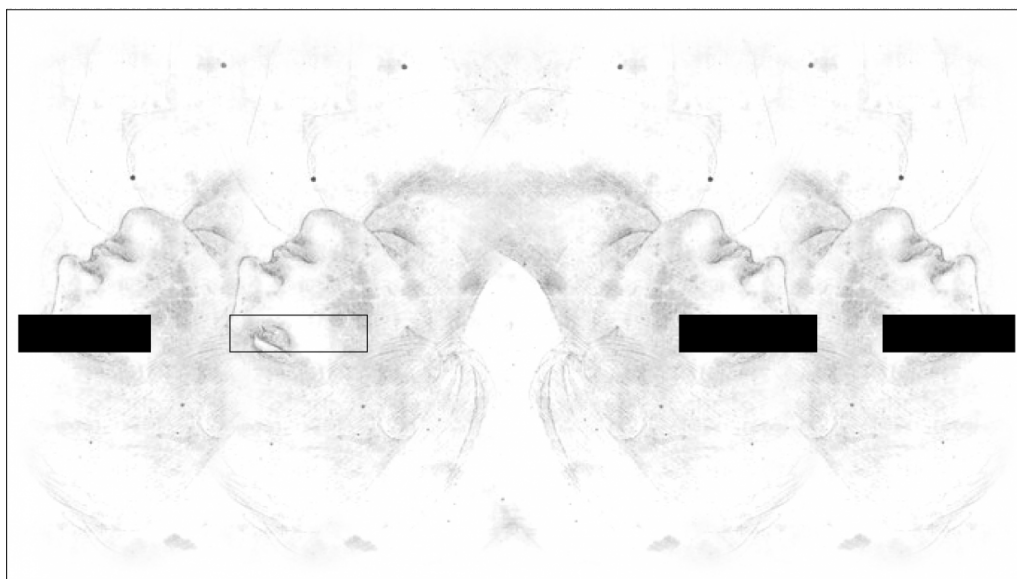
わたしはすでに
その痛み
誰れかがふるえた

わたしはすでに
その歓喜
誰れかが怯えた

わたしはすでに
その叡智
誰れかが歎いた

わたしはすでに
その香り
誰れかが嗅いだ

ひたすらな全能
ただなすすべもなく
万象



十四偈の伽多//もうすぐ空は/沙羅/破れるだろう/
明日には、ほら

十四偈の伽多

もうすぐ空は
沙羅
破れるだろう
明日には、ほら

鳥たちがもう
飛ばないから
沙羅
捨てられた鳥ら

もうすぐ海は
沙羅
燃えるだろう
いまにも、ほら

魚たちがもう
空へ逃げたから
沙羅
鰓のない魚ら

もうすぐ土は
沙羅
飛沫をあげるだろう
すでに、ほら

獣は自分で
墓をつかった
沙羅
だから足場もない殻

殻もない

抜け殻
なにもない
なにもないから

なにもないから
なにもない
抜け殻
殻もない

だから足場もない殻
沙羅
墓をつくった
獣は自分で

すでに、ほら
飛沫をあげるだろう
沙羅
もうすぐ土は

鰓のない魚ら
沙羅
空へ逃げたから
魚たちがもう

いまにも、ほら
燃えるだろう
沙羅
もうすぐ海は

捨てられた鳥ら
沙羅
飛ばないから
鳥たちがもう

明日には、ほら
破れるだろう
沙羅
もうすぐ空は

二聲の伽多

もうすぐ空は
感じたのだった
沙羅
あなたは
破れるだろう
灼かれる気配を
明日には、ほら

鳥たちがもう
中庭に
飛ばないから
日差し
沙羅
あかるくそそぐ
捨てられた鳥ら

もうすぐ海は
感じたのだった
沙羅
そのうぶ毛も
燃えるだろう
あたたかな光り
いまにも、ほら

魚たちがもう
さわいでいた。そっと
空へ逃げたから
耳に沁むように
沙羅
こすれあう葉々
鰓のない魚ら

もうすぐ土は
やさしくなるのだった
沙羅
何故？
飛沫をあげるだろう
心が
すでに、ほら

獣は自分で
ほほ笑むのだ
墓をつくった
ひとりで
沙羅
あなたは
だから足場もない殻

殻もない
さらさらゆれる
抜け殻
風に
なにもない
ほら、木漏れ日
なにもないから

なにもないから
ほら、木漏れ日
なにもない
風に
抜け殻
さらさらゆれる
殻もない

だから足場もない殻
あなたは
沙羅
ひとりで
墓をつくった
ほほ笑むのだ
獣は自分で

すでに、ほら

心が

飛沫をあげるだろう

何故？

沙羅

やさしくなるのだった

もうすぐ土は

鰓のない魚ら

こすれあう葉々

沙羅

耳に沁むように

空へ逃げたから

さわいでいた。そっと

魚たちがもう

いまにも、ほら

あたたかな光り

燃えるだろう

そのうぶ毛も

沙羅

感じたのだった

もうすぐ海は

捨てられた鳥ら

あかるくそそぐ

沙羅

日差し

飛ばないから

中庭に

鳥たちがもう

明日には、ほら

灼かれる気配を

破れるだろう

あなたは

沙羅

感じたのだった

もうすぐ空は

四聲の伽多

もうすぐ空は
くすぐったい？
感じたのだった
まじ？

沙羅

なんで？
あなたは
なんで？
破れるだろう
まじ？
灼かれる気配を
くすぐったい？
明日には、ほら

鳥たちがもう
笑っちゃいそう？
中庭に
なんかね
飛ばないから
…ね？
日差し
…ね？

沙羅

なんかね
あかるくそそぐ
笑っちゃいそう？
捨てられた鳥ら

もうすぐ海は
うざくない？
感じたのだった

若干ね
沙羅
　　なんかさ
　　そのうぶ毛も
　　なんかね
燃えるだろう
　　若干ね
　　あたたかな光り
　　うざくない？
いまにも、ほら

魚たちがもう
　　いいかんじ？
　　さわいでいた。そっと
　　なんかね
空へ逃げたから
　　もう、さ
　　耳に沁むように
　　まじ、さ

沙羅
　　なんかね
　　こすれあう葉々
　　いいかんじ？
鰓のない魚ら

もうすぐ土は
　　まあまあ？　なんか
　　やさしくなるのだった

沙羅
　　なんとなく、さ
　　何故？
　　なんとなく
飛沫をあげるだろう
　　それなりだよ
心が
　　まあまあ？　なんか
すでに、ほら

獣は自分で
　　いいんじゃない？

ほほ笑むのだ
問題なくない？
墓をつくった
べつに
ひとりで
べつに
沙羅
問題なくない？
あなたは
いいんじゃない？
だから足場もない殻

殻もない
やべえーから
さらさらゆれる
やばすぎじゃん？

抜け殻
まじかよ？
風に
まじかよ？
なにもない
やばすぎじゃん？
ほら、木漏れ日
やべえーから
なにもないから

なにもないから
やばすぎじゃん？
ほら、木漏れ日
やべえーから

なにもない
まじかよ？
風に
まじかよ？
抜け殻
やべえーから
さらさらゆれる
やばすぎじゃん？
殻もない

だから足場もない殻
問題なくない？
あなたは
いいんじゃない？

沙羅
べつに
ひとりで
べつに
墓をつくった
いいんじゃない？
ほほ笑むのだ
問題なくない？
獣は自分で

すでに、ほら
それなりだよね
心が
まあまあ？ なんか
飛沫をあげるだろう
なんとなく
何故？
なんとなく、さ

沙羅
まあまあ？ なんか
やさしくなるのだった
それなりじゃん？
もうすぐ土は

鰓のない魚ら
なんかね
こすれあう葉々
いいかんじ？

沙羅
まじ、さ
耳に沁むように
もう、さ
空へ逃げたから
いいかんじ？
さわいでいた。そっと
なんかね

魚たちがもう

いまにも、ほら

若干ね

あたたかな光り

うざくない？

燃えるだろう

なんかね

そのうぶ毛も

なんかさ

沙羅

うざくない？

感じたのだった

若干ね

もうすぐ海は

捨てられた鳥ら

なんかね

あかるくそそぐ

笑っちゃいそう？

沙羅

…ね？

日差し

…ね？

飛ばないから

笑っちゃいそう？

中庭に

なんかね

鳥たちがもう

明日には、ほら

まじ？

灼かれる気配を

くすぐったい？

破れるだろう

なんで？

あなたは

なんで？

沙羅

くすぐったい？

感じたのだった
まじ？
もうすぐ空は

*複聲部

○1

感じたのだった
あなたは
灼かれる気配を

中庭に
日差し
あかるくそそぐ

感じたのだった
そのうぶ毛も
あたたかな光り

さわいでいた。そっと
耳に沁むように
こすれあう葉々

やさしくなるのだった
何故？
心が

ほほ笑むのだ
ひとりで
あなたは

さらさらゆれる
風に
ほら、木漏れ日

ほら、木漏れ日
風に

さらさらゆれる

あなたは
ひとりで
ほほ笑むのだ

心が
何故？
やさしくなるのだった

こすれあう葉々
耳に沁むように
さわいでいた。そっと

あたたかな光り
そのうぶ毛も
感じたのだった

あかるくそそぐ
日差し
中庭に

灼かれる気配を
あなたは
感じたのだった

○2
くすぐったい？
なんで？
まじ？

笑っちゃいそう？
…ね？
なんかね

うざくない？
なんかさ（なんかね）
若干ね

いいかんじ？
もう、さ（まじ、さ）
なんかね

まあまあ？ なんか
なんとなく、さ（なんとなく）
それなりだよね

いいんじゃない？
べつに
問題なくない？

やべえーから
まじかよ？
やばすぎじゃん？

やばすぎじゃん？
まじかよ？
やべえーから

問題なくない？
べつに
いいんじゃない？

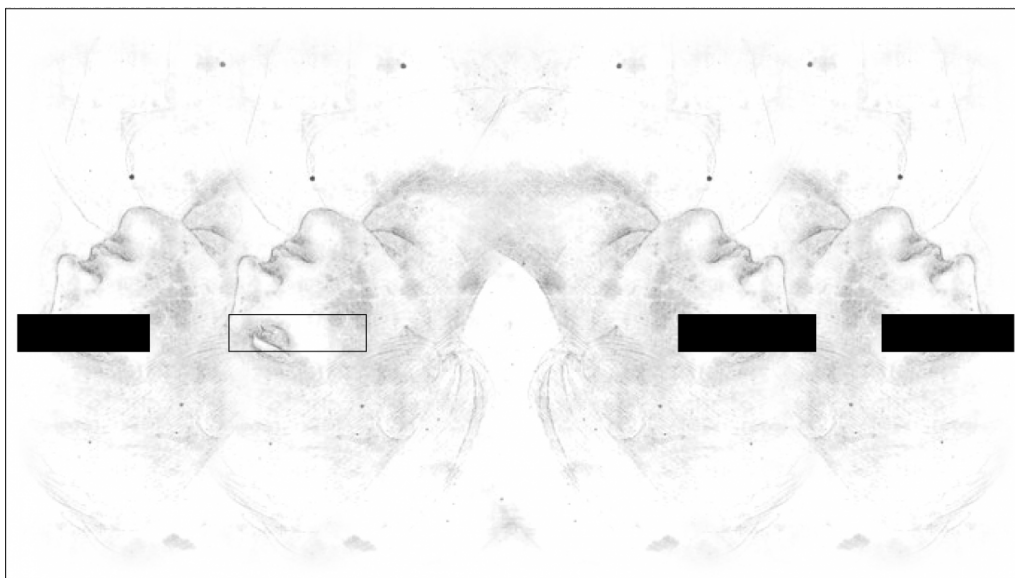
それなりだよね
なんとなく
まあまあ？ なんか

なんかね
まじ、さ
いいかんじ？

若干ね
なんかね
うざくない？

なんかね
…ね？
笑っちゃいそう？

まじ？
なんで？
くすぐったい？



十二偈の伽多//沙羅。ほほ笑み/ブーゲンビリアの/
花の翳りに/沙羅、その

十二偈の伽多

沙羅。ほほ笑み
ブーゲンビリアの
花の翳りに
沙羅、その

沙羅。ほほ笑み
ブーゲンビリアの
花の火照りに
沙羅、その

沙羅。ほほ笑み
ブーゲンビリアの
花の色の下
沙羅、その

沙羅。色づく葉
花のように
色づいた葉ら
擬態ら。沙羅

わたしは擬態
わたしが擬態
イノチを擬態
花さえ擬態

咲くさえ擬態
散るさえ擬態
沙羅さえ擬態
擬態の沙羅の

沙羅の擬態の

沙羅さえ擬態
散るさえ擬態
咲くさえ擬態

花さえ擬態
イノチを擬態
わたしが擬態
わたしは擬態

擬態ら。沙羅
色づいた葉ら
花のように
沙羅。色づく葉

沙羅、その
花の色の下
ブーゲンビリアの
沙羅。ほほ笑み

沙羅、その
花の火照りに
ブーゲンビリアの
沙羅。ほほ笑み

沙羅、その
花の翳りに
ブーゲンビリアの
沙羅。ほほ笑み

二聲の伽多

沙羅。ほほ笑み
誰？
ブーゲンビリアの
聞いていた
花の翳りに
聲を
沙羅、その

沙羅。ほほ笑み
なに？
ブーゲンビリアの
ひびいていた
花の火照りに
女の聲
沙羅、その

沙羅。ほほ笑み
莫迦？
ブーゲンビリアの
でぶで、狂った
花の色の下
女
沙羅、その

沙羅。色づく葉
褐色の女は
花のように
ゆらした
色づいた葉ら
肉のぶよつきを
擬態ら。沙羅

わたしは擬態
盗みに來たろ？
わたしが擬態
盗まれたあとに
イノチを擬態
盗みに來たろ？
花さえ擬態

咲くさえ擬態
笑えばいいよ
散るさえ擬態
沙羅、壊れもの
沙羅さえ擬態
彼女は屑
擬態の沙羅の

沙羅の擬態の
糞まみれの豚
沙羅さえ擬態
沙羅、壊れもの
散るさえ擬態
屠殺しちゃう？
咲くさえ擬態

花さえ擬態
奪いに來たろ？
イノチを擬態
もう奪われたよ
わたしが擬態
奪いに來たろ？
わたしは擬態

擬態ら。沙羅
肉のぶよつきを
色づいた葉ら
ゆらした
花のように
褐色の女は
沙羅。色づく葉

沙羅、その
女
花の色の下
でぶで、狂った
ブーゲンビリアの
莫迦？
沙羅。ほほ笑み

沙羅、その
女の聲
花の火照りに
ひびいていた
ブーゲンビリアの
なに？
沙羅。ほほ笑み

沙羅、その
聲を
花の翳りに
聞いていた
ブーゲンビリアの
誰？
沙羅。ほほ笑み

四聲の伽多

沙羅。ほほ笑み
しばって
誰？
燃やしたら？
ブーゲンビリアの
火をつけ
聞いていた
火をつけ
花の翳りに
燃やしたら？
聲を
しばって
沙羅、その

沙羅。ほほ笑み
目つぶし
なに？
吊るしたら？
ブーゲンビリアの
猿轡咬ませ
ひびいていた
猿轡咬ませ
花の火照りに
吊るしたら？
女の聲
目つぶし
沙羅、その

沙羅。ほほ笑み
小指折り
莫迦？

舌抜けば？
ブーゲンビリアの
爪はぎ
でぶで、狂った
爪はぎ
花の色の下
舌抜けば？
女
小指折り
沙羅、その

沙羅。色づく葉
存在価値なし
褐色の女は
なすすべもない
花のように
生きる価値なし
ゆらした
生きる価値なし
色づいた葉ら
なすすべもない
肉のぶよつきを
存在価値なし
擬態ら。沙羅

わたしは擬態
知ってる？
盗みに來たろ？
ただの間違い
わたしが擬態
あなたこそ
盗まれたあとに
あなたこそ
イノチを擬態
ただの間違い
盗みに來たろ？
知ってる？
花さえ擬態

咲くさえ擬態

この世界の恥辱
笑えばいいよ
知ってる？
散るさえ擬態
あなただけが
沙羅、壊れもの
あなただけが
沙羅さえ擬態
知ってる？
彼女は屑
この世界の恥辱
擬態の沙羅の

沙羅の擬態の
この世界の恥辱
糞まみれの豚
知ってる？
沙羅さえ擬態
あなただけが
沙羅、壊れもの
あなただけが
散るさえ擬態
知ってる？
屠殺しちゃう？
この世界の恥辱
咲くさえ擬態

花さえ擬態
ただの間違い
奪いに來たろ？
知ってる？
イノチを擬態
あなたこそ
もう奪われたよ
あなたこそ
わたしが擬態
知ってる？
奪いに來たろ？
ただの間違い
わたしは擬態

擬態ら。沙羅

なすすべもない

肉のぶよつきを

存在価値なし

色づいた葉ら

生きる価値なし

ゆらした

生きる価値なし

花のように

存在価値なし

褐色の女は

なすすべもない

沙羅。色づく葉

沙羅、その

舌抜けば？

女

小指折り

花の色の下

爪はぎ

でぶで、狂った

爪はぎ

ブーゲンビリアの

小指折り

莫迦？

舌抜けば？

沙羅。ほほ笑み

沙羅、その

吊るしたら？

女の聲

目つぶし

花の火照りに

猿轡咬ませ

ひびいていた

猿轡咬ませ

ブーゲンビリアの

目つぶし

なに？

吊るしたら？
沙羅。ほほ笑み

沙羅、その
燃やしたら？
聲を
しばって
花の翳りに
火をつけ
聞いていた
火をつけ
ブーゲンビリアの
しばって
誰？
燃やしたら？
沙羅。ほほ笑み

* 複聲部

○1

誰？

聞いていた

聲を

なに？

ひびいていた

女の聲

莫迦？

でぶで、狂った

女

褐色の女は

ゆらした

肉のぶよつきを

盗みに來たろ？

盗まれたあとに

盗みに來たろ？

笑えばいいよ

沙羅、壞れもの

彼女は屑

糞まみれの豚

沙羅、壞れもの

屠殺しちゃう？

奪いに來たろ？

もう奪われたよ

奪いに來たろ？

肉のぶよつきを
ゆらした
褐色の女は

女
でぶで、狂った
莫迦？

女の聲
ひびいていた
なに？

聲を
聞いていた
誰？

○2
しばって
火をつけ
燃やしたら？

目つぶし
猿轡咬ませ
吊るしたら？

小指折り
爪はぎ
舌抜けば？

存在価値なし
生きる価値なし
なすすべもない

知ってる？
あなたこそ
ただの間違い

知ってる？
あなただけが
この世界の恥辱

この世界の恥辱
あなただけが
知ってる？

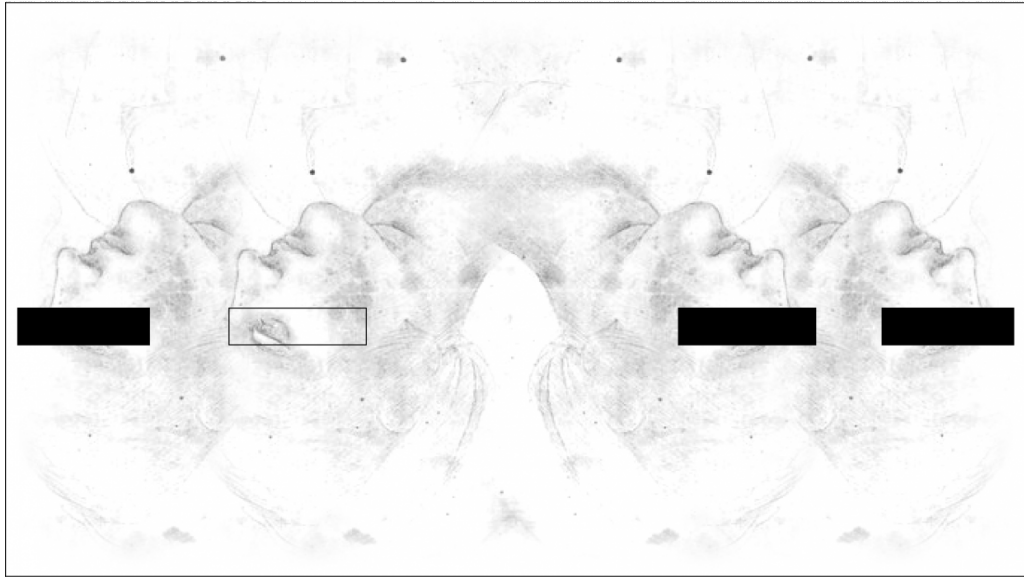
ただの間違い
あなたこそ
知ってる？

なすすべもない
生きる価値なし
存在価値なし

舌抜けば？
爪はぎ
小指折り

吊るしたら？
猿轡咬ませ
目つぶし

燃やしたら？
火をつけ
しばって



二十一の伽多//化ものら/沙羅、それは/それは、沙
羅/だから怪物ら

二十一の伽多

化ものら
沙羅、それは
それは、沙羅
だから怪物ら

空も土も
海も雨も
あなたたちの爲でないなら
わたしの爲でないなら

化ものら
沙羅、だから
それは、沙羅
怪物ら

わたしたちの爲でないなら
あなたの爲でないなら
花も葉々も
蜜もその蕊も

沙羅、鏡の中に
ほら、化ものら
沙羅、だから沙羅
それは、沙羅

沙羅、水面にも
ほら、怪物ら
沙羅、だから沙羅
それは、沙羅

化ものたちが

ささやきあった
怪物ら
ただ異形のものら

ふれた葉ら
その色ら
かたちも化もの
沙羅、怪物ら

嗅ぐ花ら
その香りら
それら化もの
沙羅、怪物ら

味わう蜜ら
その味ら
それら化もの
沙羅、怪物ら

沙羅、化ものら
沙羅、それら聲、息吹き
それら息吹き、聲なし
沙羅、化ものら

沙羅、怪物ら
それら化もの
その味ら
味わう蜜ら

沙羅、怪物ら
それら化もの
その香ら
嗅ぐ花ら

沙羅、怪物ら
かたちも化もの
その色ら
ふれた葉ら

ただ異形のものら

怪物ら
ささやきあった
化ものたちが

それは、沙羅
沙羅、だから沙羅
ほら、怪物ら
沙羅、水面にも

それは、沙羅
沙羅、だから沙羅
ほら、化ものら
沙羅、鏡の中に

蜜もその蕊も
花も葉々も
あなたの爲でないなら
わたしたちの爲でないなら

怪物ら
それは、沙羅
沙羅、だから
化ものら

わたしの爲でないなら
あなたたちの爲でないなら
海も雨も
空も土も

怪物ら
それは、沙羅
沙羅、だから
化ものら

二聲の伽多

化ものら

なに？…え？

沙羅、それは

は？…ん？

それは、沙羅

それにんげんのことば？

だから怪物ら

空も土も

だれ？ あんた

海も雨も

なにもの？

あなたたちの爲でないなら

なに？

わたしの爲でないなら

化ものら

なに？…え？

沙羅、だから

は？…ん？

それは、沙羅

それにんげんのかたち？

怪物ら

わたしたちの爲でないなら

だからだれ？

あなたの爲でないなら

あんたなに？

花も葉々も

なに？

蜜もその蕊も

沙羅、鏡の中に
きもくない？
ほら、化ものら
くさくない？
沙羅、だから沙羅
やばくない？
それは、沙羅

沙羅、水面にも
だいじょうぶ？
ほら、怪物ら
まともじゃなくね？
沙羅、だから沙羅
あんただれ？
それは、沙羅

化ものたちが
ぼくらはイノチ
ささやきあった
とうといイノチ
怪物ら
やばくない？
ただ異形のものら

ふれた葉ら
なに？…え？
その色ら
は？…ん？
かたちも化もの
それにんげんのあたま？
沙羅、怪物ら

嗅ぐ花ら
なに？…え？
その香りら
は…ん？
それら化もの
それにんげんのかお？
沙羅、怪物ら

味わう蜜ら

なに？…え

その味ら

は…ん？

それら化もの

それにんげんのはな？

沙羅、怪物ら

沙羅、化ものら

でたらめじゃん？

沙羅、それら聲、息吹き

くっそやばくね？

それら息吹き、聲なし

でたらめじゃん？

沙羅、化ものら

沙羅、怪物ら

それにんげんのはな？

それら化もの

は？…ん？

その味ら

なに？…え？

味わう蜜ら

沙羅、怪物ら

それにんげんのかお？

それら化もの

は？…ん？

その香ら

なに？…え？

嗅ぐ花ら

沙羅、怪物ら

それにんげんのあたま？

かたちも化もの

は？…ん？

その色ら

なに？…え？

ふれた葉ら

ただ異形のものら

やばくない？

怪物ら

とうといイノチ

ささやきあった

ぼくらはイノチ

化ものたちが

それは、沙羅

あんただれ？

沙羅、だから沙羅

まともじゃなくね？

ほら、怪物ら

だいじょうぶ？

沙羅、水面にも

それは、沙羅

やばくない？

沙羅、だから沙羅

くさくない？

ほら、化ものら

きもくない？

沙羅、鏡の中に

蜜もその蕊も

なに？

花も葉々も

あんたなに？

あなたの爲でないなら

だからだれ？

わたしたちの爲でないなら

怪物ら

それにんげんのかたち？

それは、沙羅

は？…ん？

沙羅、だから

なに？…え？

化ものら

わたしの爲でないなら

なに？

あなたたちの爲でないなら

なにもの？

海も雨も

だれ？ あんた

空も土も

怪物ら

それにんげんのことば？

それは、沙羅

は？…ん？

沙羅、だから

なに？…え？

化ものら

四聲の伽多

化ものら

立ち去りかけ

なに？…え？

振り返た

沙羅、それは

その老婆

は？…ん？

その老婆

それは、沙羅

振り返た

それにんげんのことば？

立ち去りかけ

だから怪物ら

空も土も

何故？

だれ？ あんた

ひとりで笑った

海も雨も

何故？

なにもの？

何故？

あなたたちの爲でないなら

ひとりで笑った

なに？

何故？

わたしの爲でないなら

化ものら

口をひらきかけ

なに？…え？

いきなり絶句
沙羅、だから
 そのふとっちょ
は?…ん?
 そのふとっちょ
それは、沙羅
 いきなり絶句
それにんげんのかたち?
 口をひらきかけ
怪物ら

わたしたちの爲でないなら
 何故?
だからだれ?
 瞳孔をひらいた
あなたの爲でないなら
 何故?
あんたなに?
 何故?
花も葉々も
 瞳孔をひらいた
なに?
 何故?
蜜もその蕊も

沙羅、鏡の中に
 あなたは
 きもくない?
 何故?
ほら、化ものら
 軽蔑
 くさくない?
 軽蔑
沙羅、だから沙羅
 何故?
 やばくない?
 あなたは
それは、沙羅

沙羅、水面にも

散る。花
だいじょうぶ？
花？…散る
ほら、怪物ら
ブーゲンビリア
まともじゃなくね？
ブーゲンビリア
沙羅、だから沙羅
花？…散る
あんただれ？
散る。花
それは、沙羅

化ものたちが
風が吹くから
ぼくらはイノチ
風がなくても
ささやきあった
散る。…花？
とうといイノチ
散る。…花？
怪物ら
風がなくても
やばくない？
風が吹くから
ただ異形のものら

ふれた葉ら
目舞いした？
なに？…え？
傾く
その色ら
老婆
は？…ん？
老婆
かたちも化もの
傾く
それにんげんのあたま？
目舞いした？
沙羅、怪物ら

嗅ぐ花ら

とまりかけたのは蠅

なに？…え？

はんびらき

その香りら

ふとっちょの唇

は…ん？

ふとっちょの唇

それら化もの

それにんげんのかお？

とまりかけたのは蠅

沙羅、怪物ら

味わう蜜ら

すすって飲み込み

なに？…え

鼻水たれそう？

その味ら

老婆

は…ん？

老婆

それら化もの

鼻水たれそう？

それにんげんのはな？

すすって飲み込み

沙羅、怪物ら

沙羅、化ものら

さわぐ木漏れ日

でたらめじゃん？

ゆらぐ翳りら

沙羅、それら聲、息吹き

ブーゲンビリア

くっそやばくね？

ブーゲンビリア

それら息吹き、聲なし

ゆらぐ翳りら

でたらめじゃん？

さわぐ木漏れ日

沙羅、化ものら

沙羅、怪物ら

鼻水たれそう？

それにんげんのはな？

すすって飲み込み

それら化もの

老婆

は？…ん？

老婆

その味ら

すすって飲み込み

なに？…え？

鼻水たれそう？

味わう蜜ら

沙羅、怪物ら

はんびらき

それにんげんのかお？

とまりかけたのは蠅

それら化もの

ふとっちょの唇

は？…ん？

ふとっちょの唇

その香ら

とまりかけたのは蠅

なに？…え？

はんびらき

嗅ぐ花ら

沙羅、怪物ら

傾く

それにんげんのあたま？

目舞いした？

かたちも化もの

老婆

は？…ん？

老婆

その色ら

目舞いした？

なに？…え？
傾く
ふれた葉ら

ただ異形のものら
風がなくても
やばくない？
風が吹くから
怪物ら
散る。…花？
とうといイノチ
散る。…花？
ささやきあった
風が吹くから
ぼくらはイノチ
風がなくても
化ものたちが

それは、沙羅
花？…散る
あんただれ？
散る。花
沙羅、だから沙羅
ブーゲンビリア
まともじゃなくね？
ブーゲンビリア
ほら、怪物ら
散る。花
だいじょうぶ？
花？…散る
沙羅、水面にも

それは、沙羅
何故？
やばくない？
あなたは
沙羅、だから沙羅
軽蔑
くさくない？
軽蔑

ほら、化ものら
あなたは
きもくない？
何故？
沙羅、鏡の中に

蜜もその蕊も
瞳孔をひらいた
なに？
何故？
花も葉々も
何故？
あんたなに？
何故？
あなたの爲でないなら
何故？
だからだれ？
瞳孔をひらいた
わたしたちの爲でないなら

怪物ら
いきなり絶句
それにんげんのかたち？
口をひらきかけ
それは、沙羅
そのふとっちょ
は？…ん？
そのふとっちょ
沙羅、だから
口をひらきかけ
なに？…え？
いきなり絶句
化ものら

わたしの爲でないなら
ひとりで笑った
なに？
何故？
あなたたちの爲でないなら
何故？

なにもの？
何故？
海も雨も
何故？
だれ？ あんた
ひとりで笑った
空も土も

怪物ら
振り返た
それにんげんのことば？
立ち去りかけ
それは、沙羅
その老婆
は？…ん？
その老婆
沙羅、だから
立ち去りかけ
なに？…え？
振り返た
化ものら

* 複聲部

○1

なに?…え?

は?…ん?

それにんげんのことば?

だれ? あんた

なにもの?

なに?

なに?…え?

は?…ん?

それにんげんのかたち?

だからだれ?

あんたなに?

なに?

きもくない?

くさくない?

やばくない?

だいじょうぶ?

まともじゃなくね?

あんただれ?

ぼくらはイノチ

とうといイノチ

やばくない?

なに?…え?

は?…ん?

それにんげんのあたま？

なに？…え？

は？…ん？

それにんげんのかお？

なに？…え？

は？…ん？

それにんげんのはな？

でたらめじゃん？

くっそやばくね？

でたらめじゃん？

それにんげんのはな？

は？…ん？

なに？…え？

それにんげんのかお？

は？…ん？

なに？…え？

それにんげんのあたま？

は？…ん？

なに？…え？

やばくない？

とうといイノチ

ぼくらはイノチ

あんただれ？

まともじゃなくね？

だいじょうぶ？

やばくない？

くさくない？

きもくない？

なに？

あんたなに？

だからだれ？

それにんげんのかたち？

は？…ん？

なに？…え？

なに？

なにもの？

だれ？ あんた

それにんげんのことば？

は？…ん？

なに？…え？

○ 2

立ち去りかけ

その老婆

振り返た

何故？

何故？

ひとりで笑った

口をひらきかけ

そのふとっちょ

いきなり絶句

何故？

何故

瞳孔をひらいた

あなたは

軽蔑

何故？

散る。花

ブーゲンビリア

花？…散る

風が吹くから
散る。…花？
風がなくても

目舞いした？
老婆
傾く

とまりかけたのは蠅
ふとっちょの唇
はんびらき

すすって飲み込み
老婆
鼻水たれそう？

さわぐ木漏れ日
ブーゲンビリア
ゆらぐ翳りら

鼻水たれそう？
老婆
すすって飲み込み

はんびらき
ふとっちょの唇
とまりかけたのは蠅

傾く
老婆
目舞いした？

風がなくても
散る。…花？
風が吹くから

花？…散る
ブーゲンビリア
散る。花

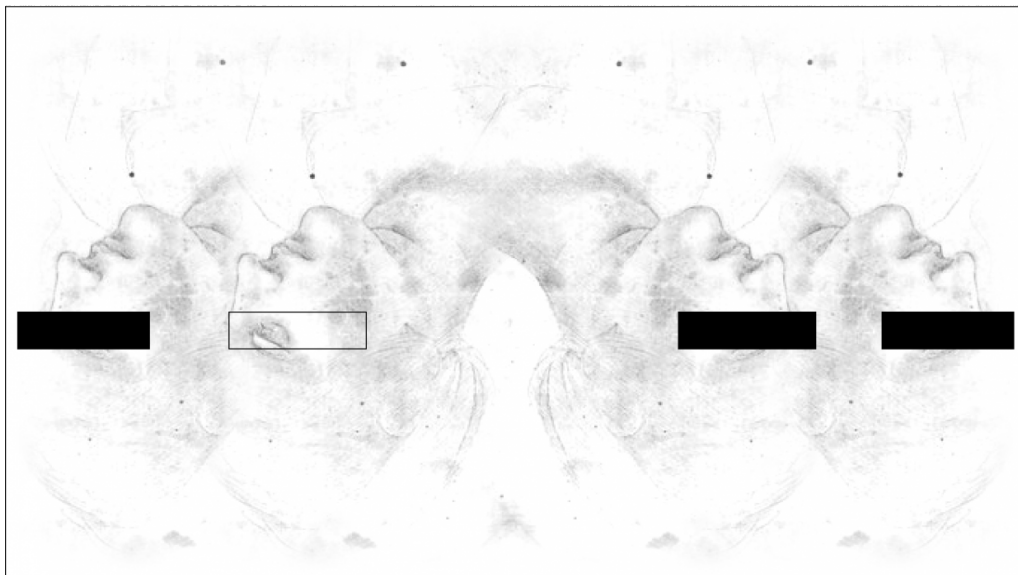
何故？
軽蔑
あなたは

瞳孔をひらいた
何故？
何故？

いきなり絶句
そのふとっちょ
口をひらきかけ

ひとりで笑った
何故？
何故？

振り返た
その老婆
立ち去りかけ



七偈の伽多//さらさらと沙羅/色彩のはじく/さら
さらと/響き

七偈の伽多

さらさらと沙羅
色彩のはじく
さらさらと
響き

燦燦と沙羅
日差しの中に
舞い散るそれら
色彩

さらさらと沙羅
色彩のはじく
さらさらと
響き

もうすぐ沙羅
風がやむ
風がやむ
もうすぐ沙羅

響き
さらさらと
色彩のはじく
さらさらと沙羅

色彩
舞い散るそれら
日差しの中に
燦燦と沙羅

響き

さらさらと
色彩のはじく
さらさらと沙羅

二聲の伽多

さらさらと沙羅
そのふとっちょは
色彩のはじく
不意に目を剥く
さらさらと
茫然と
響き

燦燦と沙羅
だから痴呆
日差しの中に
するどいを眼をした
舞い散るそれら
にらみつける
色彩

さらさらと沙羅
そのふっちょは
色彩のはじく
失神した
さらさらと
わめきながら
響き

もうすぐ沙羅
お前のせいだよ
風がやむ
地面が熱いよ
風がやむ
お前のせいだよ
もうすぐ沙羅

響き

わめきながら
さらさらと
失神した
色彩のはじく
そのふとっちょは
さらさらと沙羅

色彩

にらみつける
舞い散るそれら
するどい眼をした
日差しの中に
だから痴呆
燦燦と沙羅

響き

茫然と
さらさらと
不意に目を剥く
色彩のはじく
そのふとっちょは
さらさらと沙羅

四聲の伽多

さらさらと沙羅
 昏い目
 そのふとっちょは
 いま
色彩のはじく
 あなたは
 不意に目を剝く
 あなたは
さらさらと
 いま
 茫然と
 昏い目
響き

燦燦と沙羅
 慣れ切ってしまったかのような
 だから痴呆
日差しの中に
 ことごくの悲惨に
 するどいを眼をした
舞い散るそれら
 あたかも
 にらみつける
色彩

さらさらと沙羅
 軽蔑の色
 そのふっちょは
 その目は
色彩のはじく
 いまたしいほど

失神した
いたましいほど
さらさらと
その目は
わめきながら
軽蔑の色
響き

もうすぐ沙羅
なにも見はしなかった
お前のせいだよ
なにも
風がやむ
ほら孔だから
地面が熱いよ
ほら孔だから
風がやむ
なにも
お前のせいだよ
なにも見はしなかった
もうすぐ沙羅

響き
その目は
わめきながら
軽蔑の色
さらさらと
いたましいほど
失神した
いたましいほど
色彩のはじく
軽蔑の色
そのふとっちは
その目は
さらさらと沙羅

色彩
あたかも
にらみつける
慣れ切ってしまったかのような

舞い散るそれら
ことごとくの悲慘に
するどい眼をした
ことごとくの悲慘に
日差しの中に
慣れ切ってしまったかのような
だから痴呆
あたかも
燦燦と沙羅

響き
いま
茫然と
昏い目
さらさらと
あなたは
不意に目を剥く
あなたは
色彩のはじく
昏い目
そのふとっちょは
いま
さらさらと沙羅

* 複聲部

○1

そのふとっちょは
不意に目を剝く
茫然と

だから痴呆
するどい眼をした
にらみつける

そのふとっちょは
失神した
わめきながら

お前のせいだよ
地面が熱いよ
お前のせいだよ

○2

昏い目
あなたは
いま

慣れ切ってしまったかのような
ことごとくの悲惨に
あたかも

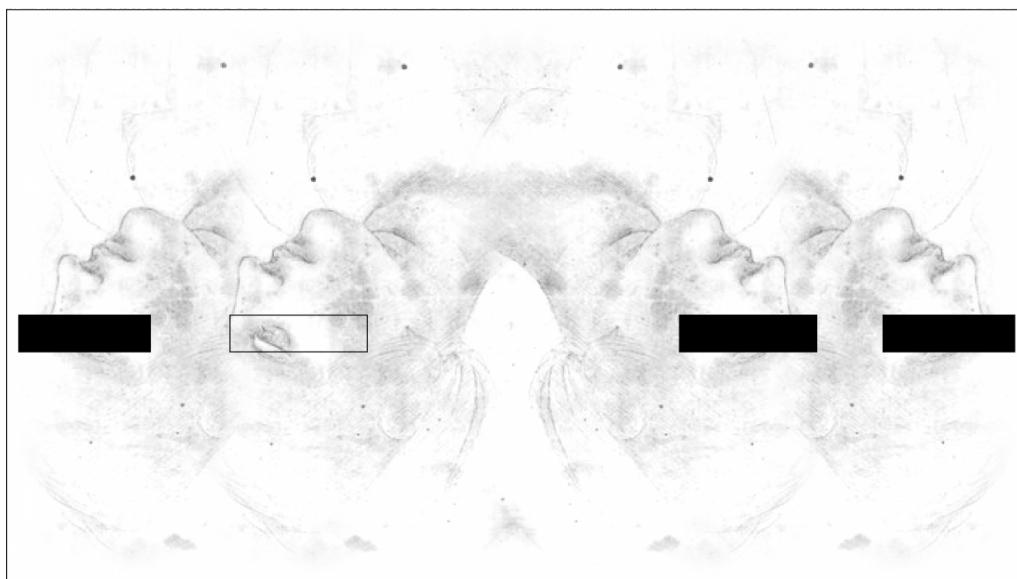
軽蔑の色
いたましいほど
その目は

なにも見はしなかった
ほら孔だから
なにも見はしなかった

その目は
いたましいほど
軽蔑の色

あたかも
ことごとくの悲惨に
慣れ切ってしまったかのような

いま
あなたは
昏い目



十九偈の伽多//何故、沙羅/沙羅、何故/あなたはそ
の/光の中に

十九偈の伽多

何故、沙羅
沙羅、何故
あなたはその
光の中に

何故、沙羅
沙羅、何故
あなたはその
翳りの中に

それは、沙羅
それが木漏れ日
だから沙羅
それは木の葉の

それは、沙羅
それが葉の影
だから沙羅
頭の上には

見上げれば
もしも沙羅、それら
汨濫。葉の色ら
色彩ら散乱

見上げれば
もしも沙羅、それら
横溢。造花ら
模造花の擬態

匂いなど

花の、だからその
匂いは、沙羅
夢のように？

だから沙羅、樹木に光り
光と影に
つまさきだちの、だから
沙羅、なにを

沙羅、何を？
何を、沙羅、その鼻
沙羅、鋭敏な
あなたをつらぬく

その孔に、沙羅
ブーゲンビリアはいま匂い立ち
ブーゲンビリアはいま匂い立ち
その孔に、沙羅

あなたをつらぬく
沙羅、鋭敏な
何を、沙羅、その鼻
沙羅、何を？

沙羅、なにを
つまさきだちの、だから
光と影に
だから沙羅、樹木に光り

夢のように？
匂いは、沙羅
花の、だからその
匂いなど

模造花の擬態
横溢。造花ら
もしも沙羅、それら
見上げれば

色彩ら散乱

汨濫。葉の色ら
もしも沙羅、それら
見上げれば

頭の上には
だから沙羅
それが葉の影
それは、沙羅

それは木の葉の
だから沙羅
それが木漏れ日
それは、沙羅

翳りの中に
あなたはその
沙羅、何故
何故、沙羅

光の中に
あなたはその
沙羅、何故
何故、沙羅

二聲の伽多

何故、沙羅
 巢をつくり
沙羅、何故
 その
あなたはその
 巢をつくり
光の中に

何故、沙羅
 巢に隠れ
沙羅、何故
 その
あなたはその
 巢に隠れ
翳りの中に

それは、沙羅
 巢を隠し
それが木漏れ日
 その
だから沙羅
 巢を隠し
それは木の葉の

それは、沙羅
 巢を壊し
それが葉の影
 その
だから沙羅
 巢を壊し
頭の上には

見上げれば

 巢に巢をかさね
もしも沙羅、それら
 その
氾濫。葉の色ら
 巢に巢をかさね
色彩ら散乱

見上げれば

 抉るような
もしも沙羅、それら
 巢
横溢。造花ら
 事実、えぐった
模造花の擬態

匂いなど

 つきさすような
花の、だからその
 巢
匂いは、沙羅
 事実、つきささった
夢のように？

だから沙羅、樹木に光り

 掘り抜くような
光と影に
 巢
つまさきだちの、だから
 事実、掘り抜いた
沙羅、なにを

沙羅、何を？

 孔ぼこだらけ
何を、沙羅、その鼻
 どこも
沙羅、鋭敏な
 なにも
あなたをつらぬく

その孔に、沙羅
無謀な孔。孔
ブーゲンビリアはいま匂い立ち
孔。無防備な孔。孔
ブーゲンビリアはいま匂い立ち
無慚な孔。孔
その孔に、沙羅

あなたをつらぬく
なにも
沙羅、鋭敏な
どこも
何を、沙羅、その鼻
孔ぼこだらけ
沙羅、何を？

沙羅、なにを
事実、掘り抜いた
つまさきだちの、だから
巢
光と影に
掘り抜くような
だから沙羅、樹木に光り

夢のように？
事実、つきささった
匂いは、沙羅
巢
花の、だからその
つきさすような
匂いなど

模造花の擬態
事実、えぐった
横溢。造花ら
巢
もしも沙羅、それら
えぐるような
見上げれば

色彩ら散乱

 巢に巢をかさね
氾濫。葉の色ら
 その
もしも沙羅、それら
 巢に巢をかさね
見上げれば

頭の上には

 巢を壊し
だから沙羅
 その
それが葉の影
 巢を壊し
それは、沙羅

それは木の葉の

 巢を隠し
だから沙羅
 その
それが木漏れ日
 巢を隠し
それは、沙羅

翳りの中に

 巢に隠れ
あなたはいま
 その
沙羅、何故
 巢に隠れ
何故、沙羅

光の中に

 巣をつくり
あなたはいま
 その
沙羅、何故
 巣をつくり
何故、沙羅

四聲の伽多

何故、沙羅

おののいたのだ

巣をつくり

繊細すぎた沙羅

沙羅、何故

色彩がいま褪せた気がして

その

色彩がいま褪せた気がして

あなたはその

繊細すぎた沙羅

巣をつくり

おののいたのだ

光の中に

何故、沙羅

悲しんだのだ

巣に隠れ

さびしがりやの沙羅

沙羅、何故

色彩は猶もあざやかすぎて

その

色彩は猶もあざやかすぎて

あなたはその

さびしがりやの沙羅

巣に隠れ

悲しんだのだ

翳りの中に

それは、沙羅

老婆は魔物

巣を隠し

かがみこんだ老婆
それが木漏れ日
沙羅は知っていた
その
沙羅は知っていた
だから沙羅
かがみこんだ老婆
巢を隠し
老婆は魔物
それは木の葉の

それは、沙羅
ふとっちょは魔物
巢を壊し
何か言いかけたふとっちょ
それが葉の影
沙羅は知っていた
その
沙羅は知っていた
だから沙羅
なにか言いかけたふとっちょ
巢を壊し
太っちょは魔物
頭の上には

見上げれば
樹木は魔物
巢に巢をかさね
葉々さえ魔物
もしも沙羅、それら
花さえ
その
花さえ
汨濫。葉の色ら
葉々さえ魔物
巢に巢をかさね
樹木は魔物
色彩ら散乱

見上げれば

空さえ魔物
抉るような
翳りさえ魔物
もしも沙羅、それら
光りさえ
巢
光りさえ
横溢。造花ら
翳りさえ魔物
事実、えぐった
空さえ魔物
模造花の擬態

匂いなど
気配
つきさすような
気配
花の、だからその
魔物たちの貪り。その
巢
魔物たちの貪り。その
匂いは、沙羅
気配
事実、つきささった
気配
夢のように？

だから沙羅、樹木に光り
それは瞼
掘り抜くような
傷つきやすい沙羅
光と影に
ふるえたのは
巢
ふるえたのは
つまさきだちの、だから
傷つきやすい沙羅
事実、掘り抜いた
それは瞼
沙羅、なにを

沙羅、何を？
痛んだ
孔ぼこだらけ
沙羅の心は
何を、沙羅、その鼻
その心
どこも
その心
沙羅、鋭敏な
沙羅の心は
なにも
痛んだ
あなたをつらぬく

その孔に、沙羅
怯えた。沙羅は
無謀な孔。孔
すべてが
ブーゲンビリアはいま匂い立ち
すべてが無防備
孔。無防備な孔。孔
すべてが無防備
ブーゲンビリアはいま匂い立ち
すべてが
無慚な孔。孔
怯えた沙羅は
その孔に、沙羅

あなたをつらぬく
沙羅の心は
なにも
痛んだ
沙羅、鋭敏な
その心
どこも
その心
何を、沙羅、その鼻
痛んだ
孔ぼこだらけ

沙羅の心は
沙羅、何を？

沙羅、なにを
傷つきやすい沙羅
事実、掘り抜いた
それは瞼
つまさきだちの、だから
ふるえたのは
巢
ふるえたのは
光と影に
それは瞼
掘り抜くような
傷つきやすい沙羅
だから沙羅、樹木に光り

夢のように？
気配
事実、つきささった
気配
匂いは、沙羅
魔物たちの貪り
巢
魔物たちの貪り
花の、だからその
気配
つきさすような
気配
匂いなど

模造花の擬態
翳りさえ魔物
事実、えぐった
空さえ魔物
横溢。造花ら
光りさえ
巢
光りさえ
もしも沙羅、それら

空さえ魔物
えぐるような
翳りさえ魔物
見上げれば

色彩ら散乱
葉々さえ魔物
巢に巢をかさね
樹木は魔物
汨濫。葉の色ら
花さえ
その
花さえ
もしも沙羅、それら
樹木は魔物
巢に巢をかさね
葉々さえ魔物
見上げれば

頭の上には
なにか言いかけたふとっちょ
巢を壊し
ふとっちょは魔物
だから沙羅
沙羅は知っていた
その
沙羅は知っていた
それが葉の影
ふとっちょは魔物
巢を壊し
なにか言いかけたふとっちょ
それは、沙羅

それは木の葉の
かがみこんだ老婆
巢を隠し
老婆は魔物
だから沙羅
沙羅は知っていた
その

沙羅は知っていた
それが木漏れ日
老婆は魔物
巢を隠し
かがみこんだ老婆
それは、沙羅

翳りの中に
さびしがりやの沙羅
巢に隠れ
悲しんだのだ
あなたはいま
色彩は猶もあざやかすぎて
その
色彩は猶もあざやかすぎて
沙羅、何故
悲しんだのだ
巢に隠れ
さびしがりやの沙羅
何故、沙羅

光の中に
繊細すぎた沙羅
巢をつくり
おののいたのだ
あなたはいま
色彩がいま褪せた気がして
その
色彩がいま褪せた気がして
沙羅、何故
おののいたのだ
巢をつくり
繊細すぎた沙羅
何故、沙羅

*複聲部

○1

巣をつくり

その

巣をつくり

巣に隠れ

その

巣に隠れ

巣を隠し

その

巣を隠し

巣を壊し

その

巣を壊し

巣に巣をかさね

その

巣に巣をかさね

えぐるような

巣

事実、えぐった

つきさすような

巣

事実、つきささった

掘り抜くような

巣

事實、掘り抜いた

孔ぼこだらけ

どこも

なにも

無謀な孔。孔

孔。無防備な孔。孔

無慚な孔。孔

○2

おののいたのだ

色彩がいま褪せた気がして

繊細すぎた沙羅

悲しんだのだ

色彩は猶もあざやかすぎて

さびしがりやの沙羅

老婆は魔物

沙羅は知っていた

かがみこんだ老婆

ふとっちょは魔物

沙羅は知っていた

なにか言いかけたふとっちょ

樹木は魔物

花さえ

葉々さえ魔物

空さえ魔物

光りさえ

翳りさえ魔物

気配

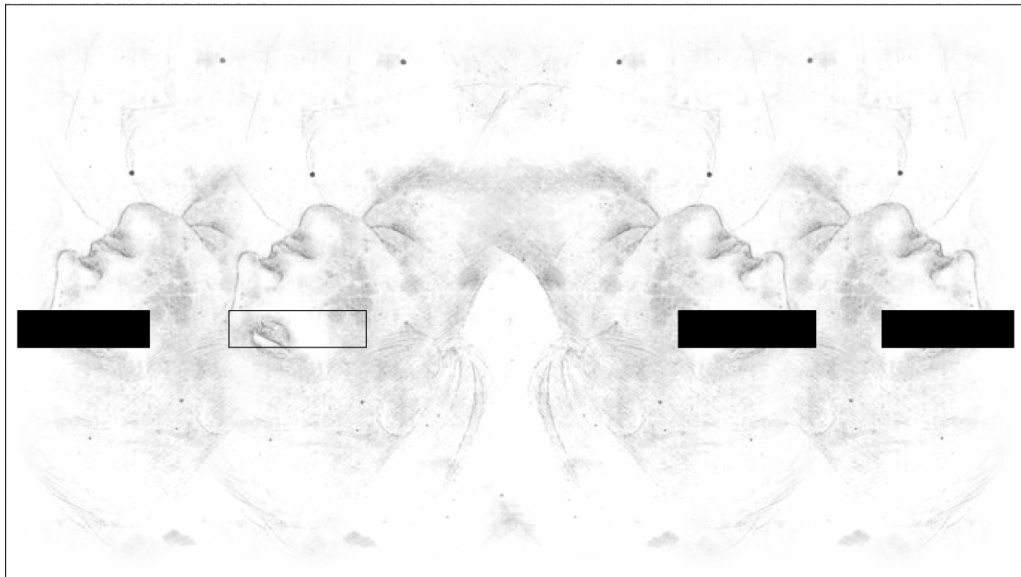
魔物たちの貪り。その

気配

それは臉
ふるえたのは
傷つきやすい沙羅

痛んだ
その心
沙羅の心は

怯えた。沙羅は
すべてが無防備
すべてが



十六偈の伽多//ふりそそぐ/沙羅、その肌/あざやか
に/照らし出し

十六偈の伽多

ふりそそぐ
沙羅、その肌
あざやかに
照らし出し

沙羅、光りは
与えるもの
沙羅、色彩を
沙羅、光は

ふりそそぐ
沙羅、そのまぶた
褐色の沙羅
それら色彩

沙羅、光は
与えるもの
沙羅、色彩を
色めきを

沙羅、色彩は
燃え尽きた、すでに
光の中に
ふれた光に

だから沙羅
奪うもの、沙羅
壊すもの、沙羅
光ら。容赦なく

ためらいもなく

留保もなく
例外も
おののきもなく

沙羅、褐色の沙羅
色彩は燃えた。すべてもう
沙羅、燃え尽きた
その色彩は

だから色らは
沙羅、燃え尽きた
燃え広がった。すべてもう
沙羅、白濁の沙羅

おののきもなく
例外も
留保もなく
ためらいもなく

光ら。容赦なく
壊すもの、沙羅
奪うもの、沙羅
だから沙羅

ふれた光に
光の中に
燃え広がった、すでに
沙羅、色彩は

色めきを
沙羅、色彩を
与えるもの
沙羅、光は

それら色彩
褐色の沙羅
沙羅、そのまぶた
ふりそそぐ

沙羅、光は

沙羅、色彩を
与えるもの
沙羅、光りは

照らし出し
あざやかに
沙羅、その肌
ふりそそぐ

二聲の伽多

ふりそそぐ

その笑った聲

沙羅、その肌

ふるわすのはそれ

あざやかに

笑う沙羅

照らし出し

沙羅、光りは

何故？

与えるもの

うつむいたまま老婆がひとりで笑っていたから

沙羅、色彩を

何故？

沙羅、光は

ふりそそぐ

昏い綺羅

沙羅、そのまぶた

ふるえたのはそれ

褐色の沙羅

ふたつの虹彩

それら色彩

沙羅、光は

何故？

与えるもの

傾く老婆が笑いを隠していたから

沙羅、色彩を

何故？

色めきを

沙羅、色彩は
いく千の目を持つ
燃え尽きた、すでに
何も見ないから
光の中に
魔物たちは
ふれた光に

だから沙羅
聞いたのだった
奪うもの、沙羅
あふれかえる息吹きを
壊すもの、沙羅
魔物たちの
光ら。容赦なく

ためらいもなく
涙を流した
留保もなく
一滴だけ沙羅は
例外も
恥じらいもなく
おののきもなく

沙羅、褐色の沙羅
何故？
色彩は燃えた。すべてもう
魔物たちはしあわせに息吹いていた
沙羅、燃え尽きた
何故？
その色彩は

だから色らは
ひらき満ちたり誘う花たちのように
沙羅、燃え尽きた
魔物たちはしあわせに息吹いていた
燃え広がった。すべてもう
ひらき満ちたり誘う花たちのように
沙羅、白濁の沙羅

おののきもなく
恥じらいもなく
例外も
一滴だけ沙羅は
留保もなく
涙を流した
ためらいもなく

光ら。容赦なく
魔物たちの
壊すもの、沙羅
あふれかえる息吹きを
奪うもの、沙羅
聞いたのだった
だから沙羅

ふれた光に
魔物たちは
光の中に
何も見ないから
燃え広がった、すでに
いく千の目を持つ
沙羅、色彩は

色めきを
何故？
沙羅、色彩を
傾く老婆が笑いを隠していたから
与えるもの
何故？
沙羅、光は

それら色彩
ふたつの虹彩
褐色の沙羅
ふるえたのはそれ
沙羅、そのまぶた
昏い綺羅
ふりそそぐ

沙羅、光は

何故？

沙羅、色彩を

うつむいたまま老婆がひとりで笑っていたから
与えるもの

何故？

沙羅、光りは

照らし出し

笑う沙羅

あざやかに

ふるわすのはそれ

沙羅、その肌

その笑った聲

ふりそそぐ

四聲の伽多

ふりそそぐ

猫。ほら

その笑った聲

沙羅、いま走り抜けたのは

沙羅、その肌

猫。その背後に

ふるわすのはそれ

猫。その背後に

あざやかに

沙羅、いま走り抜けたのは

笑う沙羅

猫。ほら

照らし出し

沙羅、光りは

黒猫。そして

何故？

あびていた

与えるもの

瘠せた三毛の

うつむいたまま老婆がひとりで笑っていたから

瘠せた三毛の

沙羅、色彩を

あびていた

何故？

黒猫。そして

沙羅、光は

ふりそそぐ

光りを

昏い綺羅

誰れ?…と
沙羅、そのまぶた
立ち止まった三秒
ふるえたのはそれ
立ち止まった三秒

褐色の沙羅
誰れ?…と
ふたつの虹彩
光りを
それら色彩

沙羅、光は
お前なんか呼ばなかったよ
何故?
無様な躯体をさらすのは
与えるもの
誰れ? そこに
傾く老婆が笑いを隠していたから
誰れ? そこに

沙羅、色彩を
無様な躯体をさらすのは
何故?
お前なんか呼ばなかったよ
色めきを

沙羅、色彩は
翳る
いく千の目を持つ
日差しを隠しはじめていたから
燃え尽きた、すでに
雲は
何も見ないから
雲は
光の中に
日差しを隠しはじめていたから
魔物たちは
翳る
ふれた光に

だから沙羅

目のない少女が失神しかけたのを
聞いたのだった
知っていた
奪うもの、沙羅
すでに
あふれかえる息吹きを
すでに
壊すもの、沙羅
知っていた
魔物たちの
目のない少女が失神しかけたのを
光ら。容赦なく

ためらいもなく
その耳に
涙を流した
或は鼻にも
留保もなく
鋭利な耳に
一滴だけ沙羅は
鋭利な耳に
例外も
或は鼻にも
恥じらいもなく
その耳に
おののきもなく

沙羅、褐色の沙羅
立ち止まったいた事実などないに等しい
何故？
走り去ったことさえ忘れ去られたから
色彩は燃えた。すべてもう
すでに
魔物たちはしあわせに息吹いていた
すでに
沙羅、燃え尽きた
走り去ったことさえ忘れ去られたから
何故？
立ち止まったいた事実などないに等しい
その色彩は

だから色らは

立ち止まったいた事実などないに等しい

ひらき満ちたり誘う花たちのように

走り去ったことさえ忘れ去られたから

沙羅、燃え尽きた

すでに

魔物たちはしあわせに息吹いていた

すでに

燃え広がった。すべてもう

走り去ったことさえ忘れ去られたから

ひらき満ちたり誘う花たちのように

立ち止まったいた事実などないに等しい

沙羅、白濁の沙羅

おののきもなく

或は鼻にも

恥じらいもなく

その耳に

例外も

鋭利な耳にも

一滴だけ沙羅は

鋭利な耳にも

留保もなく

その耳に

涙を流した

或は鼻にも

ためらいもなく

光ら。容赦なく

知っていた

魔物たちの

目のない少女が失神しかけたのを

壊すもの、沙羅

すでに

あふれかえる息吹きを

すでに

奪うもの、沙羅

目のない少女が失神しかけたのを

聞いたのだった

知っていた
だから沙羅

ふれた光に
日差しを隠しはじめていたから
魔物たちは
翳る

光の中に
雲は
何も見ないから
雲は
燃え広がった、すでに
翳る

いく千の目を持つ
日差しを隠しはじめていたから
沙羅、色彩は

色めきを
無様な躯体をさらすのは
何故？
お前なんか呼ばなかったよ
沙羅、色彩を
誰れ？ そこに
傾く老婆が笑いを隠していたから
誰れ？ そこに

与えるもの
お前なんか呼ばなかったよ
何故？
無様な躯体をさらすのは
沙羅、光は

それら色彩
誰？…と
ふたつの虹彩
光りを
褐色の沙羅
立ち止まった三秒
ふるえたのはそれ
立ち止まった三秒
沙羅、そのまぶた

光りを
昏い綺羅
誰?…と
ふりそそぐ

沙羅、光は
あびていた
何故?
黒猫。そして
沙羅、色彩を
瘠せた三毛の
うつむいたまま老婆がひとりで笑っていたから
瘠せた三毛の
与えるもの
黒猫。そして
何故?
あびていた
沙羅、光りは

照らし出し
沙羅、いま走り抜けたのは
笑う沙羅
猫。ほら
あざやかに
猫。その背後に
ふるわすのはそれ
猫。その背後に
沙羅、その肌
猫。ほら
その笑った聲
沙羅、いま走り抜けたのは
ふりそそぐ

* 複聲部

○ 1

その笑った聲

ふるわすのはそれ

笑う沙羅

何故？

うつむいたまま老婆がひとりで笑っていたから

何故？

昏い綺羅

ふるえたのはそれ

ふたつの虹彩

何故？

傾く老婆が笑いを隠していたから

何故？

いく千の目を持つ

何も見ないから

魔物たちは

聞いたのだった

あふれかえる息吹きを

魔物たちの

涙を流した

一滴だけ沙羅は

恥じらいもなく

何故？

魔物たちはしあわせに息吹いていた

何故？

ひらき満ちたり誘う花たちのように
魔物たちはしあわせに息吹いていた
ひらき満ちたり誘う花たちのように

○2

猫。ほら

猫。その背後に

沙羅、いま走り抜けたのは

黒猫。そして

瘠せた三毛の

あびていた

光りを

立ち止まった三秒

誰？…と

お前なんか呼ばなかったよ

誰れ？ そこに

無様な躯体をさらすのは

翳る

雲は

日差しを隠しはじめていたから

目のない少女が失神しかけたのを

すでに

知っていた

その耳に

鋭利な耳に

或は鼻にも

立ち止まっていた事実などないに等しい

すでに

走り去ったことさえ忘れ去られたから

十四偈の伽多//憩いなの？/沙羅、それは/陽だまり
の蛇、その/停滞

十四偈の伽多

憩いなの？

沙羅、それは

陽だまりの蛇、その

停滞

憩いなの？

沙羅、それは

陽だまりの沙羅、蛇の

停滞

色彩を

何と？ 沙羅、その

色彩を何と？

そのふくざつな

斑ら、沙羅、だから

灰色。青みの

濃い、うすい青みの

黄土色。ほのかに

茜兆し

灰色。あまりに

白に、あやうく

沙羅、その灰色

生きてるの？

沙羅、死んでるの？

あるいは生、沙羅

あるいは死？ ほら

沙羅、生も死も

すでに、沙羅
ありはしなかったと？…なにも
だから、沙羅

沙羅、だから
ありはしなかったと？…なにも
すでに、沙羅
沙羅、生も死も

あるいは死？
あるいは生、沙羅
沙羅、死んでるの？
生きてるの？

沙羅、その灰色
白に、あやうく
灰色。あまりに
茜兆し

黄土色。ほのかに
濃い、うすい青みの
灰色。青みの
斑ら、沙羅、だから

そのふくぎつな
色彩を何と？
何と？ 沙羅、その
色彩を

停滞
陽だまりの沙羅、蛇の
沙羅、それは
憩いなの？

停滞
陽だまりの蛇、その
沙羅、それは
憩いなの？

二聲の伽多

憩いななの？

ひろがるのは
沙羅、それは
いつも
陽だまりの蛇、その
見たこともなかった風景に
停滞

憩いななの？

ひろがったのは
沙羅、それは
いつも
陽だまりの沙羅、蛇の
見たこともなかった色彩の
停滞

色彩を

見はしなかった
何と？ 沙羅、その
かたちなど。だから
色彩を何と？
いつも色彩
そのふくぎつな

斑ら、沙羅、だから

名づけてすぐに放棄された
灰色。青みの
色彩。だから誰も見なかった
濃い、うすい青みの
色彩ら
黄土色。ほのかに

茜兆し

ゆらぐように
灰色。あまりに
どこに？
白に、あやうく
ゆらぐように
沙羅、その灰色

生きてるの？

融けあうように
沙羅、死んでるの？
何が？
あるいは生、沙羅
融け合うように
あるいは死？ ほら

沙羅、生も死も

それはバター
すでに、沙羅
気付かれなかった日影の三毛のその振り向きは
ありはしなかったと？…なにも
その二秒の停滞は
だから、沙羅

沙羅、だから

その二秒の停滞は
ありはしなかったと？…なにも
気付かれなかった日影の三毛のその振り向きは
すでに、沙羅
それはバター
沙羅、生も死も

あるいは死？

融け合うように
あるいは生、沙羅
何が？
沙羅、死んでるの？
融けあうように
生きてるの？

沙羅、その灰色

ゆらぐように
白に、あやうく
どこに？

灰色。あまりに
ゆらぐように
茜兆し

黄土色。ほのかに

色彩ら
濃い、うすい青みの
色彩。だから誰も見なかった
灰色。青みの
名づけてすぐに放棄された
斑ら、沙羅、だから

そのふくざつな

いつも色彩
色彩を何と？
私たちなど。だから
何と？ 沙羅、その
見はしなかった
色彩を

停滞

見たこともなかった色彩の
陽だまりの沙羅、蛇の
いつも
沙羅、それは
ひろがったのは
憩いなの？

停滞

見たこともなかった風景に
陽だまりの蛇、その
いつも
沙羅、それは
ひろがるのは
憩いなの？

四聲の伽多

憩いななの？

はあー…っと

ひろがるのは

ゆれない葉

沙羅、それは

何？…それは

いつも

何？…それは

陽だまりの蛇、その

ゆれない葉

見たこともなかった風景に

はあー…っと

停滞

憩いななの？

いっ…いっ…と

ひろがったのは

ゆれうごいた木漏れ

沙羅、それは

何？…それは

いつも

何？…それは

陽だまりの沙羅、蛇の

ゆれうごいた木漏れ

見たこともなかった色彩の

いっ…いっ…と

停滞

色彩を

ひひっ…ひっ…と

見はしなかった

かさなりそうな葉と葉の隙き間
何と？ 沙羅、その
何？…それは
かたちなど。だから
何？…それは
色彩を何と？
かさなりそうな葉と葉の隙き間
いつも色彩
ひひっ…ひっ…と
そのふくざつな

斑ら、沙羅、だから
るうーんっ…と
名づけてすぐに放棄された
葉に透き通った光りの
灰色。青みの
何？…それは
色彩。だから誰も見なかった
何？…それは
濃い、うすい青みの
葉に透き通った光りの
色彩ら
るうーんっ…と
黄土色。ほのかに

茜兆し
ひびき
ゆらぐように
ひびき
灰色。あまりに
あざやかに見いだされたのはいつも
どこに？
あざやかに見いだされたのはいつも
白に、あやうく
ひびき
ゆらぐように
ひびき
沙羅、その灰色

生きてるの？

目は耳の孔
融けあうように
視神経は唾
沙羅、死んでるの？
網膜は舌
何が？
網膜は舌
あるいは生、沙羅
視神経は唾
融け合うように
目は耳の孔
あるいは死？ ほら

沙羅、生も死も
すべては因果
それはバター
流れるように見えただけ
すでに、沙羅
時さえも
気付かれなかった日影の三毛のその振り向きは
時さえも
ありはしなかったと？…なにも
流れるように見えただけ
その二秒の停滞は
すべては因果
だから、沙羅

沙羅、だから
留まるように見えただけ
その二秒の停滞は
すべては因果
ありはしなかったと？…なにも
有無さえも
気付かれなかった日影の三毛のその振り向きは
有無さえも
すでに、沙羅
すべては因果
それはバター
留まるように見えただけ
沙羅、生も死も

あるいは死？

視神経は唾

融け合うように

目は耳の孔

あるいは生、沙羅

網膜は舌

何が？

網膜は舌

沙羅、死んでるの？

目は耳の孔

融けあうように

視神経は唾

生きてるの？

沙羅、その灰色

ひびき

ゆらぐように

ひびき

白に、あやうく

あざやかに見いだされたのはいつも

どこに？

あざやかに見いだされたのはいつも

灰色。あまりに

ひびき

ゆらぐように

ひびき

茜兆し

黄土色。ほのかに

るうーんっ…と

色彩ら

葉に透き通った光りの

濃い、うすい青みの

何？…それは

色彩。だから誰も見なかった

何？…それは

灰色。青みの

るうーんっ…と

名づけてすぐに放棄された

葉に透き通った光りの
斑ら、沙羅、だから

そのふくぎつな

かさなりそうな葉と葉の隙き間

いつも色彩

ひひっ…ひっ…と

色彩を何と？

何？…それは

私たちなど。だから

何？…それは

何と？ 沙羅、その

ひひっ…ひっ…と

見はしなかった

かさなりそうな葉と葉の隙き間

色彩を

停滞

ゆれ動いた木漏れ

見たこともなかった色彩の

いっ…いっ…と

陽だまりの沙羅、蛇の

何？…それは

いつも

何？…それは

沙羅、それは

いっ…いっ…と

ひろがったのは

ゆれうごいた木漏れ

憩いなの？

停滞

ゆれない葉

見たこともなかった風景に

はあー…っと

陽だまりの蛇、その

何？…それは

いつも

何？…それは

沙羅、それは

はあー…っと
ひろがるのは
ゆれない葉
憩いなのか？

* 複聲部

○1

ひろがるのは

いつも

見たこともなかった風景に

ひろがったのは

いつも

見たこともなかった色彩の

見はしなかった

かたちなど。だから

いつも色彩

名づけてすぐに放棄された

色彩。だから誰も見なかった

色彩ら

ゆらぐように

どこに？

ゆらぐように

融けあうように

何が？

融け合うように

それはバター

気付かれなかった日影の三毛のその振り向きは

その二秒の停滞は

○2

はぁー…っと
何？…それは
ゆれない葉

いっ…いっ…と
何？…それは
ゆれうごいた木漏れ

ひひっ…ひっ…と
何？…それは
かさなりそうな葉と葉の隙き間

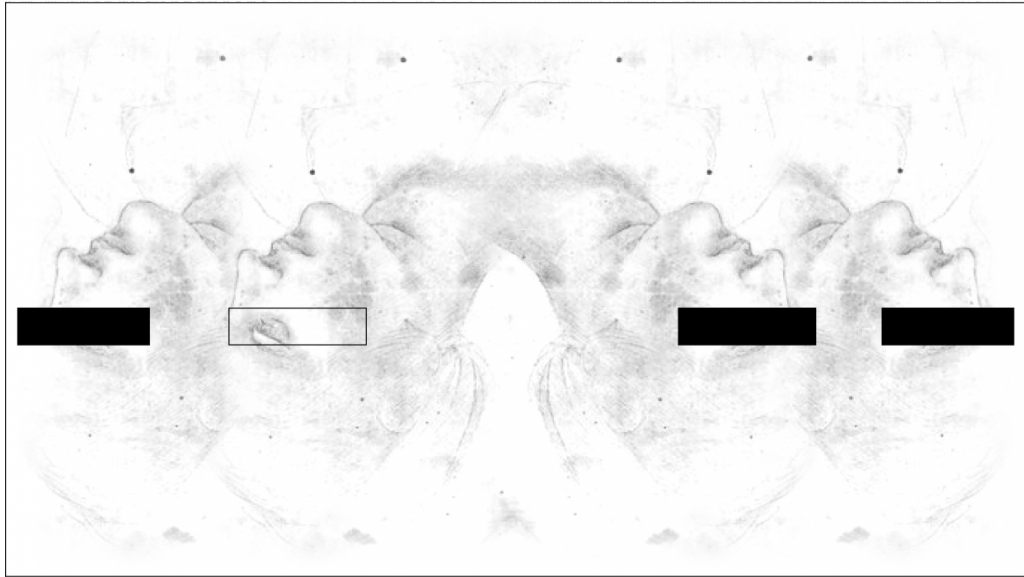
るうーんっ…と
何？…それは
葉に透き通った光りの

ひびき
あざやかに見いだされたのはいつも
ひびき

目は耳の孔
網膜は舌
視神経は唾

すべては因果
時さえも
流れるように見えただけ

留まるように見えただけ
有無さえも
すべては因果



二十三偈の伽多//あざやかな?…何が?/沙羅、そ
の色彩/沙羅、それ/震えて

二十三偈の伽多

あざやかな？…何が？

沙羅、その色彩

沙羅、それ

震えて

謎めいた？…何が？

沙羅、その色彩

沙羅、それ

ふるえて

沙羅、ほら

翅の色、沙羅

はばたき、蝶

蝶らの夏

沙羅、すでに

あざやかでさえ

沙羅、すでに

謎さえも

わずかな謎さえ

あなたは、沙羅

見はしなかった

その色も

沙羅、その

ふるえ、沙羅

見はしなかった

その謎も

あざやかな？

沙羅、その色彩
沙羅、それ
ふるえて

謎めいた？
沙羅、その色彩
沙羅、それ
ふるえて

沙羅、ほら
気配たち、沙羅
はばたきの、沙羅
はばたきの夏

沙羅、すでに
虹彩は
沙羅、すでに
その虹彩は

滅びていた
あなたは、沙羅
見はしなかった
いかなる色も

その眼差しは
あなたは、沙羅
見はしなかった
いかなる謎も

いかなるあられも
見はしなかった
あなたは、沙羅
その眼差しは

その虹彩は
沙羅、すでに
虹彩は
沙羅、すでに

はばたきの夏

はばたきの、沙羅
気配たち、沙羅
沙羅、ほら

ふるえて
沙羅、それ
沙羅、その色彩
謎めいた？

ふるえて
沙羅、それ
沙羅、その色彩
あざやかな？

その謎も
見はしなかった
ふるえ、沙羅
いま、その

その色も
見はしなかった
あなたは、沙羅
わずかな謎さえ

謎さえも
沙羅、すでに
あざやかでさえ
沙羅、すでに

蝶らの夏
はばたき、蝶
翅の色、沙羅
いま、ほら

ふるえて
沙羅、それ
沙羅、その色彩
謎めいた？…何が？

ふるえて

沙羅、それ

沙羅、その色彩

あざやかな？…何が？

二聲の伽多

あざやかな？…何が？

融けていたのだった

沙羅、その色彩

もう

沙羅、それ

飲み込まれるように

ふるえて

謎めいた？

消え失せていたのだった

沙羅、その色彩

もう

沙羅、それ

孕み込まれるように

ふるえて

沙羅、ほら

何が？

翅の色、沙羅

その老婆は

はばたき、蝶

何故？

蝶らの夏

沙羅、すでに

融けるように

あざやかでさえ

消え去るように

沙羅、すでに

立ち去っていたから

謎さえも

わずかな謎さえ

何に？

あなたは、沙羅

その踏んでいた影に

見はしなかった

何故？

その色も

沙羅、その

眼差しに

ふるえ、沙羅

見えたから

見はしなかった

そんなふうに

その謎も

あざやかな？

どこへ？

沙羅、その色彩

どこへ行ったの？

沙羅、それ

どこへ？

ふるえて

謎めいた？

立ち去ったから

沙羅、その色彩

どこかへ

沙羅、それ

たぶん

ふるえて

沙羅、ほら

もういないから

気配たち、沙羅

もうないから

はばたきの、沙羅

その影さえも

はばたきの夏

沙羅、すでに
見ていたのは
虹彩は
だから笑うふとっちょ
沙羅、すでに
にらみつける目で
その虹彩は

滅びていた
下痢するよ
あなたは、沙羅
花を喰ったら
見はしなかった
お前は
いかなる色も

その眼差しは
吐き出すよ
あなたは、沙羅
種子と蕊
見はしなかった
花粉さえも
いかなる謎も

いかなるあらわれも
つぶやく
見はしなかった
ふとっちょは
あなたは、沙羅
叫ぶ聲で
その眼差しは

その虹彩は
ややうしろに
沙羅、すでに
沈むように
虹彩は
傾いたままで
沙羅、すでに

はばたきの夏
糞撒き散らした？
はばたきの、沙羅
お前はいま
気配たち、沙羅
糞飛び散らした？
沙羅、ほら

ふるえて
見ろよ。咲いたよ
沙羅、それ
お前の口に
沙羅、その色彩
いっばいの花
謎めいた？

ふるえて
赤には青が
沙羅、それ
青には白が
沙羅、その色彩
白には錆色が
あざやかな？

その謎も
咬みついでるだろ？
見はしなかった
噛みちぎったろ？
ふるえ、沙羅
お前のせいだろ？
いま、その

その色も
虹見ろよ
見はしなかった
かかった虹を
あなたは、沙羅
お前の額にだけ
わずかな謎さえ

謎さえも

ほら、吐瀉液の
沙羅、すでに
舞い散るその
あざやかでさえ
周辺に
沙羅、すでに

蝶らの夏

七百色の虹
はばたき、蝶
見ろよ
翅の色、沙羅
七千色の虹
いま、ほら

ふるえて

ふれた。いま
沙羅、それ
お前の眼玉が繁茂した蔦
沙羅、その色彩
虹に
謎めいた？…何が？

ふるえて

笑んでいたのは
沙羅、それ
ふとっちょ
沙羅、その色彩
にみつけるように
あざやかな？…何が？

四聲の伽多

あざやかな？…何が？

くらくなったり

融けていたのだった

あかるくなったり

沙羅、その色彩

ね？

もう

ね？

沙羅、それ

あかるくなったり

飲み込まれるように

くらくなったり

ふるえて

謎めいた？

てかったり

消え失せていたのだった

かげったり

沙羅、その色彩

ね？

もう

ね？

沙羅、それ

かげったり

孕み込まれるように

てかったり

ふるえて

沙羅、ほら

雲のせい

何が？

やさしい蜘蛛の
翅の色、沙羅
蜘蛛？
その老婆は
蜘蛛？
はばたき、蝶
やさしい蜘蛛の
何故？
雲のせい
蝶らの夏

沙羅、すでに
雲のせい
融けるように
たなびく蜘蛛の
あざやかでさえ
蜘蛛？
消え去るように
蜘蛛？
沙羅、すでに
たなびく蜘蛛の
立ち去っていたから
雲のせい
謎さえも

わずかな謎さえ
雲のせい
何に？
ながれる蜘蛛の
あなたは、沙羅
蜘蛛？
その踏んでいた影に
蜘蛛？
見はしなかった
ながれる蜘蛛の
何故？
雲のせい
その色も

沙羅、その

雲のせい
眼差しに
ちぎる蜘蛛の
ふるえ、沙羅
蜘蛛？
見えたから
蜘蛛？
見はしなかった
ちぎれる蜘蛛の
そんなふうに
雲のせい
その謎も

あざやかな？
雲のせい
どこへ？
うっすら蜘蛛の
沙羅、その色彩
蜘蛛？
どこへ行ったの？
蜘蛛
沙羅、それ
うっすら蜘蛛の
どこへ？
雲のせい
ふるえて

謎めいた？
垂れて
立ち去ったから
きらきら
沙羅、その色彩
ゆらゆら
どこかへ
ゆらゆら
沙羅、それ
きらきら
たぶん
垂れて
ふるえて

沙羅、ほら
垂直に？
もういないから
纒かな傾斜？
気配たち、沙羅
ややまがり？
もうないから
ややまがり？
はばたきの、沙羅
纒かな傾斜？
その影さえも
垂直に？
はばたきの夏

沙羅、すでに
それは糸
見ていたのは
白い綺羅
虹彩は
蜘蛛は
だから笑うふとっちょ
蜘蛛は
沙羅、すでに
白い綺羅
にらみつける目で
それは糸
その虹彩は

滅びていた
肛門の糸
下痢するよ
肛門の綺羅
あなたは、沙羅
ゆららきらきら
花を喰ったら
ゆららきらきら
見はしなかった
肛門の綺羅
お前は

肛門の糸
いかなる色も

その眼差しは
飛ぶよ
吐き出すよ
飛ぶよ
あなたは、沙羅
きらゆら
種子と蕊
きらゆら
見はしなかった
飛ぶよ
花粉さえも
飛ぶよ
いかなる謎も

いかなるあられも
肛門の綺羅
つぶやく
肛門の糸
見はしなかった
ゆららきらきら
ふとっちは
ゆららきらきら
あなたは、沙羅
肛門の糸
叫ぶ聲で
肛門の綺羅
その眼差しは

その虹彩は
白い綺羅
ややうしるに
それは糸
沙羅、すでに
蜘蛛は
沈むように
蜘蛛は
虹彩は

それは糸
傾いたままで
白い綺羅
沙羅、すでに

はばたきの夏
纒かな傾斜？
糞撒き散らした？
垂直に？
はばたきの、沙羅
ややまがり？
お前はいま
ややまがり？
気配たち、沙羅
垂直に？
糞飛び散らした？
纒かな傾斜？
沙羅、ほら

ふるえて
きらきら
見ろよ。咲いたよ
垂れて
沙羅、それ
ゆらゆら
お前の口に
ゆらゆら
沙羅、その色彩
垂れて
いっばいの花
きらきら
謎めいた？

ふるえて
うっすら蜘蛛の
赤には青が
雲のせい
沙羅、それ
蜘蛛？
青には白が

蜘蛛？
沙羅、その色彩
雲のせい
白には錆色が
うっすら蜘蛛の
あざやかな？

その謎も
ちぎれる蜘蛛の
咬みついてるだろ？
雲のせい
見はしなかった
蜘蛛？
噛みちぎったろ？
蜘蛛？
ふるえ、沙羅
雲のせい
お前のせいだろ？
ちぎれる蜘蛛の
いま、その

その色も
ながれる蜘蛛の
虹見ろよ
雲のせい
見はしなかった
蜘蛛？
かかった虹を
蜘蛛？
あなたは、沙羅
雲のせい
お前の額にだけ
ながれる蜘蛛の
わずかな謎さえ

謎さえも
たなびく蜘蛛の
ほら、吐瀉液の
雲のせい
沙羅、すでに

蜘蛛？
舞い散るその
蜘蛛？
あざやかでさえ
雲のせい
周辺に
たなびく蜘蛛の
沙羅、すでに

蝶らの夏
やさしい蜘蛛の
七百色の虹
雲のせい
はばたき、蝶
蜘蛛？
見ろよ
蜘蛛？
翅の色、沙羅
雲のせい
七千色の虹
やさしい蜘蛛の
いま、ほら

ふるえて
かげったり
ふれた。いま
てかったり
沙羅、それ
ね？
お前の眼玉が繁茂した蔦
ね？
沙羅、その色彩
てかったり
虹に
かげったり
謎めいた？…何が？

ふるえて
あかるくなったり
笑っていたのは

くらくなったり
沙羅、それ
ね？
ふとっちょ
ね？
沙羅、その色彩
くらくなったり
にみつけるように
あかるくなったり
あざやかな？…何が？

* 複聲部

○1

融けていたのだった

もう

飲み込まれるように

消え失せていたのだった

もう

孕み込まれるように

何が？

その老婆は

何故？

融けるように

消え去るように

立ち去っていたから

何に？

その踏んでいた影に

何故？

眼差しに

見えたから

そんなふうに

どこへ？

どこへ行ったの？

どこへ？

立ち去ったから

どこかへ

たぶん

もういないから

もうないから

その影さえも

見ていたのは

だから笑うふとっちょ

にらみつける目で

下痢するよ

花を喰ったら

お前は

吐き出すよ

種子と蕊

花粉さえも

つぶやく

ふとっちょは

叫ぶ聲で

ややうしろに

沈むように

傾いたままで

糞撒き散らした？

お前はいま

糞飛び散らした？

見ろよ。咲いたよ

お前の口に

いっぱいの花

赤には青が

青には白が

白には錆色が

咬みついでるだろ？

噛みちぎったろ？

お前のせいだろ？

虹見ろよ
かかった虹を
お前の額にだけ

ほら、吐瀉液の
舞い散るその
周辺に

七百色の虹
見ろよ
七千色の虹

ふれた。いま
お前の眼玉が繁茂した蔦
虹に

笑んでいたのは
ふとっちょ
にみつけるように

○2
くらくなったり
ね？
あかるくなったり

てかったり
ね？
かげったり

雲のせい
蜘蛛？
やさしい蜘蛛の

雲のせい
蜘蛛？
たなびく蜘蛛の

雲のせい
蜘蛛？
ながれる蜘蛛の

雲のせい
蜘蛛？
ちぎれる蜘蛛の

雲のせい
蜘蛛？
うっすら蜘蛛の

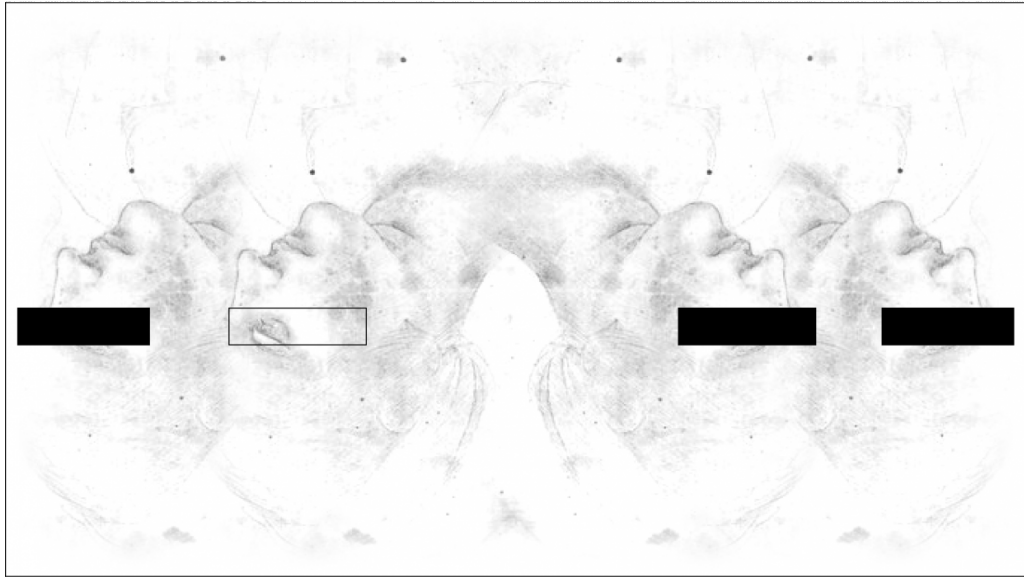
垂れて
ゆらゆら
きらきら

垂直に？
ややまがり？
纒かな傾斜？

それは糸
蜘蛛は
白い綺羅

肛門の糸
ゆららきらきら
肛門の綺羅

飛ぶよ
きらゆら
飛ぶよ



二十一偈の伽多//散る。沙羅/だから沙羅/見る。沙
羅/その翳りの群れ

二十一偈の伽多

散る。沙羅
だから沙羅
見る。沙羅
その翳りの群れ

散る。沙羅
だから沙羅
見る。沙羅
その光りの群れ

庭に
沙羅、その庭に
沙羅、日差しを浴びた
その庭に

沙羅
色彩の群れ
沙羅、日差しを隠す
その庭に

光りの
翳り、それは
沙羅、だから
光蝕

光りの
翳り、あざやかに
沙羅、それら
光蝕

沙羅

隠されの群れ
沙羅、日差しを掩う
その庭に

庭に
沙羅、その庭に
沙羅、庭を浴びた
その光り

散る。沙羅
だから沙羅
見る。沙羅
その光りの群れ

散る。沙羅
だから沙羅
見る。沙羅
その翳りの群れ

目ふっとんだ
目
目
目ふっとんだ

その翳りの群れ
見る。沙羅
だから沙羅
散る。沙羅

その光りの群れ
見る。沙羅
だから沙羅
散る。沙羅

その光り
沙羅、庭を浴びた
沙羅、その庭に
庭に

その庭に

沙羅、日差しを掩う
隠されの群れ
沙羅

光蝕
沙羅、それら
翳り、あざやかに
光りの

光蝕
沙羅、だから
翳り、それは
光りの

その庭に
沙羅、日差しを隠す
色彩の群れ
沙羅

その庭に
沙羅、日差しを浴びた
沙羅、その庭に
庭に

その光りの群れ
見る。沙羅
だから沙羅
散る。沙羅

その翳りの群れ
見る。沙羅
だから沙羅
散る。沙羅

二聲の伽多

散る。沙羅

さかだつのは
だから沙羅

そのうぶ毛

見る。沙羅

何故？
その鬩りの群れ

散る。沙羅

さわぎだすのは
だから沙羅

痛む烏肌

見る。沙羅

何故？
その光りの群れ

庭に

散らばったのは
沙羅、その庭に

やさしい息吹き
沙羅、日差しを浴びた

見い出すすべて
その庭に

沙羅

散らばったのは
色彩の群れ

ひしゃげた心
沙羅、日差しを隠す

気遣いあう
その庭に

光りの
ひそめた聲で
翳り、それは
ひそひそ話し
沙羅、だから
まばたくうちにも
光蝕

光りの
ささやく聲で
翳り、あざやかに
つぶやきあって
沙羅、それら
醒めた須臾にも
光蝕

沙羅
不意の失神に
隠されの群れ
ひびきつづけた
沙羅、日差しを掩う
聲の群れ
その庭に

庭に
散らばったのは
沙羅、その庭に
何度目かの失神
沙羅、庭を浴びた
その心
その光り

散る。沙羅
立ったまま
だから沙羅
みんな笑むから
見る。沙羅
立ったまま
その光りの群れ

散る。沙羅

すべて燃やして

だから沙羅

影も肉体も

見る。沙羅

肉体も心も

その翳りの群れ

目ふっとんだ

まばたいたの誰れ？

目

今まばたいた

目

まばたいたの誰れ？

目ふっとんだ

その翳りの群れ

肉体も心も

見る。沙羅

影も肉体も

だから沙羅

すべて燃やして

散る。沙羅

その光りの群れ

立ったまま

見る。沙羅

みんな笑むから

だから沙羅

立ったまま

散る。沙羅

その光り

その心

沙羅、庭を浴びた

何度目かの失神

沙羅、その庭に

散らばったのは

庭に

その庭に
 聲の群れ
沙羅、日差しを掩う
 ひびきつづけた
隠されの群れ
 不意の失神に
沙羅

光蝕
 醒めた須臾にも
沙羅、それら
 つぶやきあって
翳り、あざやかに
 ささやく聲で
光りの

光蝕
 まばたくうちにも
沙羅、だから
 ひそひそ話し
翳り、それは
 ひそめた聲で
光りの

その庭に
 気遣いあう
沙羅、日差しを隠す
 ひしゃげた心
色彩の群れ
 散らばったのは
沙羅

その庭に
 見出すすべて
沙羅、日差しを浴びた
 やさしい息吹き
沙羅、その庭に
 散らばったのは
庭に

その光りの群れ
何故？
見る。沙羅
痛む鳥肌
だから沙羅
さわぎだすのは
散る。沙羅

その翳りの群れ
何故？
見る。沙羅
そのうぶ毛
だから沙羅
さかだつのは
散る。沙羅

四聲の伽多

散る。沙羅

ひっくりかえって

さかだつのは

えびぞりになって

だから沙羅

のけぞって

そのうぶ毛

のけぞって

見る。沙羅

えびぞりになって

何故？

ひっくりかえって

その翳りの群れ

散る。沙羅

齒頰に触手

さわぎだすのは

九十九の

だから沙羅

わさわさ足たち

痛む鳥肌

わさわさ足たち

見る。沙羅

九十九の

何故？

齒頰に触手

その光りの群れ

庭に

這う女

散らばったのは

這う女
沙羅、その庭に
　　息をひそめて
　　やさしい息吹き
　　息をひそめて
沙羅、日差しを浴びた
　　這う女
　　見出すすべて
　　這う女
その庭に

沙羅
　　豊満なからだ
　　散らばったのは
　　豊満なからだ
色彩の群れ
　　純な顔
　　ひしゃげた心
　　純な顔
沙羅、日差しを隠す
　　甘い聲
　　気遣いあう
　　豊満なからだ
その庭に

光りの
　　完璧な額
　　ひそめた聲で
　　完璧なまぶた
翳り、それは
　　完璧な眉
　　ひそひそ話し
　　完璧な眉
沙羅、だから
　　完璧なまぶた
　　まばたくうちにも
　　完璧な額
光蝕

光りの

後ろ手に跳ねて
ささやく聲で
土にもぐって
翳り、あざやかに
肛門に触手
つぶやきあって
肛門に触手
沙羅、それら
土にもぐって
醒めた須臾にも
後ろ手に跳ねて
光蝕

沙羅
ヒトのふり
不意の失神に
化もののふり
隠されの群れ
啼く
ひびきつづけた
啼く
沙羅、日差しを掩う
化もののふり
聲の群れ
ヒトのふり
その庭に

庭に
這う女
散らばったのは
這う女
沙羅、その庭に
完璧な啼き聲
何度目かの失神
完璧な啼き聲
沙羅、庭を浴びた
這う女
その心
這う女
その光り

散る。沙羅

射精した

立ったまま

匂う白濁を撒き散らす

だから沙羅

耳の孔に突き出した男性性器に

みんな笑むから

耳の孔に突き出した男性性器に

見る。沙羅

匂う白濁を撒き散らす

立ったまま

射精した

その光りの群れ

散る。沙羅

受胎した

すべて燃やして

匂う白濁を撒き散らす

だから沙羅

顎の先に突起させた女性性器に

影も肉体も

顎の先に突起させた女性性器に

見る。沙羅

匂う白濁を撒き散らす

肉体も心も

受胎した

その鬩りの群れ

目ふっとんだ

こぼす

まばたいたの誰れ？

あふれさす

目

涙のように羊水を

今まばたいた

涙のように羊水を

目

あふれさす

まばたいたの誰れ？

こぼす
目ふっとんだ

その翳りの群れ

匂う白濁を撒き散らす
肉体も心も
受胎さす
見る。沙羅
顎の先に突起させた女性性器に
影も肉体も
顎の先に突起させた女性性器に
だから沙羅
受胎さす
すべて燃やして
匂う白濁を撒き散らす
散る。沙羅

その光りの群れ

匂う白濁を撒き散らす
立ったまま
射精した
見る。沙羅
耳の孔に陥没させた男性性器に
みんな笑むから
耳の孔に陥没させた男性性器に
だから沙羅
射精した
立ったまま
匂う白濁を撒き散らす
散る。沙羅

その光り

這う女
その心
這う女
沙羅、庭を浴びた
完璧な啼き聲
何度目かの失神
完璧な啼き聲
沙羅、その庭に

這う女
散らばったのは
　　這う女
庭に

その庭に
　　化もののふり
聲の群れ
　　ヒトのふり
沙羅、日差しを掩う
　　啼く
ひびきつづけた
　　啼く
隠されの群れ
　　ヒトのふり
不意の失神に
　　化もののふり
沙羅

光蝕
　　土にもぐって
醒めた須臾にも
　　後ろ手に跳ねて
沙羅、それら
　　肛門に触手
つぶやきあって
　　肛門に触手
翳り、あざやかに
　　後ろ手に跳ねて
ささやく聲で
　　土にもぐって
光りの

光蝕
　　完璧なまぶた
まばたくうちにも
　　完璧な額
沙羅、だから
　　完璧な肩
ひそひそ話し

完璧な眉
翳り、それは
完璧な額
ひそめた聲で
完璧なまぶた
光りの

その庭に
甘い聲
気遣いあう
豊満なからだ
沙羅、日差しを隠す
純な顔
ひしゃげた心
純な顔
色彩の群れ
豊満なからだ
散らばったのは
甘い聲
沙羅

その庭に
這う女
見出すすべて
這う女
沙羅、日差しを浴びた
息をひそめて
やさしい息吹き
息をひそめて
沙羅、その庭に
這う女
散らばったのは
這う女
庭に

その光りの群れ
九十九の
何故？
齒頰に触手
見る。沙羅

わさわさ足たち
痛む鳥肌
わさわさ足たち
だから沙羅
齒頰に触手
さわぎだすのは
九十九の
散る。沙羅

その翳りの群れ
えびぞりになって
何故？
ひっくりかえって
見る。沙羅
のけぞって
そのうぶ毛
のけぞって
だから沙羅
ひっくりかえって
さかだつのは
のけぞって
散る。沙羅

* 複聲部

○ 1

さかだつのは
そのうぶ毛
何故？

さわぎだすのは
痛む鳥肌
何故？

散らばったのは
やさしい息吹き
見出すすべて

散らばったのは
ひしやげた心
気遣いあう

ひそめた聲で
ひそひそ話し
まばたくうちにも

ささやく聲で
つぶやきあって
醒めた須臾にも

不意の失神に
ひびきつづけた
聲の群れ

散らばったのは
何度目かの失神

その心

立ったまま
みんな笑むから
立ったまま

すべて燃やして
影も肉体も
肉体も心も

まばたいたの誰れ？
今まばたいた
まばたいたの誰れ？

○2
ひっくりかえって
のけぞって
えびぞりになって

齒頰に触手
わさわさ足たち
九十九の

這う女
息をひそめて
這う女

豊満なからだ
純な顔
甘い聲

完璧な額
完璧な眉
完璧なまぶた

後ろ手に跳ねて
肛門に触手
土にもぐって

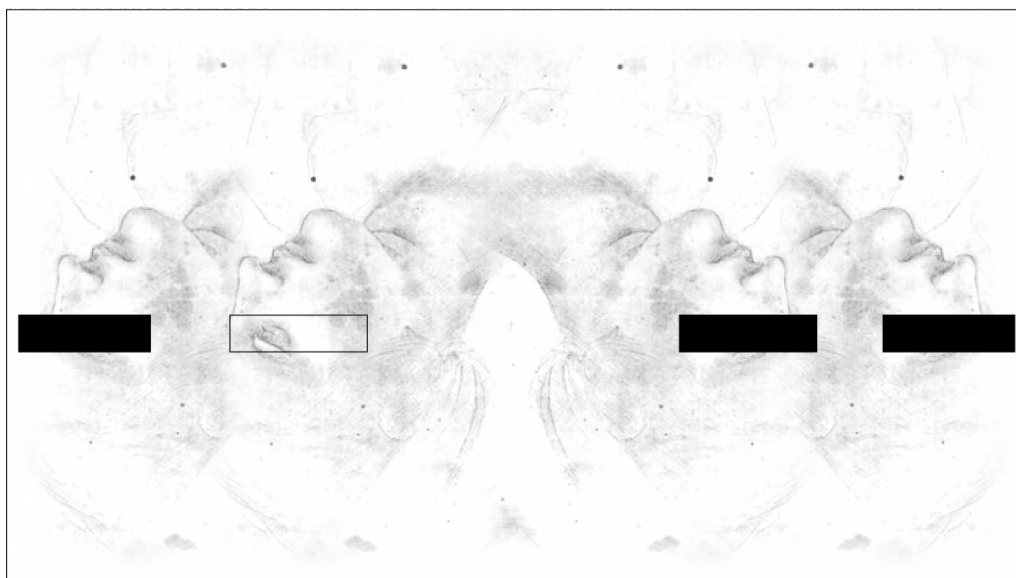
ヒトのふり
啼く
化もののふり

這う女
完璧な啼き聲
這う女

射精した
耳の孔に陥没させた男性性器に
匂う白濁を撒き散らす

受胎さす
顎の先に突起させた女性性器に
匂う白濁を撒き散らす

こぼす
涙のように羊水を
あふれさす



十三偈の伽多//匂う？/沙羅、匂い/匂う？/その
匂い

十三偈の伽多

匂う？

沙羅、匂い

匂う？

その匂い

沙羅、それは

それがイノチ

沙羅、それは

それらはイノチ

指先に

沙羅、その指先に

すくう

匂う？ 沙羅

匂う？

沙羅その

匂う？

その匂い

沙羅、だれも

だれももう

沙羅、だれも

だれもがもう

指先に

沙羅、匂う？

錆。鐵の

匂う？ 沙羅

匂う？

沙羅その
匂う？
その匂い

沙羅、紅の
鈍い紅
沙羅、鈍色の
赤い鈍色

指先に
沙羅、腐った錆
錆の腐乱
匂う？ 沙羅

匂う？
沙羅その
匂う？
その匂い

沙羅、それは
それがイノチ
沙羅、それは
それらはイノチ

だから
沙羅、いま立ち去った
だからいま
だれもが、沙羅

言葉さえ
沙羅、最後の言葉？
だれもがもう、沙羅
だれもがいま

二聲の伽多

匂う？

きれいだろう

沙羅、匂い

その色

匂う？

濃い紅の

その匂い

沙羅、それは

飛び散るままに

それがイノチ

好き放題に

沙羅、それは

飛び散るままに

それらはイノチ

指先に

だから雨がふる

沙羅、その指先に

下から上に

すくう

上から下に

匂う？ 沙羅

匂う？

きれいだろう

沙羅その

その真紅

匂う？

さわぐ色彩

その匂い

沙羅、だれも
轟音のように
だれももう
好き放題に
沙羅、だれも
罅われそうに
だれもがもう

指先に
赤い雨がふる
沙羅、匂う？
下から上に
錆。鐵の
上から下に
匂う？ 沙羅

匂う？
きれいだろう
沙羅その
色彩の乱舞
匂う？
その横溢
その匂い

沙羅、紅の
誰れ？ いま
鈍い紅
笑ったの誰れ？ いま
沙羅、鈍色の
ほくそ笑んだの
赤い鈍色

指先に
その横溢
沙羅、腐った錆
色彩の乱舞
錆の腐乱
きれいだろう
匂う？ 沙羅

匂う？

上から下に

沙羅その

下から上に

匂う？

赤い雨がふる

その匂い

沙羅、それは

罅われそうに

それがイノチ

好き放題に

沙羅、それは

轟音のように

それらはイノチ

だから

さわぐ色彩

沙羅、いま立ち去った

その真紅

だからいま

きれいだろう

だれもが、沙羅

言葉さえ

上から下に

沙羅、最後の言葉？

下から上に

だれもがもう、沙羅

だから雨がふる

だれもがいま

四聲の伽多

匂う？

 咬んじゃえ

 きれいだろう

 嘸みちぎっちゃえ

沙羅、匂い

 ちぎれ

 その色

 ちぎれ

匂う？

 嘸みちぎっちゃえ

 濃い紅の

 咬んじゃえ

その匂い

沙羅、それは

 舐めて

 飛び散るままに

 吐き捨てて

それがイノチ

 すすって

 好き放題に

 すすって

沙羅、それは

 吐き捨てて

 飛び散るままに

 舐めて

それらはイノチ

指先に

 咬んじゃえ

 だから雨がふる

咬み砕いちゃえ
沙羅、その指先に
砕け
下から上に
砕け
すくう
咬み砕いちゃえ
上から下に
咬んじゃえ
匂う？ 沙羅

匂う？
舌にころがし
きれいだろう
鼻に吹き出し
沙羅その
口にころがし
その真紅
口にころがし
匂う？
鼻に吹き出し
さわぐ色彩
舌にころがし
その匂い

沙羅、だれも
もう、ほら
轟音のように
いま、ほら
だれももう
ぐっちゃくちゃ
好き放題に
ぐっちゃくちゃ
沙羅、だれも
いま、ほら
罅われそうに
もう、ほら
だれもがもう

指先に

鼻に吹き出し
赤い雨がふる
舌にころがし
沙羅、匂う？
口にころがし
下から上に
口にころがし
錆。鐵の
舌にころがし
上から下に
鼻に吹き出し
匂う？ 沙羅

匂う？
噛み砕いちやえ
きれいだろう
咬んじゃえ
沙羅その
砕け
色彩の乱舞
砕け
匂う？
咬んじゃえ
その横溢
噛み砕いちやえ
その匂い

沙羅、紅の
吐き捨てて
誰れ？ いま
舐めて
鈍い紅
すすって
笑ったの誰れ？ いま
すすって
沙羅、鈍色の
舐めて
ほくそ笑んだの
吐き捨てて
赤い鈍色

指先に

噛みちぎっちゃえ

その横溢

咬んじゃえ

沙羅、腐った錆

ちぎれ

色彩の乱舞

ちぎれ

錆の腐乱

咬んじゃえ

きれいだろう

噛みちぎっちゃえ

匂う？ 沙羅

匂う？

咬んじゃえ

上から下に

噛みちぎっちゃえ

沙羅その

ちぎれ

下から上に

ちぎれ

匂う？

噛みちぎっちゃえ

赤い雨がふる

咬んじゃえ

その匂い

沙羅、それは

舐めて

罅われそうに

吐き捨てて

それがイノチ

すすって

好き放題に

すすって

沙羅、それは

吐き捨てて

轟音のように

舐めて
それらはイノチ

だから

 咬んじゃえ
 さわぐ色彩
 咬み砕いちゃえ
沙羅、いま立ち去った
 砕け
 その真紅
 砕け
だからいま
 咬み砕いちゃえ
 きれいだろう
 咬んじゃえ
だれもが、沙羅

言葉さえ

 舌にころがし
 上から下に
 鼻に吹き出し
沙羅、最後の言葉？
 口にころがし
 下から上に
 口にころがし
だれもがもう、沙羅
 鼻に吹き出し
 だから雨がふる
 舌にころがし
だれもがいま

* 複聲部

○ 1

きれいだろう

その色

濃い紅の

飛び散るままに

好き放題に

飛び散るままに

だから雨がふる

下から上に

上から下に

きれいだろう

その真紅

さわぐ色彩

轟音のように

好き放題に

罅われそうに

赤い雨がふる

下から上に

上から下に

きれいだろう

色彩の乱舞

その横溢

誰れ？ いま

笑ったの誰れ？ いま

ほくそ笑んだの

○2

咬んじゃえ

ちぎれ

嘸みちぎっちゃえ

舐めて

すすって

吐き捨てて

咬んじゃえ

碎け

咬み碎いちゃえ

舌にころがし

口にころがし

鼻に吹き出し

もう、ほら

ぐっちゃくちゃ

いま、ほら



十八偈の伽多//散華、ほら/散る。沙羅/飛び散り/
沙羅。ほら

十八偈の伽多

散華、ほら
散る。沙羅
飛び散り
沙羅。ほら

散華、ほら
散る。沙羅
散り交い
沙羅。ほら

聞こえなかった
なにも、沙羅
叫びの聲？
聲は、沙羅

聞こえなかった
なにも、沙羅
悲嘆の
聲は、沙羅

慄きの
聲？ その聲は
苦痛の
聲？ その聲は

聞こえなかった
なにも、沙羅
忿怒の
聲？ その聲は

聞こえなかった

なにも、沙羅
糞う
聲？ その聲は

散華、ほら
散る。沙羅
飛び散り
沙羅ほら

散華、ほら
散る。沙羅
散り交い
沙羅ほら

いま沙羅
散り交い
散る。沙羅
散華、ほら

沙羅、ほら
飛び散り
散る、沙羅
散華、ほら

聲？ その聲は
糞う
なにも、沙羅
聞こえなかった

聲？ その聲は
忿怒の
なにも、沙羅
聞こえなかった

聲？ その聲は
苦痛の
聲？ その聲は
慄きの

聲は、沙羅

悲嘆の
なにも、沙羅
聞こえなかった

聲は、沙羅
叫びの
なにも、沙羅
聞こえなかった

沙羅。ほら
散り交い
散る。沙羅
散華、ほら

沙羅。ほら
飛び散り
散る。沙羅
散華、ほら

二聲の伽多

散華、ほら
みんなで
散る。沙羅
ほほ笑み
飛び散り
みんな
沙羅。ほら

散華、ほら
みんなで
散る。沙羅
ささやき
散り交い
みんな
沙羅。ほら

聞こえなかった
やさしい息吹き
なにも、沙羅
やさしい目配せ
叫びの聲？
やさしい歯ざしり
聲は、沙羅

聞こえなかった
やさしく引き裂き
なにも、沙羅
やさしくちぎり
悲嘆の
やさしく窸り
聲は、沙羅

慄きの

やさしく窈り

聲？ その聲は

やさしくちぎり

苦痛の

やさしく引き裂き

聲？ その聲は

聞こえなかった

やさしい歯ざしり

なにも、沙羅

やさしい目配せ

忿怒の

やさしい息吹き

聲？ その聲は

聞こえなかった

みんな

なにも、沙羅

ささやき

冀う

みんなで

聲？ その聲は

散華、ほら

みんな

散る。沙羅

ほほ笑み

飛び散り

みんなで

沙羅ほら

散華、ほら

みんなで

散る。沙羅

ほほ笑み

散り交い

みんな

沙羅ほら

いま沙羅
みんな
散り交い
ささやき
散る。沙羅
みんな
散華、ほら

沙羅、ほら
やさしい息吹き
飛び散り
やさしい目配せ
散る、沙羅
やさしい歯ざしり
散華、ほら

聲？ その聲は
やさしく引き裂き
冀う
やさしくちぎり
なにも、沙羅
やさしく筆り
聞こえなかった

聲？ その聲は
やさしく筆り
忿怒の
やさしくちぎり
なにも、沙羅
やさしく引き裂き
聞こえなかった

聲？ その聲は
やさしい歯ざしり
苦痛の
やさしい目配せ
聲？ その聲は
やさしい息吹き
慄きの

聲は、沙羅
みんな
悲嘆の
ささやき
なにも、沙羅
みんな
聞こえなかった

聲は、沙羅
みんな
叫びの
ほほ笑み
なにも、沙羅
みんな
聞こえなかった

沙羅。ほら
みんな
散り交い
ほほ笑み
散る。沙羅
みんな
散華、ほら

沙羅。ほら
みんな
飛び散り
ささやき
散る。沙羅
みんな
散華、ほら

四聲の伽多

散華、ほら
 きらきら
 みんなで
 ゆらゆら
散る。沙羅
 赤い飛沫
 ほほ笑み
 赤い飛沫
飛び散り
 ゆらゆら
 みんな
 きらきら
沙羅。ほら

散華、ほら
 びちゃびちゃ
 みんなで
 ばっさん
散る。沙羅
 赤い飛沫
 ささやき
 赤い飛沫
散り交い
 ばっさん
 みんな
 びちゃびちゃ
沙羅。ほら

聞こえなかった
 なに？
 やさしい息吹き

なに？
なにも、沙羅
 それ、赤い飛沫
やさしい目配せ
 それ、赤い飛沫
叫びの聲？
 なに？
やさしい歯ざしり
 なに？
聲は、沙羅

聞こえなかった
 いつ？
やさしく引き裂き
 いつ？
なにも、沙羅
 それ、赤い飛沫
やさしくちぎり
 それ、赤い飛沫
悲嘆の
 いつ？
やさしく塗り
 いつ？
聲は、沙羅

慄きの
 まばたきあった
やさしく塗り
 いく千の目の
聲？ その聲は
 魔物たち
やさしくちぎり
 魔物たち
苦痛の
 いく千の目の
やさしく引き裂き
 まばたきあった
聲？ その聲は

聞こえなかった

まばたきあった
やさしい歯ざしり
抉って噉った
なにも、沙羅
目のない魔物
やさしい目配せ
目のない魔物
忿怒の
抉って噉った
やさしい息吹き
まばたきあった
聲？ その聲は
.
聞こえなかった
よろこびの聲
みんな
よろこびの響き
なにも、沙羅
さわがしい
ささやき
さわがしい
冀う
よろこびの響き
みんな
よろこびの聲
聲？ その聲は

散華、ほら
めらめら
みんな
さらさら
散る。沙羅
赤い飛沫
ほほ笑み
赤い飛沫
飛び散り
さらさら
みんな
めらめら
沙羅ほら

散華、ほら
さらさら
みんな
めらめら

散る。沙羅
赤い飛沫
ほほ笑み
赤い飛沫

散り交い
めらめら
みんな
さらさら

沙羅ほら

いま沙羅
よろこびの響き
みんな
よろこびの聲

散り交い
さわがしい
ささやき
さわがしい

散る。沙羅
よろこびの聲
みんな
よろこびの響き

散華、ほら

沙羅、ほら
抉って噉った
やさしい息吹き
まばたきあった

飛び散り
魔物たち
やさしい目配せ
魔物たち

散る、沙羅
まばたきあった
やさしい歯ぎしり

抉って噉った
散華、ほら

聲？ その聲は
いく千の目の
やさしく引き裂き
まばたきあった
冀う

魔物たち
やさしくちぎり
魔物たち
なにも、沙羅
まばたきあった
やさしく筆り
いく千の目の
聞こえなかった

聲？ その聲は
いつ？
やさしく筆り
いつ？

忿怒の
それ、赤い飛沫
やさしくちぎり
それ、赤い飛沫
なにも、沙羅
いつ？
やさしく引き裂き
いつ？
聞こえなかった

聲？ その聲は
なに？
やさしい歯ざしり
なに？

苦痛の
それ、赤い飛沫
やさしい目配せ
それ、赤い飛沫
聲？ その聲は

なに？
やさしい息吹き
なに？
慄きの

聲は、沙羅
ばっさん
みんな
びちゃびちゃ

悲嘆の
赤い飛沫
ささやき
赤い飛沫
なにも、沙羅
びちゃびちゃ
みんな
ばっさん
聞こえなかった

聲は、沙羅
ゆらゆら
みんな
きらきら

叫びの
赤い飛沫
ほほ笑み
赤い飛沫
なにも、沙羅
きらきら
みんな
ゆらゆら
聞こえなかった

沙羅。ほら
きらきら
みんな
ゆらゆら
散り交い
赤い飛沫
ほほ笑み

赤い飛沫
散る。沙羅
　　ゆらゆら
みんな
　　きらきら
散華、ほら

沙羅。ほら
　　びちゃびちゃ
みんな
　　ばっさん
飛び散り
　　赤い飛沫
　　ささやき
　　赤い飛沫
散る。沙羅
　　ばっさん
みんな
　　びちゃびちゃ
散華、ほら

* 複聲部

○1

みんな

ほほ笑み

みんな

みんな

ささやき

みんな

やさしい息吹き

やさしい目配せ

やさしい歯ざしり

やさしく引き裂き

やさしくちぎり

やさしく筆り

○2

きらきら

赤い飛沫

ゆらゆら

びちゃびちゃ

赤い飛沫

ばっさん

なに？

それ、赤い飛沫

なに？

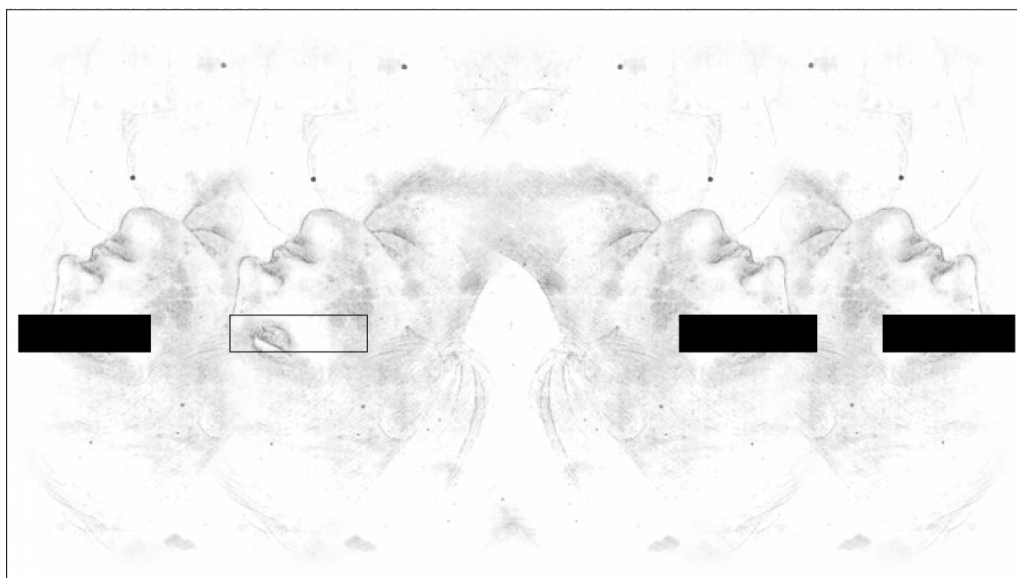
いつ？
それ、赤い飛沫
いつ？

まばたきあった
魔物たち
いく千の目の

まばたきあった
魔物たち
抉って噉った

よろこびの聲
さわがしい
よろこびの響き

めらめら
赤い飛沫
さらさら



二十四偈の伽多//散乱/沙羅、庭/散乱/その乱れは
いま

二十四偈の伽多

散乱

沙羅、庭

散乱

その乱れはいま

沙羅

死んだものらさえ

沙羅

失われたものなど

花の擬態

ブーゲンビリア

その色彩

うす紅、沙羅

散乱

沙羅、庭

散乱

その乱れは

沙羅

生きてある

沙羅

生きるものなど

花の擬態

ブーゲンビリア

その色彩

赤いむらさき、沙羅

散乱

沙羅、庭
散乱
その乱れは

イノチなど
沙羅
はじめから
すでに

イノチなど
沙羅
陽炎の
だから

散乱
沙羅、庭
散乱
その乱れは

沙羅
生も死も
沙羅
なにも沙羅、なにも

花の擬態
ブーゲンビリア
その色彩
真紅、沙羅

沙羅、真紅
その色彩
ブーゲンビリア
花の擬態

なにも沙羅、なにも
沙羅
生も死も
沙羅

その乱れは

散乱
沙羅、庭
散乱

だから
陽炎の
沙羅
イノチなど

すでに
はじめから
沙羅
イノチなど

その乱れは
散乱
沙羅、庭
散乱

赤いむらさき、沙羅
その色彩
ブーゲンビリア
花の擬態

生きるものなど
沙羅
生きてある
沙羅

その乱れは
散乱
沙羅、庭
散乱

うす紅、沙羅
その色彩
ブーゲンビリア
花の擬態

失われたものなど

沙羅
死んだものらさえ
沙羅

その乱れはいま
散乱
沙羅、庭
散乱

二聲の伽多

散乱

泣いてるの？

沙羅、庭

笑ってるの？

散乱

怒ってるの？

その乱れはいま

沙羅

違いはなに？

死んだものらさえ

いま泣いた？ 笑った？ 怒った？

沙羅

あなたはなに？

失われたものなど

花の擬態

雫をながす

ブーゲンビリア

もの音もなく

その色彩

それは涙

うす紅、沙羅

散乱

かなしいの？

沙羅、庭

うれしいの？

散乱

こわいの？

その乱れは

沙羅

曖昧な顔
生きてある
やわらかな顔

沙羅

ほのかなゆがみ
生きるものなど

花の擬態

ひとつぶの雫
ブーゲンビリア
ひとすじの綺羅
その色彩
それは涙
赤いむらさき、沙羅

散乱

息を吐いた
沙羅、庭
ながく

散乱

沙羅は
その乱れは

イノチなど

目を背けもせず
沙羅
その風景に、…凄惨な？
はじめから
残酷な？
すでに

イノチなど

痛ましい？
沙羅
みじめな？

陽炎の

ぶざまな？
だから

散乱

沙羅が？

沙羅、庭

誰れが？

散乱

だから咬みちぎる

その乱れは

沙羅

誰れも死にはしなかった

生も死も

誰れも壊れはしなかった

沙羅

誰れも叫びはしなかった

なにも沙羅、なにも

花の擬態

だから咬みちぎる

ブーゲンビリア

誰れが？

その色彩

沙羅が？

真紅、沙羅

沙羅、真紅

ぶざまな？

その色彩

みじめな？

ブーゲンビリア

痛ましい？

花の擬態

なにも沙羅、なにも

残酷な？

沙羅

その風景に、…凄惨な？

生も死も

その唾中に

沙羅

その乱れは
沙羅は
散乱
ながく
沙羅、庭
息を吐き
散乱

だから
それは涙
陽炎の
綺羅ひとすじ
沙羅
ひとつぶの雫
イノチなど

すでに
ほのかなゆがみ
はじめから
その、やわらかな顔
沙羅
曖昧な顔
イノチなど

その乱れは
こわかった？
散乱
うれしかった？
沙羅、庭
それともかなしい？
散乱

赤いむらさき、沙羅
それは涙
その色彩
その音もなく
ブーゲンビリア
雫をながす
花の擬態

生きるものなど

あなたは

沙羅

いま泣いた？ 笑った？ 怒った？

生きてある

違いはなに？

沙羅

その乱れは

怒ってる？

散乱

笑ってる？

沙羅、庭

泣いてる？

散乱

うす紅、沙羅

違い、なに？

その色彩

いま泣いた？ 笑った？ 怒った？

ブーゲンビリア

あなたは

花の擬態

失われたものなど

雫をながす

沙羅

もの音もなく

死んだものらさえ

それは涙

沙羅

その乱れはいま

かなしいの？

散乱

うれしい？

沙羅、庭

こわい？

散乱

四聲の伽多

散乱

ふるえ

泣いてるの？

ふるえ

沙羅、庭

くちびるに

笑ってるの？

くちびるに

散乱

ふるえ

怒ってるの？

ふるえ

その乱れはいま

沙羅

ゆがみ

違いはなに？

ゆがみ

死んだものらさえ

くちびるに

いま泣いた？ 笑った？ 怒った？

くちびるに

沙羅

ゆがみ

あなたはなに？

ゆがみ

失われたものなど

花の擬態

わななき

雫をながす

わななき
ブーゲンビリア
くちびるに
もの音もなく
くちびるに
その色彩
わななき
それは涙
わななき
うす紅、沙羅

散乱
ふるふると
かなしいの？
ふるえ
沙羅、庭
くちびるに
うれしいの？
くちびるに

散乱
ふるえ
こわいの？
ふるふると
その乱れは

沙羅
ゆららっと
曖昧な顔
ゆがみ
生きてある
くちびるに
やわらかな顔
くちびるに

沙羅
ゆがみ
ほのかなゆがみ
ゆららっと
生きるものなど

花の擬態

ひりひりと
ひとつぶの雫
わななき
ブーゲンビリア
くちびるに
ひとすじの綺羅
くちびるに
その色彩
わななき
それは涙
ひりひりと
赤いむらさき、沙羅

散乱

ゆららっと
息を吐いた
ゆがみ
沙羅、庭
ほら、くちびるに
ながく
ほら、くちびるに

散乱

ゆがみ
沙羅は
ゆららっと
その乱れは

イノチなど

ふるえ
目を背けもせず
ふるふると

沙羅

いまくちびるに
その風景に、…凄惨な？
いまくちびるに
はじめから
ふるふると
残酷な？
そのふるえ
すでに

イノチなど

わななく

痛ましい？

わななく

沙羅

そのくちびるに

みじめな？

そのくちびるに

陽炎の

わななく

ぶざまな？

わななき

だから

散乱

ゆがんだ

沙羅が？

ゆがむ

沙羅、庭

くちびるに

誰れが？

くちびるだけが

散乱

ゆがみ

だから咬みちぎる

ゆがんだ

その乱れは

沙羅

ふるえたのだった

誰れも死にはしなかった

ふるえ

生も死も

くちびるは

誰れも壊れはしなかった

そのくちびるは

沙羅

ふるえていた

誰れも叫びはしなかった

ふるえ
なにも沙羅、なにも

花の擬態

ゆがみ
だから咬みちぎる
ゆがんだ
ブーゲンビリア
くちびるは
誰れが？
そのくちびるは
その色彩
そのゆがみ
沙羅が？
ゆがんだ
真紅、沙羅

沙羅、真紅

わなないて
ぶざまな？
わななき
その色彩
いま、くちびるに
みじめな？
そのくちびるに
ブーゲンビリア
わななき
痛ましい？
わななくままに

花の擬態

なにも沙羅、なにも
ふるふる
残酷な？
だからふるふると

沙羅

いまくちびるは
その風景に、…凄惨な？
くちびるは
生も死も

ふるえた
その唾中に
ふるえていた
沙羅

その乱れは
ゆららっと
沙羅は
ゆがんだよ
散乱

くちびるを
ながく
そのくちびるを
沙羅、庭
ゆがめ
息を吐き
ほら、ゆらがんだ
散乱

だから
ひりひりと
それは涙
ただ、ひりひり
陽炎の
くちびるが
綺羅ひとすじ
くちびるが
沙羅

わなないて
ひとつぶの雫
ひりひりと
イノチなど

すでに
ゆがむのだった
ほのかなゆがみ
ゆららっと
はじめから
くちびるは
その、やわらかな顔

くちびるは、いま
沙羅

ゆららっと
曖昧な顔
ゆがむのだった
イノチなど

その乱れは

ふるえた
こわかった？
ふるふる

散乱

そのくちびる
うれしかった？
くちびるは

沙羅、庭

ふるふると
それともかなしい？
ふるえていたのだ

散乱

赤いむらさき、沙羅

ゆがみつづけ
それは涙
ゆがみ

その色彩

くちびるは
その音もなく
くちびるに

ブーゲンビリア

ゆがんだ
雫をながす
ゆがむ

花の擬態

生きるものなど

ふるえたよ
あなたは
ふるえているよ

沙羅

くちびるに
いま泣いた？ 笑った？ 怒った？
そのくちびるに
生きてある
ふるえ
違いはなに？
ふるえる
沙羅

その乱れは
ゆがみ
怒ってる？
そのゆがみは
散乱

くちびるに
笑ってる？
そのくちびるに
沙羅、庭
ゆがみ
泣いてる？
そのゆがみは
散乱

うす紅、沙羅
わなないて
違い、なに？
わななく
その色彩
くちびるの
いま泣いた？ 笑った？ 怒った？
くちびるは
ブーゲンビリア
わななく
あなたは
わなないて
花の擬態

失われたものなど
ふるふる
雫をながす

ふるえた
沙羅
くちびる
もの音もなく
くちびる
死んだものらさえ
ふるふる
それは涙
ふるえ
沙羅

その乱れはいま
ゆららっと
かなしいの？
ゆらら
散乱
くちびるが
うれしい？
くちびるは
沙羅、庭
ゆがみ
こわい？
ただ、ゆがむ
散乱

* 複聲部

○1

泣いてるの？

笑ってるの？

怒ってるの？

違いはなに？

いま泣いた？ 笑った？ 怒った？

あなたは

雫をながす

もの音もなく

それは涙

かなしいの？

うれしいの？

こわいの？

曖昧な顔

やわらかな顔

ほのかなゆがみ

ひとつぶの雫

ひとすじの綺羅

それは涙

息を吐いた

ながく

沙羅は

目を背けもせず（その唯中に）

その風景に、…凄惨な？

残酷な？

痛ましい？

みじめな？

ぶざまな？

沙羅が？

誰れが？

だから咬みちぎる

誰れも死にはしなかった

誰れも壊れはしなかった

誰れも叫びはしなかった

○ 2

ふるえ

くちびるに

ふるえ

ゆがみ

くちびるに

ゆがみ

わななき

くちびるに

わななき

ふるふると

くちびるに

ふるえ

ゆららっと

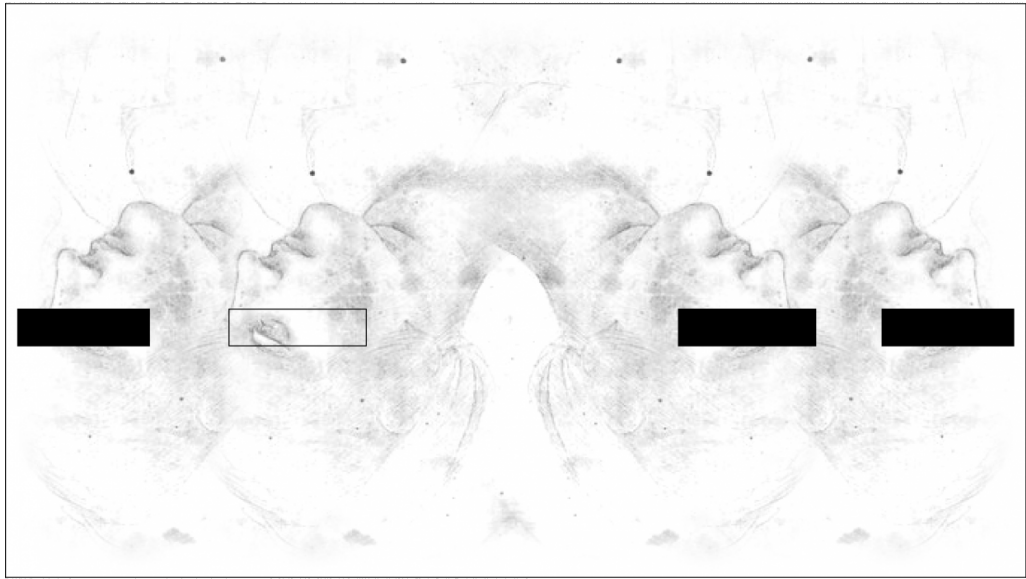
くちびるに

ゆがみ

ひりひりと

くちびるに

わななき



十七偈の伽多//雨だよ/沙羅、ほら/それら/雨

十七偈の伽多

雨だよ
沙羅、ほら
それら
雨

紅の
だから飛沫
色もない
だから飛沫

しぶく
しぶき、散り
しぶく
飛び散り

匂う
雨、匂い
いきものの？
ほろびるものの？

死穢の？
すでにもう
なきものらの？
匂い

沙羅、匂う
匂い
降るそれら
降りそそぎ

沙羅、匂う

匂い
溺れるほどに
その息さえも

浴びる
雨は
雨は
雨は沈み

息さえもう
もう、息も
もう、息も
息さえもう

雨は沈み
雨は
雨は
浴びる

その息さえも
溺れるほどに
匂い
沙羅、匂う

降りそそぎ
降るそれら
匂い
沙羅、匂う

匂い
なきものらの
すでもう
死穢の？

ほろびるものの？
いきものの？
雨、匂い
匂う

しぶく

しづき、散り
しづく
飛び散り

紅の
だから飛沫
色もない
だから飛沫

雨
それら
沙羅、ほら
雨だよ

二聲の伽多

雨だよ

ぬれた牙
沙羅、ほら
黄いろい牙
それら
あなたの牙

雨

紅の

したたるのは唾液
だから飛沫
裂けた舌
色もない
酸性の唾液
だから飛沫

しぶく

擬態の肌
しぶき、散り
紅の、緑りの、茶色の、白の
しぶく
皮膚の擬態
飛び散り

匂う

ひっかく爪
雨、匂い
搔き巻る爪
いきものの？
あなたの爪
ほろびるものの？

死穢の？

柔毛

すでもう

やわらかな光澤

なきものらの？

巻き上がる悪臭

匂い

沙羅、匂う

毛ものだから

匂い

變態しつづけ

降るそれら

化ものだから

降りそそぎ

沙羅、匂う

しめった喉

匂い

のたうちまわり

溺れるほどに

吼えたそれ

その息さえも

浴びる

鱗ら

雨は

綺羅だつ無数の

雨は

或は甲殻

雨は沈み

息さえもう

触手の繁茂

もう、息も

口蓋を掩う

もう、息も

触手の繁茂

息さえもう

雨は沈み

或は甲殻

雨は

綺羅だつ無数の

雨は

鱗ら

浴びる

その息さえも

吼えたそれ

溺れるほどに

のたうちまわり

匂い

しめった喉

沙羅、匂う

降りそそぎ

化ものだから

降るそれら

變態しつづけ

匂い

毛ものだから

沙羅、匂う

匂い

巻き上がる悪臭

なきものらの

やわらかな光擇

すでもう

柔毛

死穢の？

ほろびるものの？

あなたの爪

いきものの？

掻き巻る爪

雨、匂い

ひっかく爪

匂う

しぶく

皮膚の擬態

しぶき、散り

紅の、緑りの、茶色の、白の

しぶく

擬態の肌

飛び散り

紅の

したたるのは唾液

だから飛沫

裂けた舌

色もない

酸性の唾液

だから飛沫

雨

あなたの牙

それら

黄いろい牙

沙羅、ほら

ぬれた牙

雨だよ

四聲の伽多

雨だよ

ゆれた

ぬれた牙

木の葉が

沙羅、ほら

ゆれた

黄いろい牙

ゆれた

それら

木の葉が

あなたの牙

ゆれた

雨

紅の

ぬれた

したたるのは唾液

木の葉が

だから飛沫

ぬれた

裂けた舌

ぬれた

色もない

木の葉が

酸性の唾液

ぬれた

だから飛沫

しぶく

綺羅きら

擬態の肌

にぶく
しぶき、散り
綺羅きら
紅の、緑りの、茶色の、白の
綺羅きら
しぶく
にぶく
皮膚の擬態
綺羅きら
飛び散り

匂う
綺羅めき
ひっかく爪
飛び散った飛沫
雨、匂い
綺羅めき
搔き笔る爪
綺羅めき
いきものの？
飛び散った飛沫
あなたの爪
綺羅めき
ほろびるものの？

死穢の？
ぬらした
柔毛
木の葉を
すでもう
ぬらした
やわらかな光澤
ぬらした
なきものらの？
木の葉を
巻き上がる悪臭
ぬらした
匂い

沙羅、匂う

ゆらした
毛ものだから
木の葉を
匂い

ゆらした
變態しつづけ
ゆらした
降るそれら
木の葉を
化ものだから
ゆらした
降りそそぎ

沙羅、匂う
だから花さえ
しめった喉
花さえ
匂い

びしょびしょ
のたうちまわり
びしょびしょ
濡れるほどに
花さえ
吼えたそれ
だから花さえ
その息さえも

浴びる
きれいだね
鱗ら
きれいだね

雨は
眞っ赤に染まって
綺羅だつ無数の
眞っ赤に染まって
雨は

きれいだね
或は甲殻
きれいだね
雨は沈み

息さえもう
その花さえもう
触手の繁茂
だから花たち
もう、息も
びしょびしょ
口蓋を掩う
びしゃびしゃ
もう、息も
だから花さえも
触手の繁茂
花さえも
息さえもう

雨は沈み
木の葉は
或は甲殻
ぬらした
雨は
ぬらした
綺羅だつ無数の
ぬらした
雨は
ぬらした
鱗ら
木の葉は
浴びる

その息さえも
木の葉ら
吼えたそれ
ぬれた
溺れるほどに
ぬれてた
のたうちまわり
ぬれた
匂い
ぬれて
しめった喉

木の葉は
沙羅、匂う

降りそそぎ

飛び散る飛沫ら
化ものだから
綺羅ら
降るそれら
綺羅めき
變態しつづけ
綺羅きら

匂い

綺羅めき
毛ものだから
飛び散った飛沫
沙羅、匂う

匂い

にぶく
巻き上がる悪臭
きらら綺羅きら
なきものらの
綺羅きら
やわらかな光擇
綺羅ら
すでもう
ららきき
柔毛
にぶく
死穢の？

ほろびるものの？

木の葉ら
あなたの爪
ぬれて
いきものの？
ぬれた
搔き巻る爪
ぬれた

雨、匂い

ぬれて
ひっかく爪
木の葉は
匂う

しぶく
木の葉たち
皮膚の擬態
ゆれて
しぶき、散り
ゆれて
紅の、緑りの、茶色の、白の
ゆれゆれ
しぶく
ゆれて
擬態の肌
木の葉
飛び散り

紅の
ぬれて
したたるのは唾液
木の葉も
だから飛沫
ぬれ
裂けた舌
ぬれ
色もない
木の葉
酸性の唾液
ぬれた
だから飛沫

雨
綺羅らきら
あなたの牙
にぶく
それら
綺羅らん
黄いろい牙

綺羅らん
沙羅、ほら
にぶく
ぬれた牙
綺羅めき
雨だよ

* 複聲部

○ 1

ぬれた牙

黄いろい牙

あなたの牙

したたるのは唾液

裂けた舌

酸性の唾液

擬態の肌

紅の、緑りの、茶色の、白の

皮膚の擬態

ひっかく爪

搔き毟る爪

あなたの爪

柔毛

やわらかな光澤

巻き上がる悪臭

毛ものだから

變態しつづけ

化ものだから

しめった喉

のたうちまわり

吼えたそれ

鱗ら

綺羅だつ無数の

或は甲殻

触手の繁茂
口蓋を掩う
触手の繁茂

○ 2

ゆれた
ゆれた
木の葉が

ぬれた
ぬれた
木の葉が

綺羅きら
綺羅きら
にぶく

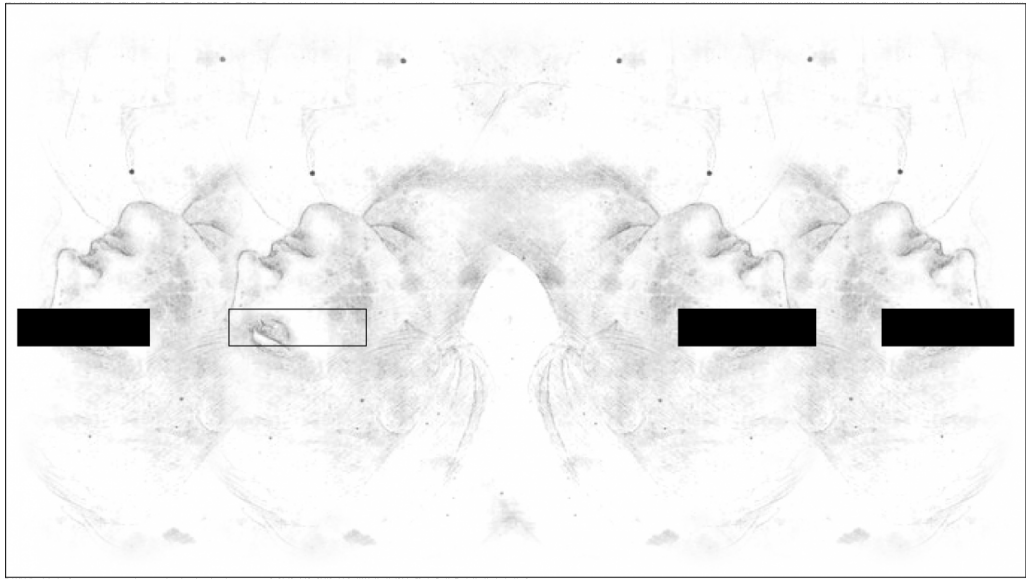
綺羅めき
綺羅めき
飛び散った飛沫

ぬらした
ぬらした
木の葉を

ゆらした
ゆらした
木の葉を

だから花さえ
びしょびしょ
花さえ

きれいだね
真っ赤に染まって
きれいだね



十五偈の伽多//貪るものら/噉らう/貪り噉らうも
のら/噉らい

十五偈の伽多

食るものら
噉らう
食り噉らうものら
噉らい

昏いその
その眼差しに、沙羅
微笑んでさえ
昏いその

眼差しの沙羅
沙羅の狂暴
昏いその
眼差しに、沙羅

何を？ 沙羅
沙羅、ほほえみに
沙羅、何を？
その昏い

眼差しに沙羅
ひとりであなたは
ほほ笑みながら
笑み、沙羅

色彩を、沙羅
飛び散る色
沙羅
紅の、沙羅

色をそめた

沙羅
色にそまり
沙羅、ほら

沙羅、ね？
沙羅
沙羅
沙羅、ね？

沙羅、ほら
色にそまり
沙羅
色をそめた

紅の、沙羅
沙羅
飛び散る色
色彩を、沙羅

笑み、沙羅
ほほ笑みながら
ひとりであなは
眼差しに、沙羅

その昏い
沙羅、何を？
沙羅、ほほえみに
何を？ 沙羅

眼差しに、沙羅
昏いその
沙羅の狂暴
眼差しの沙羅

昏いその
微笑んでさえ
眼差しに、沙羅
昏いその

貪るものら

噉らう
食り噉らうものら
噉らい

二聲の伽多

食るものら

残酷

噉らう

色彩は

食り噉らうものら

残酷

噉らい

昏いその

あかさない

眼差しに、沙羅

色彩は

微笑んでさえ

あかさない

昏いその

眼差しの沙羅

みだれない

沙羅の狂暴

色彩は

昏いその

みだれない

眼差しに、沙羅

何を？ 沙羅

存在しない

沙羅、ほほえみながら

色彩は

沙羅、何を？

存在しない

その昏い

眼差しに、沙羅
過去さえ
ひとりであなは
色彩は
ほほ笑みながら
過去さえ
笑み、沙羅

色彩を、沙羅
未来さえ
飛び散る色
色彩は
沙羅
未来さえ
紅の、沙羅

色をそめた
いまさえ
沙羅
色彩は
色にそまり
いまさえ
沙羅、ほら

沙羅、ね？
永遠にさえも
沙羅
色彩は
沙羅
永遠にさえも
沙羅、ね？

沙羅、ほら
いまさえ
色にそまり
色彩は
沙羅
いまさえ
色をそめた

紅の、沙羅
 未來さえ
沙羅
 色彩は
飛び散る色
 未來さえ
色彩を、沙羅

笑み、沙羅
 過去さえ
ほほ笑み乍ら
 色彩は
ひとりであなは
 過去さえ
眼差しに、沙羅

その昏い
 存在しない
沙羅、何を？
 色彩は
沙羅、ほほえみに
 存在しない
何を？ 沙羅

眼差しに、沙羅
 みだれない
昏いその
 色彩は
沙羅の狂暴
 みだれない
眼差しの沙羅

昏いその
 あかさない
微笑んでさえ
 色彩は
眼差しに、沙羅
 あかさない
昏いその

食るものら

残酷

噉らう

色彩は

貪り噉らうものら

残酷

噉らい

四聲の伽多

食るものら

空に

残酷

鳥たちは

噉らう

燃えた

色彩は

燃えた

食り噉らうものら

鳥たちは

残酷

空に

噉らい

昏いその

失神

あかさない

空は

眼差しに、沙羅

すでに

色彩は

すでに

微笑んでさえ

空は

あかさない

失神

昏いその

眼差しの沙羅

燃えた

みだれない

だから鳥らは
沙羅の狂暴
鳥たち
色彩は
鳥たち
昏いその
だから鳥らは
みだれない
燃えた
眼差しに、沙羅

何を？ 沙羅
残し香も
存在しない
燃え盡き
沙羅、ほほえみながら
もう
色彩は
もう
沙羅、何を？
燃え盡き
存在しない
残し香も
その昏い

眼差しに、沙羅
名残りさえ
過去さえ
捨て置き
ひとりあなたは
残像
色彩は
残像
ほほ笑みながら
捨て置き
過去さえ
名残りさえ
笑み、沙羅

色彩を、沙羅

誰れも
未来さえ
誰れも
飛び散る色
見なかった
色彩は
見なかった
沙羅
誰れも
未来さえ
誰れも
紅の、沙羅

色をそめた
その焰さえ
いまさえ
燃えあがり
沙羅
だから
色彩は
だから
色にそまり
燃えあがり
いまさえ
その焰さえ
沙羅、ほら

沙羅、ね？
ほら
永遠にさえも
いま
沙羅
すべて失神
色彩は
すべて失神
沙羅
いま
永遠にさえも
ほら
沙羅、ね？

沙羅、ほら
燃えあがり
いまさえ
その焰さえ
色にそまり
だから
色彩は
だから

沙羅
その焰さえ
いまさえ
燃えあがり
色をそめた

紅の、沙羅
誰れも
未来さえ
誰れも

沙羅
見なかった
色彩は
見なかった
飛び散る色
誰れも
未来さえ
誰れも
色彩を、沙羅

笑み、沙羅
捨て置く
過去さえ
名残りさえ
ほほ笑み乍ら
残像
色彩は
残像
ひとりではあなたは
名残りさえ
過去さえ

捨て置く
眼差しに、沙羅

その昏い
燃え盡きた
存在しない
残し香も
沙羅、何を？
もう
色彩は
もう
沙羅、ほほえみに
残し香も
存在しない
燃え盡きた
何を？ 沙羅

眼差しに、沙羅
だから鳥ら
みだれない
燃えた
昏いその
鳥たち
色彩は
鳥たち
沙羅の狂暴
燃えた
みだれない
だから鳥ら
眼差しの沙羅

昏いその
空は
あかさない
失神
微笑んでさえ
すでに
色彩は
すでに
眼差しに、沙羅

失神
あかさない
空は
昏いその

貪るものら
鳥たちは
残酷
空に
噉らう
燃えた
色彩は
燃えた
貪り噉らうものら
空に
残酷
鳥たちは
噉らい

* 複聲部

○ 1

残酷

色彩は

残酷

あかさない

色彩は

あかさない

みだれない

色彩は

みだれない

存在しない

色彩は

存在しない

過去さえ

色彩は

過去さえ

未来さえ

色彩は

未来さえ

いまさえ

色彩は

いまさえ

永遠にさえも

色彩は

永遠にさえも

○2

空に

燃えた

鳥たちは

失神

すでに

空は

燃えた

鳥たち

だから鳥ら

残り香も

もう

燃え盡きた

名残りさえ

残像

捨て置く

誰れも

見なかった

誰れも

その焔さえ

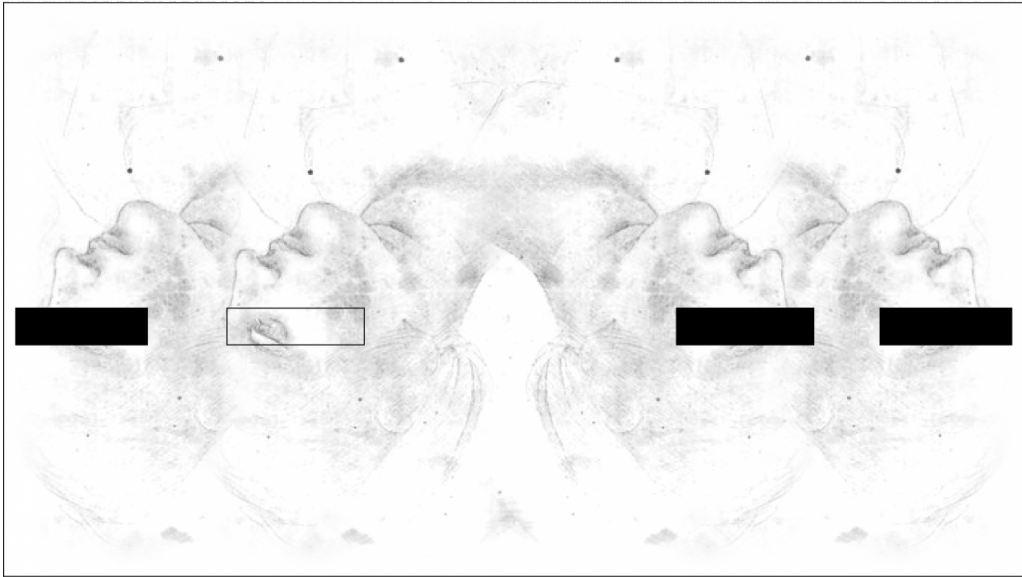
だから

燃えあがり

ほら

すべて失神

ほら



七偈の伽多//沙羅は笑った/笑った/ひとりで/だから
癡呆

七偈の伽多

沙羅は笑った
笑った
ひとりで
だから癡呆

沙羅。虹彩
綺羅
聲立て笑い
ゆらいだ

上半身だけ
引き攣った？
腕だけ
のけぞった？

首だけ
知性などない
智慧さえもない
首だけ

のけぞった？
腕だけ
引き攣った？
上半身だけ

ゆらいだ
聲立て笑い
綺羅
沙羅。虹彩

だから癡呆

ひとりで
笑った
沙羅は笑った

二聲の伽多

沙羅は笑った

しずかだったから

笑った

もうどうしようもなく

ひとりで

しずかだったから

だから癡呆

沙羅。虹彩

さんさんと

綺羅

ひかりたち

聲立て笑い

そそぎ

ゆらいだ

上半身だけ

あかるかったから

引き攣った？

もうどうしようもなく

腕だけ

あかるかったから

のけぞった？

首だけ

こゑをたててわらうのだった

知性などない

沙羅は

智慧さえもない

こゑをたててわらうのだった

首だけ

のけぞった？

あかるかったから

腕だけ

もうどうしようもなく

引き攣った？

あかるかったから

上半身だけ

ゆらいだ

そそぎ

聲立て笑い

ひかりたち

綺羅

さんさんと

沙羅。虹彩

だから癡呆

しずかだったから

ひとりで

もうどうしようもなく

笑った

しずかだったから

沙羅は笑った

* 複聲部

○1

しずかだったから
もうどうしようもなく
しずかだったから

さんさんと
ひかりたち
そそぎ

あかるかったから
もうどうしようもなく
あかるかったから

こゑをたててわらうのだった
沙羅は
こゑをたててわらうのだった

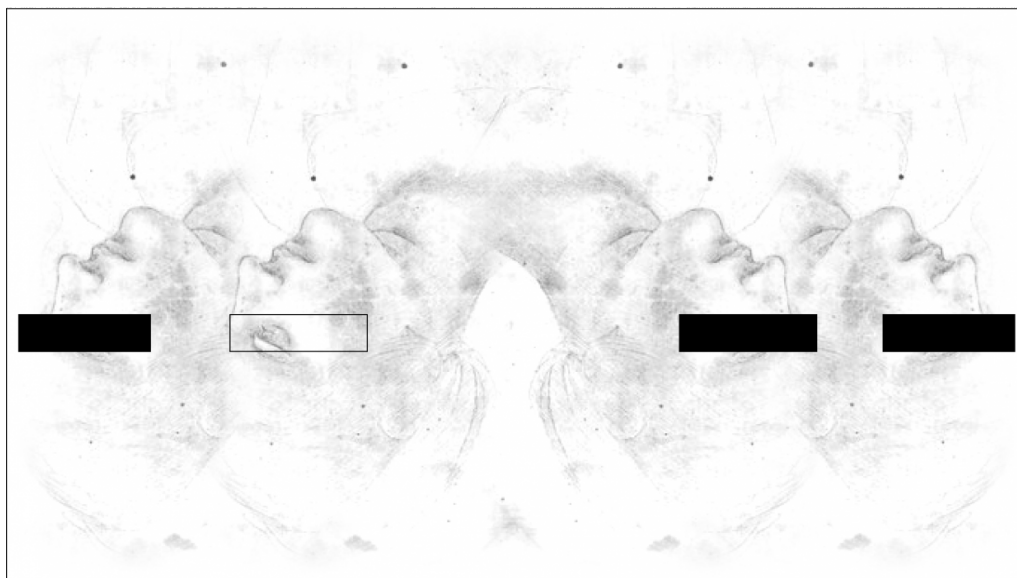
○2

裂かれて
擦られたように
雲さえ

ただ白く
遠く
綺羅めきながら

だから思わず
沙羅は
息を呑む

それは、きれい
ほら沙羅、いま
それが、きれい



四聲の伽多

沙羅は笑った
裂かれて
しずかだったから
雲さえ
笑った
擦られたように
もうどうしようもなく
擦られたように
ひとりで
雲さえ
しずかだったから
裂かれて
だから癡呆

沙羅。虹彩
ただ白く
さんさんと
綺羅めきながら
綺羅
遠く
ひかりたち
遠く
聲立て笑い
綺羅めきながら
そそぎ
ただ白く
ゆらいだ

上半身だけ
だから思わず
あかるかったから

息を呑む
引き攣った？
沙羅は
もうどうしようもなく
沙羅は

腕だけ
息を呑む
あかるかったから
だから思わず
のけぞった？

首だけ
それは、きれい
こゑをたててわらうのだった
それが、きれい
知性などない

ほら沙羅、いまその
沙羅は
智慧さえもない
それが、きれい
こゑをたててわらうのだった
それは、きれい

首だけ

のけぞった？
息を呑む
あかるかったから
だから思わず

腕だけ
沙羅は
もうどうしようもなく
沙羅は
引き攣った？

息を呑む
あかるかったから
だから思わず
上半身だけ

ゆらいだ
綺羅めきながら

そそぎ
ただ白く
聲立て笑い
遠く
ひかりたち
遠く
綺羅
ただ白く
さんさんと
綺羅めきながら
沙羅。虹彩

だから癡呆
雲さえ
しずかだったから
裂かれて
ひとりで
擦られたように
もうどうしようもなく
擦られたように
笑った
裂かれて
しずかだったから
雲さえ
沙羅は笑った

十偈の伽多//沙羅。死ななかつた/だれも/すでに/
もはや

十偈の伽多

沙羅。死ななかつた
だれも
すでに
もはや

華麗なくらい
死んだふりをした
みんな
生き生きと上手に

聲なす鳥
鳴る羽搏き
響くのは
頭上に

聲なす葉
枝ら、花ら
響くのは
頭上に

終わったよ。だから
もう、沙羅
ほら燃える色ら
原野

まばたいた
目のない沙羅は
口のない沙羅は
息をはく

原野

ほら燃える色ら
もう、沙羅
終わったよ。だから

頭上に
響くのは
枝ら、花ら
聲なす葉

生き生きと上手に
みんな
死んだふりした
華麗なくらい

もはや
すでに
だれも
沙羅。死ななかつた

二聲の伽多

沙羅。死ななかつた

ほら、いま

だれも

みんな

すでに

ふれあつて

もはや

華麗なくらい

ほら、みんな

死んだふりをした

いま

みんな

くらいあつて

生き生きと上手に

聲なす鳥

ほら、みんな

鳴る羽搏き

いま

響くのは

ささやきあつて

頭上に

聲なす葉

ほら、いま

枝ら、花ら

みんな

響くのは

みつめあつて

頭上に

終わったよ。だから

ほら、いま

もう、沙羅

みんな

ほら燃える色ら

かぎあって

原野

まばたいた

ほら、いま

目のない沙羅は

ぼくら

口のない沙羅は

ききあって

息をはく

原野

ぼくらはみんな

ほら燃える色ら

みんなはぼくら

もう、沙羅

なんのちがいも

終わったよ。だから

頭上に

なんらちがいは

響くのは

みんなはぼくら

枝ら、花ら

ぼくらはみんな

聲なす葉

生き生きと上手に

ききあって

みんな

いま

死んだふりした

ほら、みんな

華麗なくらい

もはや
かぎあって
すでに
みんな
だれも
ほら、いま
沙羅。死ななかつた

四聲の伽多

沙羅。死ななかつた
原野
ほら、いま
造化の原野に
だれも
その
みんな
その
すでに
造化の原野に
ふれあって
原野
もはや

華麗なくらい
原野
ほら、みんな
イノチの原野に
死んだふりをした
その
いま
その
みんな
イノチの原野に
くらいあって
原野
生き生きと上手に

聲なす鳥
造花の群れ
ほら、みんな

擬態の群れ
鳴る羽搏き
造花の擬態
いま
擬態の造花
響くのは
群れなす擬態
ささやきあって
造花の群れ
頭上に

聲なす葉
イノチの原野に
ほら、いま
原野
枝ら、花ら
その
みんな
それら
響くのは
原野に
みつめあって
イノチの原野
頭上に

終わったよ。だから
造化の原野に
ほら、いま
原野
もう、沙羅
それら
みんな
それら
ほら燃える色ら
原野に
かぎあって
造花の原野
原野

まばたいた

原野に
ほら、いま
イノチなす原野
目のない沙羅は
その
ぼくら
この
口のない沙羅は
イノチの原野に
ききあって
原野
息をはく

原野
造花らの群れ
ぼくらはみんな
擬態の群れら
ほら燃える色ら
擬態の造化
みんなはぼくら
造化の擬態
もう、沙羅
群れた造花ら
なんのちがいも
擬態の群れら
終わったよ。だから

頭上に
イノチの原野
なんらちがいは
原野に
響くのは
この
みんなはぼくら
それら
枝ら、花ら
原野に
ぼくらはみんな
イノチの原野に
聲なす葉

生き生きと上手に

造花の原野

ききあって

原野に

みんな

その

いま

この

死んだふりした

原野

ほら、みんな

造化の原野に

華麗なくらい

もはや

原野に

かぎあって

イノチの原野

すでに

これら

みんな

その

だれも

イノチの原野

ほら、いま

原野に

沙羅。死ななかつた

*複聲部

○1

ほら、いま

みんな

ふれあって

ほら、みんな

いま

くらいあって

ほら、いま

みんな

ささやきあって

ほら、いま

みんな

みつめあって

ほら、いま

みんな

かぎあって

ほら、いま

みんな

ききあって

ぼくらはみんな

みんなはぼくら

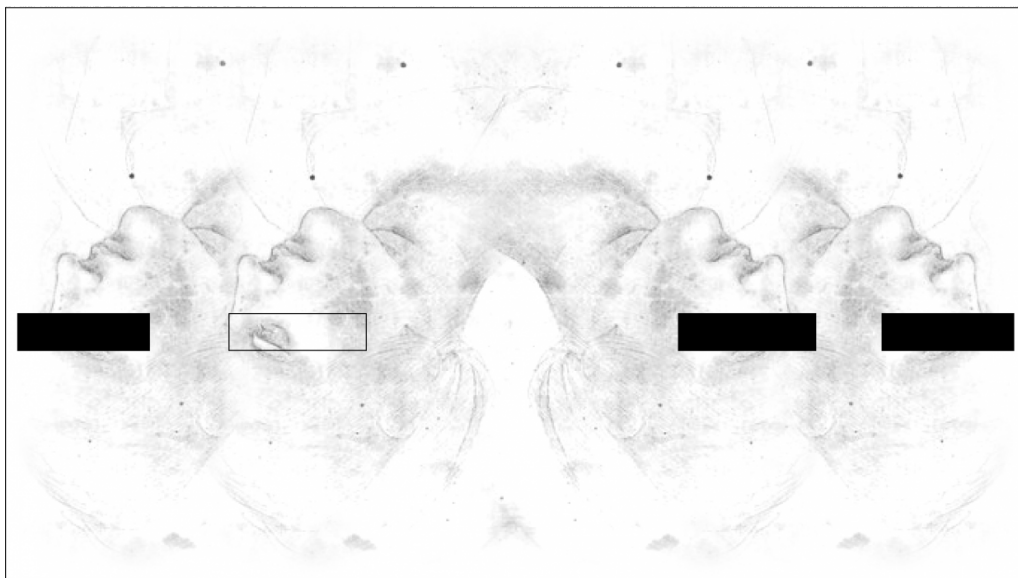
なんのちがいても

○2

原野
その
造化の原野に

原野
その
イノチの原野に

造花の群れ
造花の擬態
擬態の群れ



三偈の伽多//目をあけて/沙羅。その/きれいな/綺
羅ら。その虹彩

三偈の伽多

目をあけて
沙羅。その
きれいな
綺羅ら。その虹彩

ほら、こんなにすべてはうつくしい
ほら、こんなにみんなはうつくしい
ほら、こんなにあなたはうつくしい
ほら、こんなにひたすらうつくしい

綺羅ら。その虹彩
きれいな
沙羅。その
目をあけて

二聲の伽多

目をあけて
ずたずだ
沙羅。その
ぼろろ
きれいな
でろてろ
綺羅ら。その虹彩

ほら、こんなにすべてはうつくしい
ばらばら
ほら、こんなにみんなはうつくしい
ばらばら
ほら、こんなにあなたはうつくしい
ばらばら
ほら、こんなにひたすらうつくしい

綺羅ら。その虹彩
てらてろ
きれいな
でいらでいら
沙羅。その
うんばー
目をあけて

四聲の伽多

目をあけて

縫いあわせちゃう？

ずたずだ

孔ぜんぶ

沙羅。その

まぶた

ぼろろ

鼻も

きれいな

縫っちゃう？

でろてろ

耳も

綺羅ら。その虹彩

ほら、こんなにすべてはうつくしい

耳も

ばらはら

縫っちゃう？

ほら、こんなにみんなはうつくしい

鼻も

ばらばら

まぶた

ほら、こんなにあなたはうつくしい

孔ぜんぶ？

はらばら

縫いあわせちゃう？

ほら、こんなにひたすらうつくしい

綺羅ら。その虹彩

ぶち込んじゃう？

てらてろ

孔ぜんぶ
きれいな
孔
でいらでいら
額も
沙羅。その
ぶち込みつぶす？
うんぱー
顎も
目をあけて

* 複聲部

○1

ずたずだ

ぼろろ

でろてろ

ばらはら

ばらばら

はらばら

てらてろ

でいらでいら

うんばー

○2

縫いあわせちゃう？

まぶた

縫っちゃう？

耳も

鼻も

孔ぜんぶ

ぶち込んじゃう？

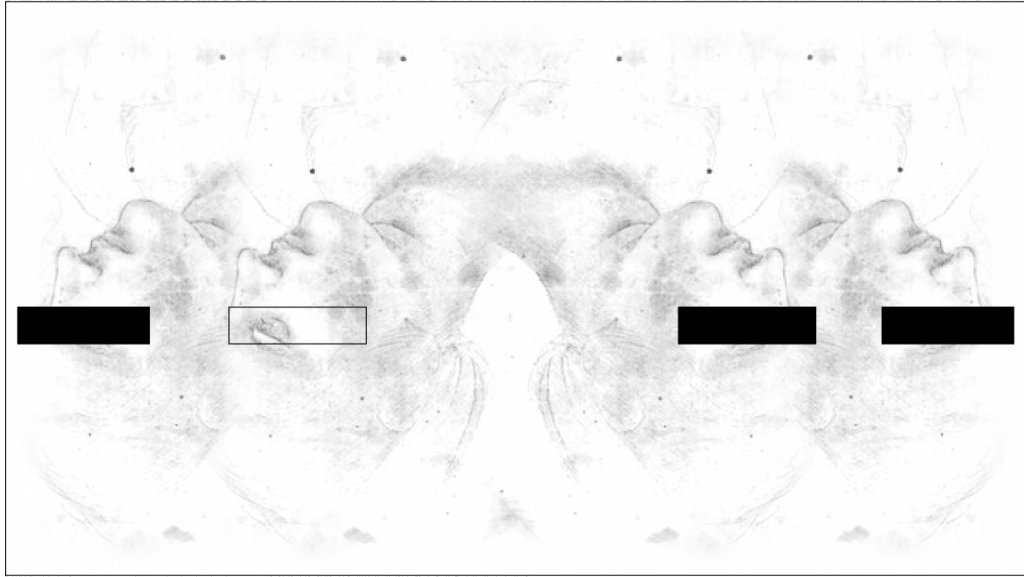
孔

ぶち込みつぶす？

顎も

額も

孔ぜんぶ



五偈の伽多//世界はやさしい/みんなにやさしい/
化ものたち/前例もない

五偈の伽多

世界はやさしい
みんなにやさしい
化ものたち
前例もない

息吹きをゆらし
まばたいて
ふるえ
沙羅

すべては綺羅ら
綺羅きら綺羅ら
綺羅きら綺羅ら
すべては綺羅ら

沙羅
ふるえ
まばたいて
息吹きをゆらし

前例もない
化ものたち
みんなにやさしい
世界はやさしい

二聲の伽多

世界はやさしい
あふれかえる
みんなにやさしい
ただ、もう
化ものたち
やさしさにだけつつまれて
前例もない

息吹きをゆらし
こぼれだす
まばたいて
ただ、もう
ふるえ
やさしさにだけつつまれて
沙羅

すべては綺羅ら
ほら、すでに
綺羅きら綺羅ら
原野にきらきら
綺羅きら綺羅ら
もう、すでに
すべては綺羅ら

沙羅
やさしさにだけつつまれて
ふるえ
ただ、もう
まばたいて
こぼれだす
息吹きをゆらし

前例もない

やさしさにだけつまれて

化ものたち

ただ、もう

みんなにやさしい

あふれかえる

世界はやさしい

四聲の伽多

世界はやさしい

イノチの綺羅めき

あふれかえる

果てさえもない

みんなにやさしい

途方もなく

ただ、もう

途方もなく

化ものたち

果てさえもない

やさしさにだけつつまれて

イノチの綺羅めき

前例もない

息吹きをゆらし

イノチの綺羅めき

こぼれだす

盡きさえしない

まばたいて

限りなく

ただ、もう

翳りなく

ふるえ

盡きさえしない

やさしさにだけつつまれて

イノチの綺羅めき

沙羅

すべては綺羅ら

光りらざわめき

ほら、すでに

その静寂のうちに
綺羅きら綺羅ら
翳りらざわめき
原野にきらきら
翳りらざわめき
綺羅きら綺羅ら
その静寂のうちに
もう、すでに
光りらざわめき
すべては綺羅ら

沙羅
盡きさえない
やさしさにだけつつまれて
イノチの綺羅めき
ふるえ
限りなく
ただ、もう
限りなく
まばたいて
イノチの綺羅めき
こぼれだす
盡きさえない
息吹きをゆらし

前例もない
果てさえもない
やさしさにだけつつまれて
イノチの綺羅めき
化ものたち
途方もなく
ただ、もう
途方もなく
みんなにやさしい
イノチの綺羅めき
あふれかえる
果てさえもない
世界はやさしい

* 複聲部

○1

あふれかえる

ただ、もう

やさしさにだけつつまれて

こぼれだす

ただ、もう

やさしさにだけつつまれて

ほら、すでに

原野にきらきら

もう、すでに

○2

イノチの綺羅めき

途方もなく

果てさえもない

イノチの綺羅めき

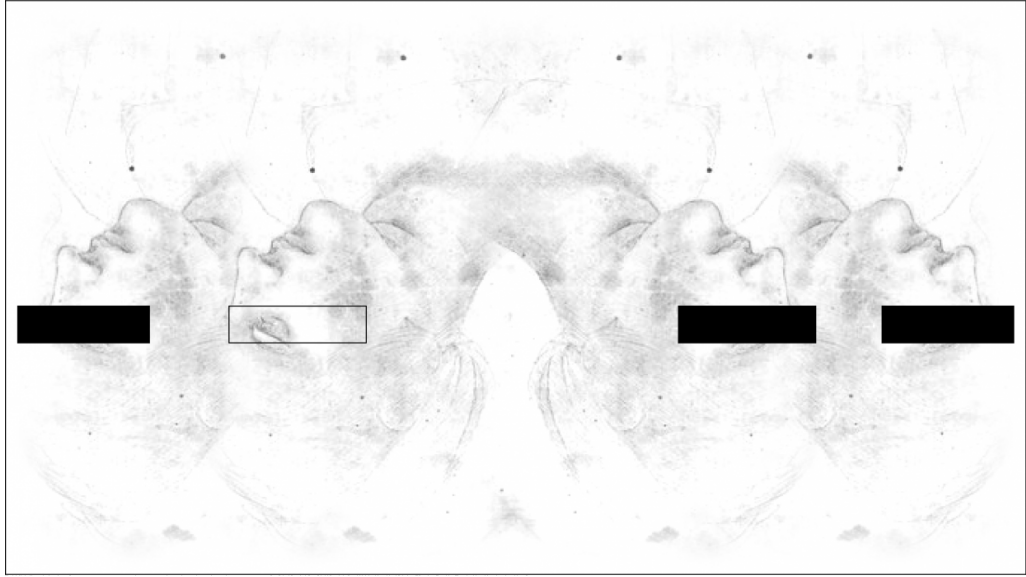
限りなく

盡きさえしない

光りらざわめき

翳りらざわめき

その静寂のうちに



* * *

四聲の伽多

ブーゲンビリア
 ゆらぐ
すでにひろがり
 ゆらぎ
花、色葉、あふれ
 色彩。それら
燃え盡き
 色彩。それら
散乱し、それら
 ゆらぎ
すでに
 ゆらぐ
色彩ら、かおり

翳り。庭に
 捕らわれ
 焰。それら
 蝶ら
光り。庭に
 何に？
 彩色。不可視
 何に？
横溢し、その
 蝶ら
 ゆらぎ
 捕らわれ
それは何？

眞夏。光り
 ちぎられ
 焰。それら

蝶ら
正午。光り
 何に？
かたち。不可視
 何に？
あふれ、翳り、その
 蝶ら
 ゆらぎ
 ちぎられ
それは何？

いちどもなかった
 ゆらぎ
陽炎のよう
 散り交う
わたしがわたしであったことなど
 蝶ら
 蝶らのように
 蝶ら
いちども
 散り交う
 陽炎のように
 ゆらぎ
すでに

なにも生まれも滅びもなにも
 瀑布。もはや
 なんら差異など
 暴流。もはや
さらすべきなにも、かたちもなにも
 ゆらぐ色ら
 焰と蝶に
 ゆらぐ色ら
隠すべきなにも、秘密もなにも
 暴流。もはや
 なんら差異など
 瀑布。もはや
なにも在りも消え去りもなにも
すでに

散り交う
陽炎のように
ゆらぐ
いちども
蝶ら
蝶らのように
蝶ら
あなたがあなたであったことさえ
ゆらぐ
陽炎のよう
散り交う
いちどもなかった

それは何？
ちぎられ
ゆらぎ
蝶ら
あふれかえり、その
何に？
かたち。不可視
何に？
正午。翳り
蝶ら
焰。それら
ちぎられ
眞夏。光り

それは何？
捕らわれ
ゆらぎ
蝶ら
横溢し、その
何に？
彩色。不可視
何に？
光り。庭に
蝶ら
焰。それら
捕らわれ
翳り。庭に

色彩ら、かおり
 ゆらぎ
すでに
 ゆらぐ
散乱し、それら
 色彩。それは
燃え盡き
 それは色彩
花、色葉、あふれ
 ゆらぐ
すでにひろがり
 ゆらぎ
ブーゲンビリア

二聲の伽多

ブーゲンビリア
すでにひろがり
花、色葉、あふれ
燃え盡き
散乱し、それら
すでに
色彩のかおり

翳り。庭に
焰。その
光り。庭に
彩色。不可視
横溢し、その
ゆらぎ
それは何？

眞夏。光り
焰。その
正午。翳り
かたち。不可視
あふれかえり、その
ゆらぎ
それは何？

いちどもなかった
陽炎のよう
わたしがわたしであったことなど
蝶らのように
いちども
陽炎のように
すでに

なにも生まれも滅びもなにも
なんら差異など
さらすべきなにも、かたちもなにも
焔と蝶に
隠すべきなにも、秘密もなにも
なんら差異など
なにも在りも消え去りもなにも

すでに
陽炎のように
いちども
蝶らのように
あなたがあなたであったことさえ
陽炎のよう
いちどもなかった

それは何？
ゆらぎ
あふれかえり、その
かたち。不可視
正午。翳り
焔。その
眞夏。光り

それは何？
ゆらぎ
横溢し、その
彩色。不可視
光り。庭に
焔。その
翳り。庭に

色彩ら、かおり
すでに
散乱し、それら
燃え盡き
花、色葉、あふれ
すでにひろがり
ブーゲンビリア

九偈の伽多

ブーゲンビリア
花、色葉、あふれ
散乱し、それら
色彩のかおり

翳り。庭に
光り。庭に
横溢し、その
それは何？

眞夏。光り
正午。翳り
あふれかえり、その
それは何？

いちどもなかった
わたしがわたしであったことなど
いちども
すでに

なにも生まれも滅びもなにも
さらすべきなにも、かたちもなにも
隠すべきなにも、秘密もなにも
なにも在りも消え去りもなにも

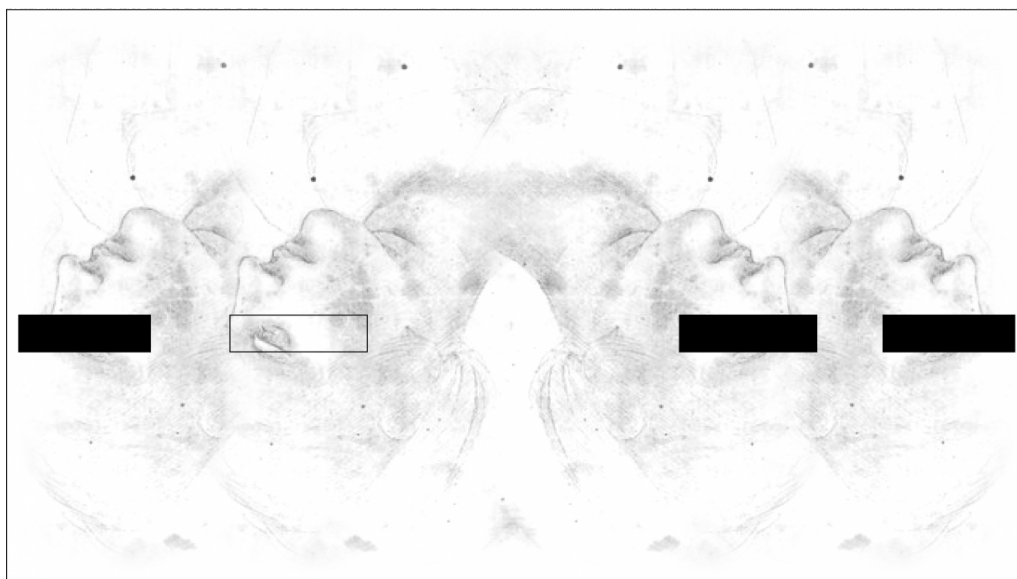
すでに
いちども
あなたがあなたであったことなど
いちどもなかった

それは何？

あふれかえり、その
正午。翳り
眞夏。光り

それは何？
横溢し、その
光り。庭に
翳り。庭に

色彩のかおり
散乱し、それら
花、色葉、あふれ
ブーゲンビリア



奥書

以上は黎マに依って二〇二一・一一・〇三- 〇六に書かれた

ホームページ

<https://senolema.amebaownd.com/>



amel

流波 rūpa 伽多

著 黎マ

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
